

---

# **まよチキ！ダブル！！**

リプトン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

まよチキ！ダブル！！

### 【NZコード】

N4056Y

### 【作者名】

リプトン

### 【あらすじ】

オレ、庭渡<sup>二ワト</sup> 理桜<sup>リオウ</sup>は私立浪嵐学園で平和で平凡な生活を送っていた。だけど、幼馴染み兼親友で変な「体质」仲間のジローこと坂町<sup>サカマチ</sup>近次郎<sup>キンジロウ</sup>に巻き込まれ（？）、それを手放すことになった。あの時、ジローとさえ行動していなかつたら……。オレオレとジローは執事の秘密を知り、お嬢様に弱点を握られた。さまざまな女の子たちと過ごす学園ラブコメディー。（処女作なので駄作間違いなしですがそれでも良いと言つ方は是非読んでください。）



## プロローグ

side ジロー 幼馴染みで親友の庭渡 理桜と一緒に登校している。俺はこいつの事をリオと呼んでいる。

リオ「なあ、ジロー」

ジロー「なんだ?」

門の前にはリムジンが止まっており、そこには浪嵐学園の有名人二人が立っていた。一人はこの学園の理事長の一人娘である涼月奏。

リオ「なんでスバル様は執事なんてしてるんだろうな?」

リオはもう一人、燕尾服を着た近衛 スバルを指して、そんな疑問を投げてきた。

ジロー「今更な質問だな」

執事。そう、近衛スバルの職業は紛れもなく執事なのだ。あの燕尾服はコスプレなんかじゃないのだ。いや、ね。俺だって初めて聞い

たときは耳を疑いましたよ？ 執事って、なんだよそりゃ。冗談じやない。なんでそんな職業がこの現代社会に生き残つてんだよ。しかも普通に高校に通いやがつて。もういつそのこと天然記念物で も

リオ「メイドだよな」

ジロー「は？」

リオ「いやだつて……スバル様つて……やるなら執事じゃなくてメイドつて感じだろ」

ジロー「はい？」

俺は幼馴染みで親友の言葉に思考を中断させ、目眩を覚えた。

ジロー「おい、リオ。大丈夫か？」

いくら、スバル様が女顔だからってそれは失礼だろ。

リオ「……オレは正氣だ……と思いたい……」

リオは自信無をひびいて言った。この時、俺はリオがおかしくなったと思った。だが、それは俺のおおいな間違いだった。そう、放課後に悪いしらわれることになるのだ。

## オリキヤラ紹介（前書き）

オリキヤラ・リオっちのプロフィールです

## オリキャラ紹介

庭渡 ニワト  
理桜 リオウ

(男)

身長 178cm  
体重 57kg

容姿

- ・顔は中の上
- ・目と髪は灰色。学園時はカツラ（黒）+カラコン（黒）。
- ・髪型はツンツン。

特技

- ・家事全般
- ・リフティング

趣味

- ・昼寝
- ・読書
- ・料理
- ・サッカー

- ・女性
- ・苦手なもの
- ・ホットケーキ
- ・コーヒー
- ・サッカー
- ・好きなもの

・ 同性愛

\*

・ 欧州系のクオーター。母親がハーフ。欧洲系の血を強く色濃く受け継いでしまったので髪と瞳の色が灰色。目立つからと学園ではプライバシーを変装している。

・ 名前は父（友理）の『理』と母（桜）の『桜』を合わせて付けられた。フルネームにコンプレックスあり。

・ とある事件に巻き込まれ、女性恐怖症となってしまった。

## オリキヤラ紹介（後書き）

リオ「ずいぶんと内容の『新しい紹介だな』

リプトン「モロマジ愛嬌つてことで」

リオ「オレの性格とかは？」

リプトン「本編を読んでもらひしかないね」

リオ「いい加減すぎるだろ」

リプトン「しかたないんだって。ボクに文才がないんだから」

リオ「…………はあ…………先行き不安だけどみなさん、こんなんですけどこの小説をよろしくお願いします」

## 第1話

s i d e リオ

ジロー「なあ、リオ」

リオ「なんだ、ジロー」

ジロー「じつじついつなつた?」

リオ「オレが聞きたいぞ」

オレたちは今、理科室に籠城し、小声で会話をしていた。扉の前には机やら椅子やらでバリケードが形成されていた。

リオ「……ただ一つ言えることは……」

ジロー「言えることは?」

リオ「アイツに捕まればdead end直行、間違いない

不穏な会話をしているよな? けどしかたないんだ。今、オレたち

はこの学園で敵に回してはいけないトップスリーに入っているであらうスバル様相手にリアル鬼ゴッコ中なのだから。なぜ、リアル鬼ゴッコをしてるかつて？ ジローがスバル様のパンツを見てしまつたらしいんだ。運悪くオレもそこに居合わせていたので追われてるんだ。それで、殴ると言つスバル様の家に代々伝わるテンジャラスな執事流記憶消去術から全力で逃れなければならない。捕まつたら記憶どころかオレたち自身がテリートされかねないからな。ってか、オレはなんも見てないのに！

ジロー「し、洒落になつてねえぞ」

リオ「洒落じゃない。マジだ」

オレは近くにあつた人体模型（通称ジョニー）でバリケードを補強

、ドキヤツ！

した瞬間、理科室に響く破碎音。ひどく嫌な予感を感じながら音のした方を見ると、そこには鮮やかに宙を滑空するドアの姿。スバル様がドアを蹴破っていた。様になつてますねえ。

「おおおーー？」

弾け飛んだドアをかわすオレとジロー。そして、がちゃがちゃと音を立てて床にぶちまけられるジョニーの内蔵たち。うわあ、悲惨だ。

スバル「追い詰めたぞ」

ジロー「うああああっ！」

理科室に入つてくるスバル様目掛けてジローは全力でジョニーをフルスイングした。だが、それも虚しく

スバル「なめるな！」

怒号一閃。打ち込まれたスバル様の右ストレートがジョニーの首から上を吹つ飛ばしていた。サヨナラ、ジョニー。オマエのことは忘れないぜ。

ジロー「ふう……」

覚悟を決めたのかジローはゆっくりと拳を構えた。頭部をガード出来るよう両腕をしつかり上げた構え。これはジローに最も向いたスタイル。そう、オレもジローもズブの素人つてわけじゃないんだな、これが。

スバル「やつとやる気になつたみたいだな」

ジローに応えるように、スバル様もファイティングポーズを取つた。ちなみにオレはなんも構えない。だって、逃げるために体力温存しどきたいもん。

スバル「今度こそ仕留めてやるぞ。ボクの『執事ナックル』でな」

リ・ジ「……」

うわあ、ダセエ。なんだよ、執事ナックルって。

ジロー「どうでもいいけど、オマエってネーミングセンスないな

スバル「なつ……何を言つ！　かつこいだろ！？　ほら、執事ナックル！」

リオ「いや、かつこ悪いよ。執事ナックル」

率直な感想を伝えてやると、スバル様は顔を赤くしてうつむいて唸つ

た。

スバル「くう……」んな侮辱を受けたのは生まれて初めてだ。もつ、許さないぞ。おまえたちには、ボクの必殺技を喰らわせてやる」

リオ「必殺技?」

スバル「そつ、呑ひかけて『ヒンド・オブ・アース』」

ジロー「スケールでけえええつ! 滅ぼしてんじやん、地球うつづつ!」

ジローの渾身のツッコミが決まった。

リオ「やつぱり、そのネーミングセンスはびつかと思つよ」

スバル「う、つむかいない! ボクのネーミングにケチをつけんなー!」

リ・ジ「……」

リオ「うめぐ、オレたちが悪かったよ。オマエだつて、一生懸命考

えたんだよな……」

ジロー「ごめん、俺たちが悪かったよ。おまえだって、一生懸命考  
えたんだよな……」

スバル「ハモるな！ なんだその悟りきつた顔は！ そんな可哀想  
なものを見るような目でこっちを見るなよ！」

くわう……かつこいいと思ったのに……一週間もかけて考えたのに  
……とスバル様は小さな子供みたいに口唇を尖らせて拗ねた。何?  
この可愛い生き物……。

リオ「！？」

気付いた。スバル様の横にある棚。その上にある大きな硝子製のビ  
ーカーが、今にも落ちようとしていた。

ジロー「避けろー！」

ジローが反射的に体を動かしていた。不意に張り上げた声にスバル  
様は口を開けてぽかんとしている。どさりとジローがスバル様を押  
し倒した。そして、オレも落ちてきたビーカーをなんとか掴めた。

リオ「ふう……ってあぶねえ！？」

安堵したのも束の間、他にもあつたビーカーが時間差で落ちてきていた。オレは咄嗟に避けた。ビーカーは呆氣なく碎け破片が散らばつっていた。

スバル「さやああああああ！」

リオ「なんだ？」

女の子みたいな甲高い悲鳴。

ジロー「！」

振り向くとジローが宙を浮いていた。ビーカーの破片を避けるよう理科室の床にダイブしていた。運の良いヤツだ。

リオ「ジ、ジロー？ オマエ、なんで鼻血が……」

ジロー「ジ、ジロー？ オマエ、なんな、どうじて……」

おかしなことに、頸を殴られたはずのジローは、なぜか真っ赤な鼻

血を出していった。ジローは女性に触られただけで、鼻血が出て、最終的には失神してしまうという稀有な体质な女性恐怖症だ。スバル様を見るとはだけた服からは案の定、胸が膨らんでいた。うん、確定だ。スバル様は女だ。やっぱりオレは間違つてなかつたんだ！

スバル「殺す！！」

スバル様が近くに置いてあつた消火器を悠然と構えていた。

ジロー「ちょ、ちょっと待つてくれ近衛さん。そんなので殴られた  
ら、記憶が飛ぶぞ」るじやすまない気がするんですけど……」「

スバル「ああ、そうだ。おまえみたいな変態は、この世界にいちゃ  
いけないんだ……」

ジロー「じつ、事故だ！ あれは事故だつたんだ！」

スバル「何が事故だ。ボクの……ボクの胸を触つて興奮して鼻血ま  
で出したくせに……！」

ジローは腰が抜けて動けないようだ。

ジロー「違つんだって！　俺は興奮して鼻血を出したわけじゃない  
！　これは俺の身体が　」

スバル「問答無用。終わりだ。絶望を噛み締めながら、死ぬがいい」

「ごんつ、

鈍い音がしてジローが倒れた。スバル様はそれでも気がすまなかつたのか連續でジローに消火器をぶつけ続けていた。

スバル「次はおまえの番だ。庭渡 理桜。覚悟しろ」

気がすんだのかターゲットがジローからオレに移つたようだ。いつものオレならスバル様がジローに気をとられてる間に逃げているはず。だけど、オレの身体は震えて言つことをきかなかつた。

『さあ、僕へ。お姉さんと愉しい』としようね~』

迫り来るはだけたスバル様の姿がオレの中の忌々しい記憶と重なつてしまつていたから。

## 第2話（前書き）

紫苑さん感想ありがとうござります。

## 第2話

スバル「可哀想に……そんなに震えなくても大丈夫だ。一瞬で終わらせてやるからっ！」

そう言い、オレ掛けでスバル様は全力で消火器をフルスティングした。

リオ「くつ……！　はあ……はあ……チ、クシヨ」

オレはなんとか頭をガードしたが威力が強すぎて吹っ飛ばされた。不幸なことにビーカーの破片のあつた場所にダイブして腕をぱっくり切つてしまつた。

スバル「……運の悪いやつだな。今ので氣を失ついたらよかつただろうに！」

本当に運が悪い。オレは切つた左腕をきつく握りしめる。くそつ、頭が痛い……呼吸がじづらい……。

リオ「……た、たのむ……はあ……」

くそっ、最悪だ。学園じゃ『いじつ』はならぬようには気を張り続けていたのに！？

スバル「なんだ？ 命乞いか？」

リオ「たのむ、から……はやく、ふくをととのえて、くれ！……はあ……はあ……」

今、オレが出せる渾身の声を出すと、スバル様は自分がどんな格好をしているのか思い出してくれたのか急いで整えてくれた。

スバル「……見たな」

整え終わるとスバル様は親の仇を見るような目をしてそう言った。オレは見せられた側なんですか？…………ああ、でもいつそのこと意識をぶつ飛ばされた方が楽だ。

スバル「おまえもあいつみたいにしてやるからな！」

スバル様が消火器を振り上げた瞬間、どこからともなく声がした。

「そこまでよ」

凜とした声が響いた。声のした方を見ると、スバル様の主である、涼月奏さんがいた。

スバル「お嬢様！！」

奏「スバル。消火器を置きなさい」

スバル「ボクには」いつらを殺す義務が　　」

奏「スバル」

スバル「……わかりました」

主の命令には逆らえないのか、スバル様は渋々、消火器を床に置いた。

奏「そっちの坂町くんは大丈夫かしら？」

リオ「はあ……はあ……ジローなら、むだに、がんじょに、できて、  
るから、だいじょぶだ」

伊達にあのお方に鍛えられてないからな。

スバル「お嬢様。どうしてここに？」

奏「お花を摘みに行つたあなたがなかなか戻らないから、何かあつたんじやないかと思つて捜しにきたのよ」

涼円さんがそう言つと、スバル様は申し訳なさそうに頭を下げた。

奏「庭渡くん、腕、大丈夫かしら？それに顔が真っ青よ」

リオ「……だいじょぶ、だよ」

嘘だ。かなり痛い。言葉も上手く紡げない。身体の震えも頭痛も收まらない。オレはネクタイをはずし、腕に巻こうとしたのを止められた。

奏「駄目よ。そのままだといけないから保健室で消毒しましょう」

リオ「……ほけん、しつ、いくまでのあいだ、だけでもしけつ、し

たい。ジローも、はいば、なきやいけな、いし」

奏「そう、それなら私が

」

リオ「！？ いらない！ じぶんでやるからオレこそわらないでくれ！」

涼月さんがオレの手をとらうとしたが咄嗟に怒鳴ってしまった。

スバル「おまえ、お嬢様に向かって！」

奏「いいわ、スバル」

スバル「ですが！」

食つて掛かるスバル様を涼月さんが手で制してくれた。

リオ「……悪い。オレを心配してくれるのはわかるけど、今は逆効果なんだ。だから、放つておいてくれ」

だいぶ呼吸が落ち着いてきたから普通に話せるようになった。オレ

はワイシャツを脱ぎ、傷口にハンカチをあて、その上からネクタイをきつく巻いた。

奏「それはできないわ。私の執事があなたに怪我をさせた。それくらいの責任はとらせてもらわないと」

リオ「……わかった。なら、保健室に行こう。オレも聞きたいことあるし、そつちも聞きたい」とあるんだうし」

奏「話が早くて助かるわ」

オレはジローが汚れないように血塗れになつた手をワイシャツでくるみ、ジローを抱えて保健室へ向かつた。

×

リオ「失礼します」

奏・ス「失礼します」

ジローを抱えたまま保健室の扉を開けるオレに涼月さんとスバル様が続いて入る。

仲本「どうだー……って、庭渡君、どうしたのー!?それに坂町君もー!?

リオ「…………とりあえず、ベッドを借りてもいいですか?」

仲本「いいから早く坂町君を寝かしてこひたて座つてー!」

リオ「はい」

仲本「何をしたらこうなるのー!? 顔の方はたいしたことはないけど……腕の方は何針か縫わないといけないわ! 今すぐ病院に行かないでー!」

リオ「……病院は行きたくないです」

仲本「あなたの病院嫌いは知っているけど、今はそんなこと言つてはいる場合じゃないでしょー!?

奏「……少しよろしいですか、仲本先生？」

仲本「なにかしら？ 今は庭渡君の手当を」

奏「彼らは私に任せてもうえませんか？」

仲本「けど……え？」

「きやあ

リオ「え？」

涼月さんはあわてゝとか仲本先生を往復ビンタした。……それも札束で……。どういうことだ？ あの浪嵐学園男子の憧れの涼月奏が……。ヤバイ、目眩が……。

奏「さて、邪魔者は退散したわね」

スバル「……お嬢様……」

オレがトリップしてゐる間に仲本先生は保健室から出でていつたみたいだ。うん、ジローには悪いがオレも退散しよう。オレはそう決め行動に移るうと出口へ向かった。

“ だきつ

リオ「ひにっ！？」

突然、後ろから抱きしめられたことに情けない声を漏らしてしまった。背中に殺傷能力最大の一いつの凶器が押し付けられてるんですけど！？ やばい……全身に悪寒が……。

奏「どこに行くつもりかしり？」

涼円さんがオレの耳元で囁くよつとそつ言つ。うわっ！？ ゾクゾクするう！

リオ「ちょ、ちょつと……かばんをとつ！」

あ、もうムリだ。うん。むじゅじゅまでもつたことに驚きだよ。よく頑張ったな、オレ！

スバル「え？ お、おい！」

限界を突破したようでオレの身体から力が抜けて、糸が切れた操り人形のように呆気なく倒れた。慌てるスバル様の声を聞きながらオレの意識はブラックアウトした。

### 第3話（前書き）

お気に入り登録してくれた皆様ありがとうございます。

### 第3話

リオ「く、来るなあああ！」

唐突に意識が覚醒した。横になりながら、ばくばくと拍動する心臓を左手で押さえつける。そう、あれ? とか自分の上げた悲鳴で目を覚ましていた。カツ「悪すきる。

リオ「……なんて、サイアクな目覚めだ」

サイアクだ。あの悪夢を見るなんて。

リオ「う、……つー？」

ヤ、ヤバい!? 頭からリバース信号が!! 周りを見るとゴミ箱を発見した。すぐに取らないと。俺はすぐさまゴミ箱を取ろうと右手を動かした。だが、突然、ジャラつと言ひ音と共に、右手の動きが止まる。

リオ「……ジャラ?」

これって、手錠……ですよね? なぜにオレの右手とベッドの柱を

しつかりと恋人同士のように繋いでるんだ？ オレ、拘束プレイはあまり好きじゃないんですけど？

リオ「…………」

えーっと、なんですかね。ひょっとして、オレはまだ夢を見ているのか。そんなことはとりあえずどうでもいいー。そのままじゃゴミ箱が取れないじゃないか！？

リオ「…………つ！？」

マズい！ リバース！ リバース信号が赤になりかけてますから！  
！ マジで喉まできますからあ！！！！

「リオ、早くこれに吐け！」

そんなジローらしき声の言葉とともにゴミ箱がオレの目の前に出現した。オレは「ゴミ箱をしつかりと持つてリバースを行った。

リオ「…………ゲボツ、ゴホツ…………！？」

ジロー「二人とも悪いけど」

「わかつてゐるわ」

誰かが出て行く気配がしたけど、今のオレには氣にする余裕はない。

ジロー「全部出して楽になれ」

ジローはオレがこうなるのに慣れてるから優しく背中を擦ってくれる。やはり持つべきものは幼馴染みで親友か。

ジロー「もう、大丈夫か?」

リオ「あ、ああ」

あれから十分くらい吐き続けたか……。事後処理も終え、ジローが窓を開けながら心配そうに訊くので、力ない笑みで返す。

ジロー「そつか。……涼月、近衛。もう大丈夫だから、入ってきてくれ」

涼月さんにスバル様？ なんであの一人がオレの家に……って、こ

「は俺の家じゃなく、オレが意味嫌う病室じゃないか。

奏「庭渡くん、大丈夫?」

スバル「……」

ジローが呼んだ人物が入ってきた。スバル様は気まずいのか無言だし。

リオ「……ジロー」

ジロー「リオのことを使むよ。俺は何か飲み物、買ってくるから」

ジローに状況説明を頼もうとしたがあろつことか目線を反らし、出て行きやがった。

奏「スバルも行ってきて」

スバル「かしこまりました」

涼月さんに言われ、スバル様はジローを追いかけつていった。待つ

てくれ！ ちよつ！？ オ、オレを女の子と「人つきり」しないでくれえ！！

奏「大丈夫かしら。その手錠、痛くない？ サイズ的には小さくないと思うんだけど」

リオ「……ん？」

ちょっと待て。この女、今何気にとんでもないことを言わなかっただけ？

奏「安心して、庭渡くん。手術は、無事成功したわ」

リオ「……なに？ それならオレも改造人間の仲間入りなのか！？」

奏「そうよ。あなたはもう普通の人とは違うわ。試しに『変身つ！』って叫んでみて。それであなたに秘められた力が解放されるから」「リオ「な、なんだと！？ よ、よし！ わかった！ いくぞ！ つて、やるわけないだろ！？」

オレは途中まで合わせていたがさすがにその先はないだろ？ 恥ず

かしそうもひつて。高校生にもなつて「変身つー」とか叫んじやつたりさ。そんなヤツがいるなら是非見たいね。

奏「く、あはは……」

笑い声が聞こえる。信じられないことに、あの涼円さんがお腹を押されて、窒息死しそうなくらいに悶えていた。

奏「く、ふふふ。いいノリシッ！」

「イツ、本当に涼円奏さんなのだらつか？　いつもとは印象が違うぞれなんですか？」

奏「でも、残念だわ。ジローくんみたいに叫んでくれると思ったのに」

……あ、いたんだ。しかも、かなり身近に。さすがだな、ジロー。オレはオマエを侮っていたよ。

リオ「あ、あの……涼円さん？ちよつと訊いてもいいか？」

奏「ふふ、何かしら庭渡くん。それともクラスのみんなみたいに」

リオ『 つて呼んだ方がいいかしら?』

ジロー「別に呼びやすい方で呼んでもらって構わないけど……」

奏「ありがとう、リオくん。話したい」とせこつぱこある感じから、ゆっくりでいいわよ」

リオ「じゃ、じゃあ、訊くぞ? オレの」とを繋いでのり、アンタ?」

奏「そうよ。あ、心配しないでね。私だけ怪我してる左手一本のあなたに犯されるつもりは毛頭ないから」

ジロー「アンタはオレをどんな人間だと思つてんだよー。そんな心配してねえよーーー」

誰がそんなことするか! 悲しいがオレにそんなことできるわけねぇんだよ。

リオ「…………やつこや、手術つて本当にしたのか?」

オレは丁寧に巻かれた包帯を見て笑ぐ。

奏「ええ。」<sup>1</sup>涼月家が経営してる病院だから最高のスタッフにやられたわ。傷痕は残らないから安心して」

リオ「そうか、なんか面倒掛けたみたいで悪いな。治療費は後で必ず返すよ」

奏「いろいろわ。あなたが私のお願いを聞いてえくれれば

涼月さんは静かに口唇を歪めた。……怖っ！　なんかすんじ怖いんですけどー！」

奏「そうね、最初はもううん去勢　」

リオ「待った！　何が望みだ涼月やー。俺にできることならなんでもするぞー！」

認識を改めよ。コイツ、ただのお嬢様じゃない。ただのお嬢様が、こんなふざけた性格してるとわけがない……！　ってか、お願いが去勢つておかしいだろ！？　しかも、もううんつて言つたぞ！

奏「勘違いしないで。あなたが私にできぬことなんて何もないわ

はつきりと涼円さんは断言した。いや、まあ、そうなんですか？  
オレが何かできるだなんてこれっぽちも思えませんでしたけどね、  
本当。

奏「あなたを拘束しているのは、あなたが私の執事の秘密を知つて  
しまつたからよ」

ああ、やっぱりか。コイツとスバル様がいる時点で薄々そういうじやないかって思つてたんだ。

## 第4話（前書き）

KEENちゃん、感想ありがと「ひー」れこます。

## 第4話

リオ「なあ……なんでスバル様って男の格好で学園に通つてるんだ？」

一番の疑問を訊ねた。コイツなら、全て知つているはずだ。否、知らないはずがない。なんたつてスバル様の主なんだから。

奏「強いて言つなら、家庭の事情ね」

リオ「家庭の事情？」

奏「ええ。あの娘の……スバルの家系の男子は代々私の家に執事として仕えてきたの。だから、あの娘も執事をしているのよ」

家系の男子？ つてことは、スバル様は……。オレの中である答えが導き出された。

リオ「そうか。それならしかたないか」

奏「あら？ これだけで納得できたの？」

涼月さんが意外そうに訊いてきた。

リオ「納得はできない。だけど、家庭の事情なんだろう？ スバル様とあまり親しくもないオレが深く訊いていいことじゃないだろ」

奏「それもそうね。話を戻すけど、私の父　つまりこの学園の理事長が、スバルが私の執事でいる為の条件を出したのよ。その条件が、三年間、誰にも女だと知られずに学園生活を終えるというもの。つまりそれくらいのことができないようじゃ女に涼月の執事は務まらない。きっとそう言いたかったんでしょうね」

リオ「……え？　ちょっと待った。それってつまり……」

奏「そう。スバルは今日、あなたたちに自分が女であることを知られてしまった。あの娘は自分が涼月の執事であることに並大抵じゃない拘りを持つてるの。だからあなたたちの口をどうにか封じようとした。……ごめんなさい。私の執事が迷惑をかけたわ」

リオ「……」

そうだったのか。だから、あんなにオレ達を殺そと必死になつてたんだ。いや、だけど、あれはれつきとした殺人未遂だぞ。犯罪者になつたら意味がないだろ。

ジロー「ほり、近衛。早く行けって」

スバル「だ、だけど……」

リオ「ん?」

ジアの方を見るとジローとスバル様がなんか押し問答していた。

リオ「何してんの?」

スバル「……あ、あの!?」

リオ「なに?」

スバル「い、いめんなさい!」

リオ「は?」

スバル「あのときは動搖してて……本当に悪気はなかつたんだ。そ

の、だから……怪我をさせじ「みんなさー。」

リオ「……」

おーおい、あのスバル様がオレに向かつて頭を下げんぞ。ゲキレ  
アじやね?

リオ「……イヤだ」

オレは低い声で呟いた。

スバル「え?」

リオ「……ジローは見たところ傷がなさそうだけど消火器で頭を殴  
られてるんだ。この後、どうなるかわからないんだぞ。眠つたら、  
二度と目が覚めないかもしけない」

ジロー「怖い」と囁つたよ

リオ「それにオレは」のザマだ。謝つただけで済まそつなんて虫が  
良過ぎるだろ」「

スバル「えっと……それは、その……」

リオ「こいつ来いよ。一発で済ませてやるから」

オレが拳を作るとスバル様はビクッとするが、覚悟を決めたのかオレの腕が届く距離に来た。流石は男装執事だな。

リオ「良い度胸だ。……いくぞ！」

スバル「……ツ！？」

スバル様は歯を食いしばつてる。

スバル「……？」

だが、覚悟した衝撃が来ないことに目を開けて首を傾げる。

そんなスバル様にオレは渾身のパンチを放つ。

“パシンッ！”

スバル「いたつ！」

リオ「ほら、今日はこれで赦してやるよ」

スバル「？……？？」

スバル様は額を両手で押さえて不思議がつていて。ドチクシヨー！  
メチャクチャカワайнんですけど。

リオ「だから、今回はデコピンで赦してやるって言つてんの。だけ  
どな、いくら秘密を守るためだからって暴力に走るのは止めろよ。  
次やつたら、本当にぶん殴るからな！」

スバル「う、うん」

リオ「わかつたならよし！」

“ナデナデ”

オレは安心させるように笑顔でスバル様の頭を撫でる。おーやつぱ

り、女の子の髪だー。撫で心地最高だな。

スバル「！？／／／」

ジロー「リオは相変わらず女に甘いよな」

オレとスバル様のやりとりを見て、ジローは呆れ氣味でそう言った。

リオ「親父と母さんからの教えを破るわけにいかないからな。女性には優しくあれってな。暴力なんてもつての他だ」

奏「……ふうん……」

リオ「な、なに？」

静かだと思った涼月さんが目を細めてオレを見ていた。ヤな予感がしたので涼月さんに訊こうとしたら……あらうことか、涼月さんがオレの腰辺りに馬乗りしてきた。

リオ「！？」

呼吸が止まる。軽い。鳥の羽のようだとまでは言わないけど、涼月

さんの身体は思つたより軽かった。

リオ「……ひょ、ちよつと！ 何してんですか、アンタはー…？」

奏「なにって、リオくんに馬乗りしただけよ」

長い見とれるくらいに綺麗な髪をいじりながら、涼月さんは脣下が  
りの「一ヒーブレイクの」とく落ち着いてらっしゃる。対するオレ  
は酸欠寸前の金魚みたいに口をパクつかせていた。というか酸欠ッ  
ス！

奏「リオくん。あなたって、特殊な体质らしいわね」

“ギクッ”

奏「ねえ、黙つているつもり？」

涼月判事による臨時裁判が開廷。被告人はもち、オレ。こうなった  
ら黙秘権だ。拘束されて動けない以上、屍のように無口になつてこ  
のピンチを乗り切るしかあるまい！

奏「別にいいわよ。それなら 身体に直接訊くから

リオ「は？」

驚くオレの腰の上で、彼女は口元を歪めた。その白い指がオレのシャツのボタンを次々と外していく。

リオ「お、おい！ なんで服を脱がすんだよ」

ヤバい、ヤバい！ 発作が！ 頭痛えし、呼吸が！！ 身体が尋常じゃないほど震えますからあーー！」

奏「静かにして。手元が狂つて内蔵を傷つけちゃうかもしれないでしょ？」「

リオ「さらっと、こわいこと……こつなやー！」

奏「ちなみに、私の握力は片手だけで八十キロを越えるわ

リオ「あきらかに、ウソ、ですよね！」

呼吸しづら一上に大声出してるせいかも、体力がなくなってる

よつな気がする。

奏「ふふ、バレちゃった。でも、大丈夫。私の家に代々受け継がれた拷問法の中に、肋骨を一本ずつ」

リオ「やめっ！ わかつた！ もう……わかつたから、オレにふれる、のは、やめて、くれませんかね〜〜〜！」

魂を込めた絶叫も、無情にも涼月さんには届かなかったらしい。はだけたシャツの隙間から、白い指がオレの肋骨の上をヘビみたいに這つていぐ。細い指先。冷ややかなその体温に、心臓が跳ねた。

“ドクンッ！”

あ、ヤバい、マズい。体温が急激に下がっていく感覚の中、涼月さんに触れられた箇所だけが熱を持った。……はい、アウトオー！

## 第5話（前書き）

あやせん、紫苑さん感想ありがとうござります。

## 第5話

奏「え？」

涼月さんの唖然とした声が漏れた。そりやそうだろう。自分の触れた所だけが異常に赤くなり、火傷するほどの熱を帯びているのだから。ちなみに、オレは脱力感からボ～とした感じで涼月さんを見ている。しかも、蕁麻疹が出たとこが異常に痒い。

奏「……本当にジローくんの言つ通りだつたのね。ジローくんのもだけど、アレルギーだとしたら訊いたことがない症状よね」

リオ「って、しつて、はあはあ……やつた、のかよ……」

奏「だつて、確かめる必要があるでしょう？ 激しい頭痛、身体の震え、過呼吸、蕁麻疹。ひどいときは戻してしまうんでしょ？ 女の子に触れられただけでこんな症状が出るなんて信じられなかつたのよ」

この人は悪魔か？ いや、そんなカワイイもんぢゃないな。魔王だ。  
これからはサタン涼月と呼ぼう。

リオ「……ジロオ、オ、魔王#」

ジロー「…………しかたなかつたんだ」

リオ「しかたないで……はあ……すますな。はあ、もういい。ジ  
ロー、から……オレのことは、きいたんだろ？　あえて、オレか、  
らは……せつめいしない、からな」

奏「ええ。つまり、『うこう』とでしょう。あなたは、女の子に触  
れられるのが怖くて怖くて仕方がないチキン野郎なのね」

リ・ジ「ぐ……」

グサッと心臓にナイフを突き立てられた気分だつた。ジローも同じ  
のようだ。歯に衣を着せないタイプだな。直球過ぎませんー？

奏「ねえ、そりでしょ」<sup>17</sup>、庭渡 理桜くん

リオ「！？」

「……このタイミングでフルネームだと、ま、まさかこの人……気  
付いたのか？　オレの名前の秘密に……！　いや、そんなはずない。  
オレのはジローみたいにストレートじゃない。わかるヤツはよっぽ

ど性格がヒネくれてる。

奏「どうかしたの？ 何か言つてよ、庭渡 理桜くん」

リオ「……」

奏「ニワコオウくん？」

リオ「……」

奏「ニワコアリ、オウくん？」

リオ「……」

奏「チギングくん？」

リオ「うわああああああつ！」

耐え切れずに、オレは絶叫していた。

スバル「チキング？」

リオ「ヤメロ！ そのなで、オレをよぶなつー。」

ジロー「リオも俺と同じなんだよ。庭渡理桜。—ワトリ、オウ。—ワトリを英訳するど？」

スバル「……チキン……」

ジロー「オウは王様でチキング。それを合わせてチキング。曲解だけ  
ど、チキンの王様だ」

オマエだけには言われたくないわ、ジロー！

奏「ヒーリング、リオくん」

急に涼風さんの雰囲気が変わった。

奏「あなた、自分の恐怖症を治したいとは思わない？」

リオ「…………そりゃあ、オレだって…………は…………なおしたじよ

この体质が治らない限り、オレのそれやらかな夢も叶えられないからな。

奏「だったら、手伝つてあげましょうか?」

リオ「それは、ありがたい、けど……。なにが、のぞみだ?」

奏「リオくんは頭の回転が早いのね」

リオ「どうも。で?」

奏「スバルが女の子だってことを、誰にも言わないで欲しいの」

たとえ死んでもね、なんて物騒な言葉が付け足された。要はオレがスバル様の秘密を死守する代わりに、涼月さん達はオレの女性恐怖症を治す手伝いをしてくれることにな。

奏「あなたたちがスバルの秘密を知ってしまったことは、まだ父の耳に入っていない。あなたたちが秘密を守れば、私たちが条件を破つてしまつたことを知られることはないわ」

リオ「いいふらす、しゅみんなて……まあ……ないけ、びわ……メ  
チヤ、ふせい、ははあ……ですよね？」

奏「バレなければいいのよ。どひ? 私たちと協定を結ぶ? ちな  
みにジローくんは協定済みよ」

リオ「きょひで……はあはあ……って、いつより、きょひはんだ  
な。でも、じとわったり、したら……はあはあ……ふじの、じゅか  
い、いき、だらうじ……オレたちが、スバルさまの、ひみつを…  
バラしたら、オレたちが、バラされるんだらうじ……」

もひ、喋るのもしんどい。つか、早く退いて欲しいんですけど。ジ  
ロー『アイコンタクトをする。

ジロー「……リオも涼月の話に乗るつて。リオ、近衛ほせの命令で  
従つらしこぞ」

リオ「おひ

ジローはオレの気になつてゐることを語ってくれた。なり、安心か。

奏「ふふ。じゃあ決まりね

なぜか涼用さんはやけに楽しそうに笑っていた。うふ、ヤな予感しかしないよ？

奏「とこひでリオくん。話したいんだけど、あなたの女性恐怖症の症状ってどんな時に出るの？ 出てからも女子に触られ続けたらどうなるの？」

リオ「え？ ん、しようじょうがでるのは……ふいつぢで、ふれられたときと……ちよじかんで、きょくどい、せつしょくじ、かな？」

それと、言わないけど半脱ぎで迫られたりしたらマジでヤバいね。触れてないのに発作が出るからな。これだけはジローよりもチキンなのを認めよう。

ジロー「さわられついだらると、たえきれなく……なつてしつしんするね」

ジロー「……リオ、『愁傷さま』

事実、保健室で涼用さんに抱きつかれて失神したしな。それとジロー、なに手を合わせて不吉なことを呟いていやがる…

リオ「けど、それがどう

と。そこまで言つてオレは黙つた。正確には黙らせられた。涼月さんの指が、再びオレの肋骨に伸ばされていた。

リオ「あ、あの、すずつきさん？」

奏「心配しないで、リオくん。これは実験よ。今後の為にも、あなたの身体がどこまで耐えられるのか試さなくちゃいけないの」

三田円のように笑うサタン涼月。ヤバい。コイツ、明らかに面白がってやがる。

リオ「や、やめーーーそんな、ことしなくても……ふ、ひあんつーーー！」

奏「うふふ。ちょっと触つただけなのに可愛い声を出すのね

細くて長い指がわきわきと肌の上を這いずり回つていいく。……ダメだ。傍から見れば天国のようなシチュだが、女性恐怖症チキン症候群のオレにとってはただの拷問だ！ 視界はすでにブラックアウト寸前。このままだったら魂があの世へ旅立つ。

リオ「た、たすけて、くれ、ジロー！　スバルさま……」のまま、  
じゅ……ホントに、ムリ！」

掠れた声で精一杯、二人にSOSを出すが

ジロー「スマン、リオ。俺には荷が重い……」

スバル「……ボクは執事だ。お嬢様の命令は絶対なんだ」

目を反らされた。

リオ「そんなこと、いわずに！　たのむから……オレを、みすてな  
ひやああんつ！」

奏「あら、リオくんったらこんな所に切り傷があるのね。それにジ  
ローくんの家族に鍛えられてるだけあって身体が締まってる。これ  
なら、失神した後も楽しめそうね」

うふふっ、と響き渡る笑い声。何を楽しむつもりなんだよ！  
……ああ、今日からこんな生活がオレの日常になるのか。徐々に遠  
のしていく意識。その中で、オレは神様に自分の貞操の無事を祈つ

ておこた

## 第6話（前書き）

今回は少し短いです。

## 第6話

どんなに暗い夜もいつかは明ける。どんなに明日が嫌でも朝はやつてくる。そんなわけでオレは自分の部屋の時計を見た。ただいまの時刻は朝の六時半。うん、いつもの時間だ。……それより、オレはどうやって家に帰つてこれたんだ？　まあ、気にしちゃいけないよな。

リオ「ん？　雨か」

窓の外からは雨音。昨夜までは降つていなかつたが、今朝の天気は俺の心の中のよつこ憂鬱らしい。

リオ「……シャワーでも浴びてさつぱつとするか。昨日のままみたいだし」

自分の格好を見ると制服のままだつた。カツラもカラコンも着けたままかよ。カラコン着けたまま寝るのつて怖いんだけど。とりあえず、タオルと着替えを持って脱衣所へ向かう。

リオ「……毎日、かつたるいんだよな……」

鏡の前に立ち、カツラとカラコンをはずす。すると、本来の自分が

鏡に映る。灰色の髪に灰色の瞳。目立つよな、これ。母さんが歐州系のハーフだつたんだけど、その血を強く色濃く受け継いでしまつたらしい。顔は親父似なんだけどな。この姿を知るのは学園ではジローとジローの妹である紅羽<sup>クラベ</sup>。そして中学一年からずっと同じクラスの腐れ縁の黒瀬 ヤマト《クロセ ヤマト》。この三人だけだ。

リオ「気合……入れねえとな」

自分に言い聞かせるように呟いた。心機一転して気持ちを引き締めないと。なにせ、今日から始まるのだ。涼月奏による、オレたちの治療プログラムが……。昨日の病室。あのときはなんとか無事に切り抜けた……はず。だが、もはや学園に心の休まる場所はない。つまり、この家だけがオレの最後のオアシスだ。ならば、せめてこの安息だけは噛み締めねば。

リオ「さて、早くシャワー浴びて、朝食作んねえと」

オレは服を乱雑に脱ぎ捨てて浴室へ入った。

×

リオ「……ん？」

“ピンポン”

脱衣所で濡れた髪をタオルで拭いていると呼び鈴がなつた。こんな朝から誰だ？ ジローか？ なら、このままいいか。

『ピンポーン×5』

リオ「だあー！ 聞こえてるつての…… しつこいや、ジ、口ウ？」

『バンツ！』

玄関を勢いよく開ける。

リオ「……」

オレは言葉を失う。そこにいたのはチキン・ジローなんかじゃなく、  
クールビューティー涼月奏がいた。

奏「……／／／」

なぜか涼月さんも沈黙していた。しかも、心なしか頬が赤く染まつ  
ていた。……状況を確認しよう。呼び鈴を押したのはジローではなく  
涼月さん。そして、ジローだと勝手に判断したオレは、シャワー

を浴びた後だから 上半身裸で頭にタオルをかけていた。……うん、涼月さんの頬が赤くなる理由はわかつたよな、オレ。

リオ「…………わやあああああ！？／／／」

気がついたら、オレは女の子のような悲鳴をあげていた。

奏「く、あはは……。さつきの悲鳴……。く、ふふふ。女の子みた  
いで。リオくん、可愛いかったわ……。あは、あはは。」

リオ「そ、そんなに笑わなくつたつていいだろ！／／／」

涼月さんが笑い泣きをしていた。オレは半泣きで怒鳴っていた。

奏「あ、あはは……。だ、だって……普通、悲鳴をあげるの女の子  
である私の立場なの……」

リオ「しかたないですよね！ オレ、裸見られたんですけど！…／  
／／

奏「いいじゃない。昨日も見たわけだし。減るものでもないんじゃ  
ない。」

リオ「減る！なんか大切なモンが減りますからあー！」

なんでだろう。この人には恥じらいと言ひ言葉がないような気がし  
てならないんです。さつき、頬が赤くなつたのは、オレの氣のせい  
だつたんだ。

奏「大丈夫よ」

リオ「なにが？」

奏「……」

リオ「…………はあ…………もづいいよ。それでこんな朝っぱらからなんの  
用？」

なにが大丈夫かわからんけど、これ以上は疲れるから話を変える。

奏「これからあなたたちが秘密をバラさないよ、できるだけ監視することになったの。それで見張りながら一緒に登校しようと頼つてね」

リオ「涼円さん直々に? それにつけてスバル様にやられるとこじゃねえの?」

奏「スバルはジローハンのところだ」

リオ「なるほど。ジローハンは毎日通勤なこのな」

「ああ、色々あるのよ」

オレの言葉に涼円さんが困ったみたいに顔をじょじょに歪めた。

リオ「ふーん……まあ、深くは聞かないけどな。ところで涼円さんは飯食べてるんだよな?」

奏「食べないわ。リオさんのところから走り回るといつも走り回ってね」

リオ「別にオレは構わないけど。涼円さんの口に合つかは知らない

ぞ

そつぱー、涼田さんの前にこつもの朝食を出づ、涼田さんの向かいに座る。

「兄わあーーん！ めひだよお~~~~~」

“ドカンッ！”

突然、爆竹みたいな声が轟いてきた。相変わらず朝からトンショングの高いな。

紅羽「うつやあああつー。」

ジロー「うふはつー。」

紅羽「おはよつ兄わんつー。えーい、アンクルロックー。」

ジロー「うわやああつー。」

紅羽「やうやく続けてシテエ！」

ジロー「うふ、まつ…… もうあああっ！」

紅羽「やうやくそこのチヨークスリパー！ そしてトドメの腕ひ  
しき逆十手！」

ジロー「もやああああっ！」

ジローの悲鳴と紅羽の技名が響き渡る。うん、いつも通りの朝だな。  
田の前にいる涼月さんは驚いたような呆気に取られたような顔をして  
いた。まあ、初めてだとそうなるよな。

## 第7話（前書き）

リオ「更新したぜ」

## 第7話

奏「といひで

リオ「ん? 何?」

食べ終わった一人分の食器を洗つてると、コーヒーを優雅に飲んでる涼月さんがそう言った。

奏「その姿はなにかしら?」

リオ「何つて? ハプロン姿のこと? 料理するときや洗い物するときは普通じゃないか」と

オレは自分のエプロンを見て、首を傾げた。そんなにオレってエプロン似合わないかな? って、男のエプロン姿なんぞ、似合わないわな。

奏「そりぢゃないわ

リオ「そりぢゃない?」

何？ オレなんか変な姿してたっけ？

奏「その髪と瞳のことでよ」

リオ「…………」

髪と瞳？

リオ「…………あ！？」

やべっ！ カツラすんの忘れてた！？ ってか、あんな格好で出迎えに行つたら、まかしよつないからびつちみぢみ涼円さんにはバレるか。

奏「氣づかなかったのね」

オレの様子に涼円さんをほくそと笑った。

リオ「あ、うん。朝からジローたち以外と会つことなんてなかつたからさ」

「マジで油断してたぜ。」

奏「いつもは変装してたの？」

リオ「まあな。こんな色だと何かと立つしゃ。結構、絡まれたりするからメンバーなんだぞ」

奏「絡まるる？」

リオ「そ。ヤンキーたちにいちゃもんつけられてボコられるんだよ。オレ一人に対してだいたい四、五人でかかってくるだぜ」

ま、その度に返り討ちにしてるんだけどさ。ちようど、イライラが最高潮の時に来るから、いいストレス解消になるしな。正当防衛になるからオレに非はない。

リオ「それに、こんな髪色じゃ教師たちに文句言われるのに見えてるし。生まれつきだって説明してもウソって言われるし。地毛って認められても黒に染めてこいつて言われるのがオチだしさ」

奏「たしかにそうね。リオくんはどこかのハーフなの？」

リオ「んや、オレはクオーター。母さんが歐州系のハーフだつたん  
だらしいんだ」

奏「知つてる人はいるの？」

リオ「坂町家と同じクラスの黒瀬ヤマトくらいだな。あ、そうだ。  
理事長にはこのこと、黙つてもらつていいかな？」

奏「ええ、別にいいわよ。あなたが私の要件を飲んでくれたらね」

リオ「わかってるって。んで、その要件ってのは？」

奏「私にこの家の出入りを自由にさせほしいの」

リオ「それだけ？」

正直、もつとヤバイのかと思つた。

奏「ええ。どうかしら？」

リオ「オレは全然オッケーだよ。」

オレ的にはかなり嬉しいからな。

奏「交渉成立ね」

リオ「あ、カギはいつもポストの中だから。合鍵とか作んなくて大丈夫だぞ」

奏「リオくん」

リオ「ん?」

奏「不用心よ。カギは持ち歩きなやー」

リオ「はい、わかりました。」

涼月さんの目がマジだったのでオレは即答で頷いてしまった。けど、カギ持ち歩くのメンドーなんだよな。

奏「リオくん」

オレの名を呼ぶ涼月さんの声色がワントーン下がった気がする。この人はオレの思考を読んでたりするんですか？

リオ「……心配してくれてありがと。それと、さ」

奏「なにかしら？」

リオ「すー……はー……」

オレは深呼吸をしてから勇気を出して、涼月さんに伝えたかった言葉を言ひ。

リオ「オ、オレの初めての女になつてください！」

奏「え、ええっ！？／＼／＼／＼」

精一杯の勇気を出したオレの言葉に驚いて涼月さんの顔が赤くなつた。驚く涼月さんもカワイイ。……じゃなくて、なんで？

奏「リ、リオくん……初めての女つてどうこうとかしら？／＼／＼」

涼月さんに言われ、自分の犯した間違いに気づく。言葉が足りてね  
えよ、オレ！－ どんだけテンパつてんですか！？

奏「……女友達ね。そうよね」

リオ「え、え」と、ダメ、かな?」

奏「もちろんいいわ」

リオ「ホントー やつた～！！」

オレは嬉しさからガツツポーズをしていた。この体質を知られる怖さから女友達なんてなかなか作れなかつたもんな。

奏「リオくんつたら大袈裟よ」

リオ「すごい嬉しいじゃんか！ だつて初めてできた女友達が君みたいなすごい美人なんだぜ これからよろしくな。か……」

奏「か？」

リオ「か、奏／／／」

うう……／／／ メチャクチャ顔が熱い……。それに声、裏返つてなかつたか？ 女の人を名前で呼ぶのってこんなに恥ずかしいことだつたか？ 紅羽を呼ぶときはなんともないのに。

奏「うふふ、よろしくねリオくん」

リオ「あ、ああ／／／」

涼月 じゃなくて、奏はふわりと柔らかい笑顔で微笑んだ。ヤバい、ヤバいね。メチャクチャカワイイんですけど！ この笑顔で心が満たされるや 今ならサタンじゃなくてエンジルって言える！

ジロー「わわわあああああっ！ 田がつ！ 田があつ！」

リオ「……」

ジロー……。オマエ、朝から叫びすぎだからな。田に何があつたん

だ？ ってか、オレの幸せな気分をブチ壊すんじゃねえ！

奏「スバルとなにかあったみたいね。後でスバルに確認を取らなく  
ちや」

リオ「なんか楽しそうだな

奏はさつきの笑顔とは違ついたイタズラっぽい笑顔を浮かべていた。  
素材が良いと、どんな表情でも惹き付けられるからズルいよな。

奏「だつて、ジローくんなり面白ことしてそつだもの

リオ「……たしかに。ジローならしてそつだな。ひとつ、もつもつち  
ろ学園に行かないとな」

時計を見るといつも家を出る時間だった。

奏「あらっ。ジローくんを助けに行かないの？」

リオ「行かない。行きたくない。今、行つたら絶対ジローと同じ田  
にあいそだもん。下手したら朝から発作が出て学園に行けなくな  
るもの」

奏「賢明な判断ね」

リオ「だろ。奏はいつもリムジンで登校なんだよな？」

奏「違うわ。今日は歩いて行こうと迷つて。リオくん、一緒に行きませじよ？」

リオ「マジー？ んじゃ五分…いや、一分待つて…すぐこ支度するから！」

オレはカツラとカラコン装着と鞄を取る為に部屋までダッシュした。

奏「……リオくんたら、カツコに顔して時々カワイイ」とあるんだから。ちょっとビックリしちゃうじゃない／＼」

## 第7話（後書き）

誤字脱字・感想・アドバイスがありましたらお願いします。

## 第8話（前書き）

ジロー「2日連続投稿」

リオ「今日はジロー視点だ」

## 第8話

ジロー side

黒瀬「よつ、ジロー。どつした？ 朝から不景氣そつな顔してんな」

教室に入つて席につくなり、クラスメートの黒瀬が話しかけてきた。

ジロー「うつせえ黒瀬。景氣良い顔つてのどんな顔つてのだよ。額に在庫無しつて書いてあんのか？」

黒瀬「いや～ん、今日のジローくんつたり機嫌ななめ～」

氣色悪い声を出しつづら笑うガタイのいい野郎が一人。黒瀬ヤマト。俺とリオとは中学一年からずっと同じクラスの腐れ縁だ。

黒瀬「ついでに景氣良い顔ならそこにあるぞ」

ジロー「は？」

リオ「

黒瀬の指差す先には見るからに機嫌のいいリオが小説を読んでいた。  
たしかに景気良い顔だな。俺と大違ひだな。

黒瀬「それでジローはなんか嫌なことでもあったのかよ。また妹に  
いじめられたのか？」

ジロー「……似たようなもんだ」

こつちは朝から紅羽のプロレスと近衛の目潰しと執事流記憶消去術  
を喰らつたってのに。紅羽のはいつもだから諦めろ？ ザけんな  
！？ あんなのいつも喰らつてる俺の身にもなりやがれ！」

黒瀬「はあん。そりゃあ」愁傷さま。といひで、ジロー。リオ」

リオ「なんだ？」

黒瀬はリオを呼び寄せ、耳打ちするように顔を近づけて、

黒瀬「ジロー、おまえ、今朝スバル様と一緒に登校してきたってホ  
ント？ リオ、おまえも涼月さんと登校してきたって話だけど」

ぶはつと吹き出しそうになつた。コイツ、なぜそれを知つてやがる。

リオ「ぶはつー？」

リオが本当に吹き出したぞ。コイツの所には涼月が行つてたのか。俺、近衛でよかつたのかもしれない。朝から涼月なんて身も心も持たないぞ。

黒瀬「うわっ、マジかよ。なんで？ どうしておまえらみたいな一般人と学園のアイドル、王子様が一緒に登校してんだ？ なんか特殊な関係なの？」

正解。コイツの勘はときどき怖いくらいに当たるからな。

リオ「来る途中で偶然会つただけだよ。別に仕組んだわけじゃない」

黒瀬「だよな。あの優等生たちがおまえらなんかと待ち合わせするわけねえしな」

言つて、黒瀬は教室の後ろの方に顔を向けた。つられて見ると、そこにはスバル様こと近衛の姿。大人しく席に座つているが、その仏頂面は普段にまして磨きがかかっているように思える。むー、まだ今朝のことを怒つているらしい。それともあれか。朝食に出したキムチが口に合わなかつたのかな。『これが庶民の朝食なのか……』

つてショック受けてたし。

黒瀬「なんか近衛つて暗いよな。クラスのヤツにも愛想悪いし。いくら顔と成績が良くても、あれじや男子は誰も近づかねえよ。女子は寄つて来るけど、そいつらにも冷たいしな」

一日で判るくらいに、近衛はクラスで孤立していた。一緒のクラスの涼月（もちろん優等生王ード）が他の女子と仲が良いだけに余計にそう見える。涼月と二人でいるとき以外、あいつはずつと独りで窓の外を眺めている。孤独な王子様。学園での近衛はそんな感じだ。

リオ「そつこや、どうしてオレが奏と登校したのを知ってるんだ？」

たしかに気になるな。俺の方も知られてるし。つてか、リオのヤツ、今、『奏』って言わなかつたか？

黒瀬「はん。馬鹿言つちやいけねえぜ。俺らにはケータイっていう史上最強の情報ツールがあるじゃねえか。あの主従コンビがそれぞれ別のヤツと登校してきたなんて特ダネは新型インフルエンザなみの勢いで伝わつてんだ。噂じや『S4』と『KKK』が動き出してるらしい」

ジロー「『S4?』」  
リオ「『KKK?』」

黒瀬「おいおい、知らねえのかよ。『シュー・ティングスター・スバル様』。ほら、Sが4つあるだろ。この浪嵐学園で最大勢力を誇る近衛スバルの地下ファンクラブだ。学園の六割が入ってるって話だぜ」

リオ「それで『ＫＫＫ』は？」

黒潮「わかるだろ？　『クールで可憐な奏様』。Kが三つ入ってるだろ」

リオ「なんか某ゲームの幼馴染みのファンクラブみたいだなー。ほら、神にも悪ま」

ジロー「リオ、ストップ。それ以上は駄目だ」

リオがそれを知ってるのに驚きだ。

ジロー「……それで動き出してるってのははどういう意味だ？」

黒潮「はあ？　そんなの決まつてんだろ。おまえとスバル様、リオと涼月さんの同伴登校の真相を突き止めるためだよ。気を付ける。その内おまえらのどこにも刺客が飛んでくるぞ」

刺客つてどんなんだろうね。天井から忍者でも降つてくんのかな。

黒潮「それにジローには前々から変な噂があるしな」

リ・ジ「「変な尊?」

黒潮「うん。ジローがゲイだつて噂」

ジロー「ふはつ！？」

今度は俺が吹き出していた。なにそのおもしろ情報。びっくりします  
さて心臓がストライキ起こしそうなんんですけど。

黒瀬「あ、やつは違った？」

ジロー「当たり前だ！」

リオ「バイだもんな」

黒瀬「あ、そっちか

ジロー「それも違う！ ザけんな！ なんでだ！ どうしてそんな根も歯もない噂があるんだよ！」

黒瀬「え～っ、だつてさあ、おまえってクラスの女子と喋らねえし、近付こうともしねえじゃん。思春期真っ盛りの高校生としてそれはねえよ。だから噂ができるのさ。坂町近次郎は女に全く興味がない男色家だつてな」

リオ「マジでかよ。ジロー、ドンマイ

ジロー「……」

頭痛がする。正確には興味がないんじゃなくて女性恐怖症のせいです。近付きたくても近付けないだけなのに。まいったな。そんな噂が流れてたなんて……。

黒瀬「心配すんなよ。半ば冗談みたいなもんだ。そんなもんを真に受けてるヤツは大していねえ。俺だっておまえが女を好きなのは知ってるよ。リオも入れて三人でエロ本見せ合つた仲だからな」

黒瀬はぎやははと笑つた。相変わらずさばさばしたヤツだ。でもそ

う言つてくれる人間がいるとありがたい。学校で生活を送るには一人くらい自分の理解者が必要な気がする。一家に一台つて感じで。

黒瀬「でも本当に気を付けるよな。S4の中にはすでにおまえとスバル様の仲を誤解してゐる狂信的なファンがいるかもしだねえ。夜道には気を付ける。それとスバル様にもな。あんまり近付きすぎるといいことねえぜ」

そこまで言つて、黒瀬は黒板の方を向いた。静かだと思つたらリオは小説を熟読してゐるようだつた。教室の扉が開いて一限目の教師が入つてくる。今日も何の問題もなく、俺たちの学園生活は始まるつぽい。

## 第9話（前書き）

アキさん感想ありがといひやれこます。

リオ「前回に引き続きジロー 視点だぞ」

俺は涼月と会う放課後まで体力を温存していた。そう、決戦は放課後なんだ。……ところが、ところがである。ピンチは以外にもフライングでやつてきた。

スバル「一緒に昼食を食べよう」

「…………い、一緒に昼食！？」

昼休み。近衛のそんな言葉が引き金だった。突如、驚愕という名の銃弾を撃ち込まれて教室がどよめいた。そりやそうだ。涼月以外、誰もそばに近寄らせなかつたあのスバル様が、俺なんかを昼食に誘つたのだ。多摩川でアザラシが発見されたぐらいの珍事だ。

「おいおい……あの近衛が一般生徒を昼メシにさそつたぜ」

「あの人、今朝も一緒に登校してきたらしいよ…………」

ヒソヒソとクラスメイトたちが囁いているのが聞こえる。いかん。この状況は大変よろしくない。

「まさか……ジローの噂つてマジだったのか……」

「え？ 噂つて何？ 教えて教えて……」

「マジじゃないです。決して俺にそういう趣味はありません。あつた  
ら今さら、リオにボロられて五体満足じゃいられないです。」

「あいつ……スバル様に手を出すなんて……許さない」

「殺す……殺す殺す殺す。あのクソ眼鏡、手足を縛つてコンクリ漬  
けに……」

「すいません、視線が痛いっす。あと物騒な殺気を向けるのはやめて。  
夜中に一人でトイレに行けなくなっちゃうから。」

リオ「……女の子ってやっぱ怖いって……ジロー、マジでドンマヤ。  
影ながら応援しているよ」

右隣にいたリオが少し震えながら激励してきた。リオつてこういう  
のダメだからな。

黒瀬「ジ、ジロー、おまえ……」

左隣にいた黒瀬まで、息子がグレでショックを受けた母親のよくな  
目をしていた。

ジロー「ち、違う！ これは誤解で 」

スバル「何が誤解だ。ほら、行くぞ」

リオ「……つて、オレもなのか！」

スバル「何を当たり前なことを言つてるんだ」

リオ「いや、当たり前じゃないからなー。ちよつ……！？」

必死に弁解しようとした俺を近衛がぐいぐいと引っ張つていく。つい  
いでにリオも引っ張つられた。

「え？ リオまでー？ なにかの冗談だろー？」

「嘘よ……リオ様はあのクソ眼鏡とは違うわー。違うのよー。」

そのことによって、さらに 慌ただしくなる教室内。『リオ様』ですと？ なんだか俺のときと反応が違わないか？ その中で、涼月だけが楽しそうに微笑んでいた。

ジロー「お、おーー、ビニに行く気だよーー。」

教室を出て廊下を歩くと、周りの視線が容赦なく突き刺さる。

スバル「とりあえず、人気のない場所だ。こう周りがつるさいんじや落ち着けない」

リオ「オレたちは逢い引き中のカップルがなんかよ

スバル「勘違いするな。別におまえたちと一緒にお昼を食べたかったわけじゃない。これは監視の一環だ。ボクの見てないとこうでもまえたちが何をするかわからないからな」

近衛はこっちを見もせずに言った。なんか俺たちの扱いが発情期の犬みたいだ。そんなに心配ならいつのこと首輪でもつけてくれ。

リオ「オレたち、信用ないのな」

ジロー「わかつた。じゃあ屋上に行こうぜ」

リオ「だな。あそこならたぶん人はいないからな」

観念して従うことにする。どうせならさつさと済ましてしまおう。それにいちいち反論したらまた殴られそうだ。いくら人より頑丈だからって痛いのは嫌いだからな。

リオ「なら、購買部に寄つて行くか」

ジロー「だな。弁当なんて羨ましいもんは持つてないしな」

リオ「スバル様はどうする？ 先に屋上に行つてるか

スバル「ボクも一緒に行く」

ジロー「弁当ないのか？」

スバル「ボクは料理が致命的でできないんだ。だから、普段は学食で済ませているんだ」

リオ「できない？」

リオの顔がキヨトンとした。以外だな。スバル様にも苦手な分野があるんだな。

スバル「うー……」

真剣な表情でコッペパンと睨めっこする近衛。

リオ「購買部にくるのは初めてなんだな」

ジロー「みたいだな」

俺もパンをチェックチェック。えーっと今田のオススメは……キムチサンド? ふざけんな。韓流ブームもいい加減にしやがれ。

ジロー「無難にヤキソバパンとかチョココロネとかにしどけ。他には惣菜もあるから」

言いつつもコロッケパンとカレーパンを選択。はつきり言って全然足りないが贅沢はできん。今月はひいきにしているバンドのCDが

出るので無駄な出費は禁止なのだ。節約節約。

リオ「オレはカラアゲパンとホットドッグとヤキソバパン。それとやつぱホットケーキだな おい、ジロー。今日は奢つてやるからもう少し食つとけ。それだけだと放課後、絶対にもたないぞ」

ジロー「マジでか？ それじゃ遠慮なく」

やつぱり持つべきものは幼馴染みで親友だよな。

リオ「あ、スバル様の分も出すから適当に選べよ」

スバル「え？ いいのか？」

リオ「おーいいぞ。初めて一緒に食つ記念にな。好きなだけいいぞ」

スバル「それなら、そこにあるヤキソバパンとチョコロロネ……それからコロッケパンとカレーパン、あと串カツとメンチカツ……あ、それから「ちび」牛乳を貰おう」

リオ「……そんなに食えるんだ。その華奢な身体に入るのか疑問なんだけど」

太っ腹なりオの言葉に近衛は容赦無く山のようになんや惣菜を買い漁っていた。購買のおばちゃんも目を丸くしている。借金苦でしかたなく生き別れた息子と数十年ぶりに再会したような表情だ。

ジロ—side out

## 第10話（前書き）

リオ「タイトルを『迷えるカノジョとチキンなオレ』から変更しちゃぜ」

ジロー「今日はつオ視点だぜ」

リオ side

リオ「やつぱ屋上は気持ちいいな」

買い物を終え、屋上へと一ちゃく。人気のない場所といつたらここくらいしか思いつかないんだよ。あとは中庭の隅っこの方だけど、あそこは一階より上の窓から丸見えで下手をすればスバル様のファンに爆撃されかれないからな。

ジロー「うん、悪くないな。景色は爽快だし、人気もないしな」

オレとジローは間を空けてベンチに座る。さて、メシだな。人間やつぱり食が基本だよ。

スバル「……」

スバル様が、戸惑つように田を泳がせながら立ちすくんでいた。なぜか表情もふらふらと落ち着かない。狙撃でも警戒でもしてんのか？

リオ「何やつてんの？ やつまと座れって」

スバル「……」

ジロー「おー、無視すんなよ。おまえが俺たちをメシに誘つたんだ  
う」

スバル「うう……。わかつたじやあ、座るぞ？」

おずおずとスバル様はオレヒジローの間に腰掛けて無言でパンを食べ始めた。相変わらずの無愛想。なんかノラネコみたいなヤツだ。すげえ警戒してるや。

ジロー「さういや、涼月はほつといていの？ おまえ、あいつの執事なんだろ？」

無言じや氣まずこのかジローがテキトーに質問する……けど、返答は沈黙。一向にボールが返つてこない気配がない。

リオ「うう。ジローがボールを投げてるんだから返してやれって。  
最低限のキャッチボールはしうよ」

ジロー「せうだ。せつかく一緒にメシ食つてんだからね」

スバル「つるさい変態」

バツサリと一言で切り捨てられた。会話終了。ひどい。ピッチャー返しだ。キャッチボールどころか鋭いライナーで打ち返したぞ。

ジロー「なあ……今朝のあればもう謝ったる。それに眼鏡がなかつたからよく見えなかつたしさ」

眼鏡がなくてよく見えない？ ジローのヤツ、スバル様の裸姿と遭遇でもしたのか？ まあいいや。あとで奏に教えてもらえばいいつか。

スバル「言い訳するな。それにボクは普段一人で食べてるんだ。昼休みに会話をする習慣はない」

ジロー「おまえなあ……今は三人で食べてんだろ。それともおまえは涼月どこのときもこんな感じなのか」

スバル「……」

返答なし。

リオ「図星なのか」

そう言えれば、奏とスバル様が仲良く喋つてゐるところなんかほとんど見たことないな。よく一緒にいるけど、それこそ主従関係つて感じでムダな会話してないな。

スバル「ボクはお嬢様の執事だ。だから、ボクはその仕事をさせて  
ればいいんだ」

ジロー「仕事?」

スバル「ああ、お嬢様をお護りすること。それが、ボクの一番の使  
命だ」

リオ「使命ねえ……」

これじゃ執事つていうよりボディーガードだ。そりや、ただ警護す  
るだけなら会話はいらねえけどさ。せつかく同じ年なんだからもう  
ちょい仲良くすればいいのに。

ジロー「まあ、それでも今は喋らねば。ダベりながら食べた方が楽  
しいだろ?」

オレもジローに同感だ。会話のない食事とかマジで食欲なくなるから。誰かといふとさくらに楽しく食べたいっての。

スバル「……おまえたちはいつも誰かとそりやつて食べてるのか？」

ジロー「ああ。よく黒瀬とかと」

リオ「だな。あいつとは中学からずっと一緒にいたし」

スバル「中学校か。ボクは行ってないからよくわからないな」

危うくパンに挟んであつたカラアゲを落としかけた。

ジロー「……何？ おまえ、中学校通つてなかつたの？」

スバル「ああ、ボクもお嬢様も高校からだ。小学校や中学校には通つていね。名前だけ入学して一度も登校しなかつた。それが決まりだったから」

決まりつていうのは、言わすもながら奏の実家の決まりか。金持ちの考えることはよくわかんねえや。自分の子供が大事なのはわかるけど、過保護なのも問題ありなんじや。けど、そういうのなんか羨

ましくも感じるよな。親の愛情つてさ。

スバル「だから初めて学園に来たときは正直右も左もわからなかつたよ。お嬢様は聰明で要領が良いから上手く対応されていたけれど、ボクには無理だった」

はぐはぐとチヨココロネをかじるスバル様。無理だった……ね。そりやムリもないか。いきなり高校からなんてオレでもゾッとする。オレが今この学園で交友関係を築いてそこそこ楽しくやっているのだつて、たぶん小中学校と集団でいることに慣れた結果だし。でも、スバル様にはそれがないんだ。免許取りたてのドライバーがいきなり高速道路を走らされたようなもんだ。ビビってブレーキをかけるのも不思議じゃない。そう考えると、可哀想だな。

スバル「だから、おまえたちみたいに友だちとお昼を食べたことはないんだ」

スバル様はらしくない弱々しい声で呟いた。

ジロー「……呼べよ」

スバル「え？」

ジロー「あっ、こ……や……」

しまった、つて顔のジロー。らしくないスバル様につい口を動かしちゃったんだろう。

ジロー「だから、ちゃんと俺のこと名前で呼べよ。俺だつておまえのことを『近衛』つて呼んでるんだからさ。俺の名前は坂町近次郎。長いからジローでいい。クラスのヤジラやりオや涼月だつてそう呼んでるだろ?」「

リオ「オレもリオでいいぜ。オレはスバルつて呼ぶからさ

考えてみればスバル様　じゃなくて、スバルがオレたちを名前で呼んだことつて一度もないな。それはちょっと気持ち悪いや。なんか対等じゃないような気がするし。

スバル「でも……いいのか?」

リオ「何が?」

スバル「そんな友だちみたいに呼んで……嫌じゃないのか?」

リオ「イヤなわけないじゃんかよ。そんなんだつたらハナから言わねえつて。な、ジロー」

ジロー「めんどくせやツだな。俺は昔からジローつてあだ名だつたんだよ。それ以外の名で呼ばれる方が氣色悪いんだ。だから、呼べよ」

スバル「しかし、一緒にお昼を食べただけなのに……」

リオ「だから、だろ？　一緒にメシを食つて、ビうでもいい」とを  
ダべる。そういうのを友だちっていふんだろ」

オレ、友だちじゃないヤツとメシとか食えねえし。わずかな沈黙。  
スバルは考え込むように黙つてから、

スバル「…………わかった。じゃ、じゃあ呼ぶぞ？　ジ、ジロー…………」  
「／＼

頬を染めながら、どこか恥ずかしそうにジローの名を呼んだ。

ジロー「お、おつか。上出来じゃん」

恥ずかしいのを誤魔化そうとして、ジローの口調がぶつかりまつになっていた。

スバル「そ、それじゃ……リ、リオ……//」

ジローの名を呼ぶときと同じようにスバルはオレの名を紡ぐ。瞬間、オレは自分の発言を呪つた。……コイツ、チヨーカワイイんすけど。さすがはスバル様。学園一の美少年の称号は伊達じゃないや。危うく見惚れそうになってしまった。

リオ「や、やればできんじゃんか」

クソッ！ ジローと回じようなリアクションとつあつたよ。チラッと隣を窺うと、スバルは「ジロー、ジローかあ……リオ、リオかあ……」とオレたちの名を交互に繰り返していた。 と、不意に、スバルの頭が傾いてジローの肩にコシンと当たった。

ジロー「ん？ もしかして眠いのか？」

見るとスバルはあくびを噛み殺しながら目をしょぼしょぼさせていた。

スバル「いや……違う。別に、眠くなんかない」

言いながらも、睡魔に襲われてゐるのか顔がウトウトし始めてくる。

ジロー「別に眠つてもいいぞ」

リオ「やつやつ。授業の時間になつたら起こしてやるよ」

スバル「……そんな気遣いは要らない。見てる。この程度の眠気なんかすぐにぶつ飛ばして」

言つが早いかにスバルは目をつむつてすうすうと寝息を立て始めた。

リオ「逆に眠気にぶつ飛ばされてもじやんか」

ジロー「まあ、ひつ天気がいいんじゃしかたないだろ」

力を失つた身体がジローの方に傾いた。やつぱ綺麗な寝顔だわ。こんなチャンスは滅多にないから写メつとこ

ジロー「……つて、待て待て」

リオ「あ？」

待てと言われて、ジローを見るとなにやら難しい顔をしていた。  
む、オレに言ったわけじやなさうだな。

ふ

## 第1-1話（前書き）

ロペス「この間はアベ10000突破しました」

リオ「みなさんありがとうございます」

写メだとなあ……。たしかデジカメあつたはず。ビニヤつたつけ？俺がデジカメを探してると、突然ガチャリと屋上の扉が開く。現れた人物は、ジローにもたれるスバルを見てわずかに目を細めた。

奏「へえ、珍しいわね」

艶やかな黒髪を揺らしながら颯爽と近付いてくる奏。オレたちの様子を見に来たのかな。でもよくここがわかつたな。知らないうちに盗聴器や発信器でもつけられてそうで怖いんですけど。

奏「ふふ、眠っちゃってる。珍しい。スバルが他人のそばで眠るなんて」

リオ「そんなに珍しいのか？」

奏「ハーレーに乗つて首都高を逆走するイリオモテヤマネコを見た  
気分ね」

どんな気分だよ。珍しいって二コアンスは伝わつたけど、奏の表情からはそんな感情は読み取れない。相変わらずのクール&ビューティー。同じ年のはずなのにやけに大人っぽく見えるんだよな、奏つ

て。

奏「たぶん緊張の糸が切れたんでしちゃうね」

ジロー「糸? そういうや今日の近衛は変だつたけど、あれって緊張してたのか。でもなんで?」

うえへやつぱりビートからか狙われてんの? だとしたら早く死角に逃げないと。

奏「なんでつて……そんなのあなたたちと会つからに決まつてるでしょ?」

リ・ジ「は?」

オレヒジローの間抜けな声が重なつた。なんだそれ。ビートしてオレらなんかと会つのに緊張するんだよ。

奏「スバルにとつてあなたたちと話すのはすぐ神経の張り詰めることなのよ。前の晩から緊張して眠れなくくらいにね」

少し大袈裟じやないか。つて、ちょっと待てよ。スバルは高校から

なんだよな。しかも、普段一緒にいる奏相手でもムダな会話をしない。そりゃそうなつてもしかたないか。

ジロー「……。でも、こんなの普通じやないか」

奏「普通？」それはあなたにとつてでしよう。スバルにとつては何から何まで初めての体験よ。私以外の人間と一緒に登校して喋つて昼食を食べる。今までそんなことはしてなかつたわ。友だちが欲しくても作れなかつたせいでね」

ジロー「たしかに、近衛は友だちいないけど……」

違うだろ、バカジロー。

リオ「いないと作れないじゃ意味が違つだろ。よく考えろ、バカ」

ジロー「え？」

奏「リオくんの言つ通りよ。スバルには誰にも言えない秘密があるのよ。自分が女の子だつていうね」

ジロー「……あ」

ジローはやつと、言葉の意味を理解したようだ。スバルは自分の秘密を他人に隠さなきやならない。隠すにはどうすればいい？ そんなのは簡単だ。他人と関わらなければいいんだ。オレが女の子と必要以上に関わらなかつたのと同じように、な。

奏「だからスバルは学園じゃ私以外の人間は誰もそばに近寄らせない。秘密を知られるのが怖くてね」

やけにあつたりと言つてるように見えるけど、オレの目には奏がどこか辛そうに見えた。友だちが欲しくても秘密を隠すために作れない。スバルにとって辛いことには変わりない。でも、スバルにそうさせてしまう存在が自分であるとわかってるから奏も辛いんはずなんだ。

奏「スバルにとつて私は主。この娘の中で私はとても友だちなんて呼べる存在じゃないと思うの。昔は『カナちゃん』なんて呼んでくれて仲が良かつたんだけどね。でも そんなスバルにも、やつと学園で友だちになれる人ができた」

奏は穏やかに微笑んだ。

奏「ジローくん、リオくん。すでに秘密を知っているあなたたちとなら、スバルは友だちになれる。きっとクラスメートと喋るなんて

初めてだつたから緊張したでしょ「うナビ」

リオ「なるほど。それでもやっとできたチャンスを失くさないよ  
に、スバルなりに頑張つてたんだな」

、なでなで、

スバル「……ん」

オレが頭を撫でるとスバルは可愛らじい声を漏りす。

奏「私としてもこの結果は嬉しいわ。チャンスをあげた側としても  
ね」

ジロー「せうこいや俺に近付くように近衛に命令を出したのはおまえ  
だったな」

奏「もちろん、あなたにも感謝しているわよ」

ジロー「……やめてくれ。恥ずかしいだろ」

奏「ふふ、照れ屋さんね。そんなあなたにま」れをあげる」

ジロー「……？ なんだ」れ？」

ジローは渡された小さな紙を凝視する。……なんかのチケット？

奏「お前をつけるなら執事券つてとこね。肩叩き券と回し券もいつものよ。それを使えば、あなたは一回だけスバルに命令できるの」

ジロー「命令つて……」

奏「ジローくんのお望み通り、上半身だけ裸にして胸にハチミツをすりこませながら『ボクを舐めてください』って言わせちゃう。そんな変態行為をさせることも可能よ」

ジロー「そんな愉快な性癖は持つてねえよー。」

リオ「静かにしろ。スバルが起きるだろが」

ジロー「うう……悪い」

奏「まあ、使いたくなかったら使わなくてもいいわ。それは私が  
のお礼よ」

奏はその場で優雅にお辞儀した。むう、さすがはお嬢様。こうこう  
仕草は様になつてゐるや。

リオ「なあ、奏。オレの分はないの？」

オレはスバルの頭を撫でながら訊く。やっぱロイツの髪つて柔らか  
いな。

奏「……あげよつと思つたけどやめておくわ」

リオ「え？ なんでや？」

奏「……気分よ」

奏は一瞬スバルを見て顔を逸らした。何？ オレ、なんか悪いこと  
した？

ジロー「なあ、一つ訊きたいんだけど」

奏「なー?」

ジロー「この執事券に書いてある絵って……何?」

ジローが貰ったチケットを掲げる。そこには奇妙な形をした四本足の生き物が印刷されていた。

奏「ああ、それは私が書いた羊のイラストよ。執事と羊をかけたの。たまには下らないシャレもいいんじゃないかと思つて」

リ・ジ「羊つて……」

これが? 奏には悪いけどこんな出来損ないのオーラシリにしか見えない形のが?

奏「なかなか上手いでしょ。実は私、子供の頃からずっと画家になりたかったの。まあ、家を継がなくちゃいけないから断念したんだけどね」

ジロー「へえ……そりゃあ残念」

ホント残念だよ。やはり人には得手、不得手があるんだ。

奏「あ、それから気をつけてね。今教室はあなたたちの噂で持ちきりよ」

リ・ジ「「づつ」」

奏「ふふ。じゃあ、また放課後に会いましょう。楽しみにしてるわ

微笑を残して屋上から去っていく奏。軽く言ってくれたな。オレは巻き込まれただけなのに教室に戻るのが怖くてしかたなくなつたじやねえか。

スバル「えへへ、カナちゃん……もう食べられないよう……」

隣からは変な寝言が聞こえてきた。

ジロー「幸せそつな寝顔だこと」

子供の頃の夢でも見てんのかな。ああ、できればオレも夢の世界に旅立ちたいよ。ジローもなんか考えていたのか深いため息をついていた。



第1-2話（前書き）

ジロー「今日は俺視点だ」

## 第12話

ジロー side

ジロー「なあ」

黒瀬「どうした？」

結果から言おう。幸運にもトライブルは全くと言つていいくほど起らなかつた。教室に入つた瞬間、クラスのおとなしそうな女子にナイフで腹を刺され「あはは……ジローくんが悪いんだよ？ わたしのスバル様に手を出すから……」なんて言われるんじやないかつてビビつてたんだが、俺たちが戻つても教室内はノーリアクション。氣味が悪いくらいに静まりかえつっていた。

ジロー「なんでこんな静かなんだ」

黒瀬「これは嵐の前の静けさだ」

リオ「どうこういひだ？」

今は放課後。リオは鞄を整理しながら黒瀬に訊ねた。

黒瀬「すでにおまえらとスバル様が仲良く昼メシを食べに行つたつて情報は学園中に伝播してんだ。そんでもすぐさまスバル様ファンクラブの最大派閥の『S4』の急襲部隊がジローの元に差し向けられることになつたらしい」

ジロー「ちょ、ちょっと待て！ なんで俺だけなんだよ…！」

リオ「それで？」

黒瀬「ああ。だけど、寸前でそれを阻止した団体が出てきたんだよ」

おい！ スルーかよ！！ なんでリオにはいかないんだよ。

リオ「団体？」

黒瀬「その名も『スバル様を温かい眼差しで見守る会』。これは『S4』から独立した派閥らしい」

リオ「内部分裂つてやつか」

黒瀬「言つちまえばそうだな。んで、この団体は、しばらくスバル様の様子を見てから判断しようという理念の下に急転直下に結成さ

れたそりだ

なんだ、近衛のファンにもマシなヤツはいるんだな。

黒瀬「でも、その連中はあっちの趣味なんだよ」

リオ「あっち？」

黒瀬「腐女子」

リオ「……」

あ、リオが黙つちまつた。

黒瀬「なんでも、ジローとスバル様がB」する同人誌の製作案まで  
出でているらしきぞ」

お、恐ろじすぎる。どこが温かい眼差しだ。生温かすぎるだろ。

リオ「……オレはその妄想に汚されてないだろつな？」

黒瀬「残念。リオ×ジローで何十作品か同人誌が出回っているらしい」

リオ「……」

ジロー「……」

お互いの目が合つた。

リオ「〇〇……おえ……」

リオがえずく。俺の顔を見てえずくなよ。

「庭渡君、サッカー部のマネージャーが呼んでるよ」

リオ「わかった……ありがと」

「どういたしまして」

リオはそうとう気持ち悪かったのかふらふらとサッカー部のマネージャーの方へと歩いていった。いや、俺だって気持ち悪いと思つてるけどな。リオと俺でB-Lするなんて……うえ……考へるのはよそう。

黒瀬「まあ、今の状況はこの一つの派閥による冷静状態だ。近々でかい抗争が起ころうが、それまでおまえの扱いは保留になつたっぽい」

安心したけどなんか複雑な感じだ。幸いなことに男子たちは面白おかしくこの争いを傍観してるみたいだ。黒瀬も、俺と近衛がそういう関係だというのはあまり信用していないしな。

黒瀬「それでスバル様とはもうキスはしたのか？」

愉快そうに言いやがつた。とりあえず殴つてもいいよな。いや、殴るしかない。

“じゅつ！”

黒瀬「ぐは……っ！……いたた……腹を殴るな

ジロー「当然の報いだ。と言つか、なんでそんなに情報通なんだよ

黒瀬「情報はあつた方が便利だからな」

黒瀬がどや顔で言った。なんかムカつく。

ジロー「そうだけどな。ところでリオってファンでもいるのか?  
昼休みのとき、『リオ様』って単語が訊こえた気がするんだけど

黒瀬「おまえ、リオの幼馴染みのくせに知らないのかよ」

ジロー「あまり興味なかつたしな」

人のモテ具合なんて気にしてられつかよ。

黒瀬「あいつ、顔はまあまあ良いし。運動神経も良いから運動部の  
助つ人とかやってたから知名度高いし。それになんだかんだいって  
誰にでも優しいからな。ファンがいない方がおかしいだろ」

ジロー「それじゃ『S4』の急襲部隊がリオの方にいかないのもそ  
れのおかげだつたりするのか?」

黒瀬「ほら、憧れと恋愛対象は違うって言うだろ?『S4』の中  
にはファンじやなくて、リオを本氣で狙ってるヤツが何人かいるら  
しいぞ」

リオ、おまえ、知らない間にモテてたんだな。でも、女性恐怖症が治らないかぎり彼女はできまい。

黒瀬「んじゃ、俺は部活行つてくるわ」

ジロー「ああ、じゃあな」

黒瀬は気がすんだのか揚々と教室から出て行った。

奏「ねえ、ジローくん

ジロー「うわー！？ な、なんだよー！」

背後に回つて声をかけるなよ。

奏「あれって、リオくんの癖なの？」

ジロー「あれ？」

涼円の見てるものを追つてみるとリオが近衛の頭を撫でながらサッ

ジー部のマネージャーになんか謝つてた。ってか、いつの間に近衛がいるんだよ。

奏「頭を撫でてるのよ」

ジロー「ああ、あれな。たしかにリオの癖だな」

奏「ジローへんもリオくんに撫でられた」とあるの?」

ジロー「まあ、幼馴染みだしな」

奏「……わ」

なんだ? リオと近衛を見る涼月の目が鋭くなつたよつな気がするんだけど。そういうや、屋上の時もリオのヤツ、近衛の頭撫でてたよな。あれ? 涼月はまだ撫でられたことないな? え? もしかして……。

ジロー「なあ、涼月。リオに執事券を渡さなかつたのって……もしかして、嫉妬だつたりするのか?」

奏「……なにを言つてるのかわからないんだけど」

ジロー「ほり、リオが近衛の頭撫でてるのこ、おまえは」

そこまで言つて俺は黙つた。いや、黙らされた。涼月の指が、俺の首筋に伸ばされていたのだ。

ジロー「あ、あの、涼月様？」

奏「ジローくん。あまつおかしなことをいつ身を滅ぼすわよ」

三田月のように笑うデビル涼月。や、やっぱー。目が笑つてねえ！  
つてか、図星なのかよー？

ジロー「は、はい、肝に命じておきますー！」

奏「よろしく。はい、これ

俺の焦り具合に機嫌が良くなつた涼月がメモを渡してきた。

ジロー「なんだ？」

奏「初の治療プログラムを実行する場所が書いてあるの。私は先に向かってるから一人と一緒に向かってね」

ジロー「ああ」

奏「それじゃあ、またあとで」

涼月は颯爽と歩いて教室から出ていった。ついに、涼月奏による俺とリオの女性恐怖症治療プログラムが実行されるのか。気合い入れないとな。

第1-3話（前書き）

リオ「あせやん、紫苑さん感想ありがとうござります」

奏「今日はリオくん視点よ」

リオ side

ジロー「 で、なんでゲーセンなんだよ、涼月」

ジローは携帯を持ちながら、電話の向こうにいる奏に訊ねた。

奏『あら、ホテルの方が良かつた？ 初めてのデートなんだからこれくらいがちょうど良いと思つたのに』

リオ「おまえが言つホテルには三人じゃ入りにくいですからあーー。」

ハンズフリーから流れる出す音声に全力でツッコミを入れてしまつた。

奏『冗談よ。前にも言つたでしょ。あなたたちの女性恐怖症は女性に対する恐怖感が刷り込まれた結果。なら、その恐怖症を拭うために普通の女の子に慣れればいいのよ』

だからムリヤリデートするつてわけね。今現在オレたち三人がいるのは学園のある街のとなり街にあるゲームセンターの前。まあ、さすがに学園の近くのゲーセンに行く度胸なんてねえしな。こんなところを学園の誰かにでも見られたらdead endしても不思議

じゃないからな。あのスバル様とデートねえ。まったく、スバルもよくここまでするよな。いくら秦の命令とは言え、オレたちなんかとデートするなんてや。

ジロー「やついや、おまえは今どこにいるんだよ？」

電話の向こうの奏に訊いた。

奏『私はそこにある漫画喫茶で『ジョ×ヨの奇妙な冒険』を読んでるわ。あなたたちの邪魔しちゃマズいからね』

リオ「オレもそっち行きたいんだけどダメなのか？」

奏『ダメよ』

リオ「む……一人だと淋しいじゃん？ それなら秦もこっちに来てくれよ。オレの相手役でデートして。オレ、奏とデートしたいもん」

奏『……』

リオ「奏？」

なぜか奏からの返答がない。どうしたんだ？

奏『さあ、そろそろ始めましょうか。手始めにスバル。ジローくんの身体に触つてみて』

あれ？ オレの言葉はスルーですか？

スバル「わかりました、お嬢様」

慎重な手つきでスバルがジローの腕に指を伸ばした。なんか時限爆弾でも解体する感じだ。ちょこんと、スバルの小さな指がジローの指先に触れる。

奏『さあ、どう？』

ジロー「どうって何が？」

奏『ムラムラしてこない？』

ジロー「するわけねえだろ！ どんだけ飢えてんだよ俺は！」

奏『おかしいわね……ちゃんと購買のパンには混入しておいたはずなのに』

リオ「混入つて何を…？」

聞き捨てならない言葉にオレは声をあげていた。そりやそうだろ。オレだって購買のパンを食べてるんだから。

奏『バフ×リン』

リ・ジ「バフ×リン…？」

オレとジローの声がハモる。なぜにバフ×リン？

ジロー「なんでそんな常備薬を…」

奏『だつてあなたたちも心を病んだ現代人の一人でしょ？　だから今こそバフ×リンの優しさが必要なんじゃない』

リオ「急に真面目そういうこと言い始めたよこの人！」

奏『私の知り合いにはバフ×リンを飲んで身長が5センチも伸びた人や、引きこもりから見事に社会復帰した人もいるわ』

リオ「それ絶対バフ×リン関係ないよね！」

奏『優しさは、世界を救う』

ジロー「かつ」<sup>1</sup>といい言葉で無理矢理締めようとすんなよ！』

ビキビキとケータイの画面が音を立てる。

リオ「おい、ジロー！ ケータイが壊れんぞ』

ジロー「危ねえ、もうちょっとで握り潰すとこだつた』

ジローは我に返ったのかケータイを握る手から力を抜いた。

奏『まあ、ジャブはこれくらいにして』

ジャブでこれですかい。だつたらストレートはどんな威力を放つんだよ。会話が成り立つか心配だ。

奏『どいつかしら、ジローくん。鼻血は出でない?』

ジロー「……? 出でない?」

奏『それはおかしいわね。あなたは今、女の子に触られたのよ』

ジロー「あ?」

そういやわづだな。スバルに 女の子に触られたってこのジローの身体は全く反応してなかつた。

奏『やつぱりね。たぶんあなたはまだ心のどこかでスバルを女の子だつて認識してないのよ。だからちよつと触れられたらくらいじや恐怖症が発症しない。今回はそれを利用するの』

奏は一度息を吐く。

奏『それではミッションスタート。とりあえず脱ぎなさい、スバル』

スバル「わかりました、お嬢様」

リ・ジ「「ちよつと待てええええつー。」

身を乗り出しながらオレたちは全力でシシコミを入れていた。

奏『どうかしたのジローくん。リオくん。これはあなたの為なのよ  
?』

ジロー「うわせえー 初っ端から飛ばしそうだわー。」

リオ「おまえは自分の執事に何をさせん気だー オレに恐怖症を発  
症させる気かーー。」

奏『何を言つてゐのかしら。私がこつこつで脱げなんて言つたのよ

リ・ジ「「え?」」

スバルを見るとスポーツバックを持つて、ぱたぱたとグーセンの中  
に消えて行った。

奏『それより、リオくん。どうしてスバルが脱ぐだけで恐怖症を発症するの？ 女の子に触られてるわけでもないのに』

リオ「は？ ジローがオレの恐怖症になつた原因を説明したんじゃないのか？」

オレは首を傾げてジローを見ると、ジローは肩をすくめていた。

奏『ジローくんと一緒にじゃないの？』

ジロー「……悪い涼月。俺から説明できるけどじやなかつたからな

リオ「……そつか。それなら今度、奏とスバルに説明しないとな

奏『そづ。お願ひね』

リオ「ああ。それでスバルは何しに行つたんだ？」

オレは「」の空氣を変えるように話題を戻した。

奏『トライで脱ごでのみ』

ジロー「はい? エリコの意味だ?」

奏『ふふ、計画は完璧よ。あなたたちはスバルを女の子だと完全に認識していない。それが好都合なの。いきなり普通の女の子とジークなんかしたら刺激が強すぎるから』

ジロー「それはわかつたよ。つまりは少しずつ慣らそうってことだろ」

リオ「よつは自転車の補助輪みたいなもんか」

まずはオレたちがまだ完全に女だと認識できないスバルから始めて、徐々に普通の女に接するのに鳴らしていくつひとつプランつてところ。

リオ「でも、どうしてスバルを脱がすんだ」

奏『すぐわかるわ。それより』

ジロー「それよ?」

奏『ビックリして倒れないでね』

リ・ジ「は？」

意味がわからなかつた。しかし待つこと数分、オレたちはその言葉の意味を瞬時に理解することになるのだった。

## 第1~4話（前書き）

リオ「今日は原作より早くアイツが登場するぜ」

\*修正しました\*

## 第14話

スバル「ジ、ジロー……リオ……」

浪嵐学園の女子の制服に身を包んだスバルがゲーセンから出てきたのだ。

リ・ジ「 つ！」

ヤ、ヤバい。確かにこれは卒倒もんの衝撃だ。メ、メチャクチャ力ワイイじゃねえかよー！ 制服のスカートから覗くほつそりとした足。ニーソックスを穿くことでその脚線美がより際立っている。髪をほどいてリボンまでしてるせいか、かなり女の子っぽい。つか、似合いすぎですからあ！ マジでこの制服を着るために生まれてきたつていつても過言じやねえぞ。

奏『どうやらスバルが戻ってきたみたいね。大丈夫？ まだ意識は保ってる？』

リオ「あ、ああ……」

ジロー「なんとかな……」

そつか。あのスポーツバッくはこの為だつたわけな。わざわざ着替えを持つてきいたとは恐れいつたよ。

ジロー「なんか……胸まで大きくなつてゐる気がするんですけど……」

ジローはスバルに聞こえなによつにコソコソ言つた。つてか、そこは触れてやるなよな。

奏『コルセットよ。スバルは普段コルセットで胸を締め付けてるの。あんまり意味ないけどね。それに、今はパット入りのブラをしているはずよ』

意味ないつて……ヒテヒ……スバルがサイズを気にしてたらどうするんだよ。

ジロー「へえ、そつなんだ……」

頷いた後、ジローは何か気になることがあるのか首を傾げていた。

奏『ちなみに昨日、スバルはコルセットをするのを忘れていたそつよ。だから、ジローくんが昨日理科室で触つたのは』

リオ「待て。もういい奏。それ以上はやめよ。」そのままだじロ  
ーが人の道を踏み外しちまつ

ジローがヤバめな両面相してゐる。

奏『それも面白やうじやない?』

リオ「否定はしないけどな」

奏『ふふつ。さあ、それじゃミッションを続けて。あなたたちはそ  
の姿のスバルと今からゲームセンターでデートするの。何か起きた  
ら連絡をちょうだいね』

ジロー「ちよ、ちよっと待て!」

リオ「電話を切る氣か!」

今のスバルと一緒にされるのはヤバい。着替えたスバルはどこから  
どう見てもカワイイ女にしか見えないんだぞ。つてか実際女だけど  
な。これじゃ慣れるどころかゲームセンターが(ジローの)血に染  
まつ……!

奏『頑張つてね。私は今、手が離せないの』

リオ「なんだよ。漫喫でなんかあつたのか？」

奏『ええ。とても深刻な事態よ。今、ジヨ×ノの体に入つたナラ×  
チヤが大変なことに……』

ジロー「とりあえずジヨ×ヨを読むのをやめろ！」

ジローの叫びも虚しく、ブツツと電話が切れた。さすが、サタン涼  
月。オレたちより漫画を優先しましたよ。

スバル「なあ……ジロー、リオ。これ……変じやないかな？」

やけに短いスカートを指でつまみながら、スバルが訊いてきた。

ジロー「あ、ああ。すげえ似合つてる」

リオ「メッチャカワイイ」

その証拠に周囲の目が集まり始めてる。ホント知り合いがいなくてよかつたよ。

「 「 「 ヒツ …… !? 」 」

とりあえずうつとしいから睨みを利かして牽制し、周囲の目を霧散させた。

スバル「そ、そつかな？ 実はこの制服……一度は着てみたいって思つてたんだ」

ひらひらとスカートを揺らしながら、スバルは嬉しそうにくるくる回つた。チクショ、メチャカワイインですけど。もしかしたらずつと女の子の格好がしてみたかったのかな。男として暮らしてちゃ機会ないもんな。

スバル「さあ、行こう。ジローとリオの恐怖症を治すんだ」

やけに張り切りながらゲーセンの入り口へと駆けて行くスバル。オレたちもそれを追つてゲーセンへと入る。……今更だけど、これつて荒治療だよな？

スバル「ジロー、これはなんだ？」

入って早々、スバルの視線はクレーンゲームに釘付けになった。もしかしなくてもゲーセンすら初なんじゃね？

ジロー「それはUFOキャッチャーって言つて、お金を入れて中身を上手に取るゲームだ」

スバル「ほつ」

ジローが説明したがどう見ても聞いてねえな。スバルはドレスに憧れる少女のようにガラスケースにべたつとへばりついていた。そんなに気になるのかと思つて覗くと『沈黙ヒツジ』なるヌイグルミがガラスケースの中で群れをなしていた。

リ・ジ「……」

おい、これって大丈夫なのか。デザインはかわいくデフォルメされた羊のヌイグルミなんだが、なぜか歯がギザギザしていて妙に鋭い。口元が赤いやつもちらほら混じっている。隣も見てみると『沈黙ヒツジと愉快な仲間』と書いてあった。『爆笑オオカミ』はデフォルメされた狼のヌイグルミ。厭らしい目で笑つている。『羞恥ウサギ』はデフォルメされた兔のヌイグルミ。顔、というか全身が真っ赤になつて目を閉じている。

スバル「……かわいいな……」

むー、この様子だとかなり気に入つたらしい。意外に少女趣味なんかもしれん。センスは疑うけどな。あまりに欲しそうにしているのでジローが「取つてやろつか？」と訊くとスバルはこくこくと頷いた。

リオ「そんじや、ジロー」

ジロー「勝負だ、リオ」

オレたちは『沈黙ヒツジ』を先に取れるか勝負する。やるのが久し振りすぎて田当ての『沈黙ヒツジ』が取れねえ。なんで『爆笑才才カミ』と『羞恥ウサギ』は取れるのにい！

ジロー「よつしー。俺の勝ちだ」

リオ「だあー！？ 負けた……」

ジロー「ジュース頼むな」

リオ「はーはー」

オレはジローとつこでにスバルの分のジュースを買いに一人から離れた。

リオ「つてか、このヌイグルミハシよ？」

『爆笑オオカミ』は奏にあげるとして、『羞恥ウサギ』は

“どんづー”

リオ「てづー」

??.??.「あやづー。」

ヌイグルミに皿が行つてたせいか人とぶつかってしまった。

リオ「す、すみません」

??.??.「いや、いやいや、すみません」

お互に頭を下げる。相手の女の子の制服は今、スバルが着てい

るものと回り。よつは浪風学園の生徒だ。これはヤバいよな。

リオ「あ……」

生徒手帳が……。『宇佐美マサムネ』か。宇佐美って、ウサギみてえだな。あ、ついでにコイシも受け取つてもらおつと。

リオ「はい、これ。生徒手帳。それと、あの、これぶつかつたお詫びで。どうぞ」

マサムネ「え？」

なんか警戒心剥き出しじゃね？

リオ「いらない？」

マサムネ「……／＼／＼」

警戒を解いてもらえるように精一杯微笑みかけると、宇佐美さんはヌイグルミと同じように顔を赤くしてオレから生徒手帳と『羞恥ウサギ』を受け取つた。

ジロー「あれ、あれ、あれーーー？」

奇声が聞こえた方を見るとジローがぶつ飛んでいた。

リオ「何やつてんだ……」

マサムネ「あ……」

オレはなにか言いかけた宇佐美さんを放つてジローの方へと駆けてしまった。

マサムネ「お礼……言ひそびれちゃつた……／＼／＼

## 第1-4話（後書き）

リプトン「切り位置がわからんないよー（泣）  
……睡眠時間をください！」

ジロー「リプトンがなんか言つてるが」

リオ「相手にするな。疲れるから

第1-5話（前書き）

紅羽「あさわん、紫苑さん感想ありがとうござりますー。」

リオ「ジロー、大丈夫か！？」

受身を取るためゲーセンの床を転がるジローに駆け寄る。ジローが転がってきた方を見ると ショートカットの似合つ女の子が立っていた。

リオ「って、紅羽あ！？」

そう、坂町 紅羽。ジローの妹君の登場だった。

ジロー「く、紅羽！ おまえ、こんなところ何してやがるー！」

ジローがズれた眼鏡を直しながら叫ぶ。

紅羽「何してやがるはこっちのセリフだよ、兄さん……！」

紅羽の声は怒りに震えていた。ジロー、オマエ何したんだよ？

紅羽「学園で変な噂を……兄さんが男の独りで人と付き合つてるなんて噂を聞いてさ。そんなわけないって思つてたけど、心配だつた

から学園からずっとこじききたんだよ」

リオ「ついてきたつて……」

ジロー「尾行してきたのかー!?」

ストーカーかよ、オマエは。実の兄貴をストーキングとかマジ笑えねえぞ。

紅羽「うん。そしたら……リオ兄まで巻き込んで、まさかこんなことになつてゐなんてね。さあ、何か言つたらどうなんですか? 近衛先輩」

紅羽の言葉にびくっとスバルの身体が震えた。ヤバッ! 今のスバルはどうからどう見ても女の子だ。これじゃ誰が見ても気付いちまう。あのスバル様が、実は女の子だつていう事実に……!

紅羽「あなたにこんな秘密があつたなんて……びっくりですよ」

紅羽は、トリックを見破った名探偵のようにスバルを指差した。そして、ビシッと断言する。

紅羽「まさか、あなたが女装趣味のあるヘンタイさんだつたなんて

！」

リ・ジ・ス「「「は？」」」

オレとジローとスバル、三人分の氣の抜けた声が聞こえた。……よかつた。紅羽がバカで本当によかつた。どうやら最悪の事態だけは免れたみてえだな。

紅羽「あなたが今朝、家に来たときからおかしいとは思っていたんです！このドロボウ猫っ！あなたがうちの兄さんをたぶらかしたんですねっ！」

ドロボウ猫て……。本当に言つヤツ初めて見たわ。兄妹揃つて、オレの想像を越えるんだからすげえや。

ジロー「ちょ、何を言つてんだ、このバカ！ そんなことがあるわけ」

紅羽「兄さんは黙つて！」

フーフーと手負いの獣のように息を乱しながら、紅羽はジローの言葉を遮つた。

紅羽「全部……全部、あたしは見てたんだよ? 兄さんが女装した近衛先輩にスイグルミをプレゼントしたり、一人で抱き合つみたいに身体を寄せ合つたり……そして、極めつけは……!」

紅羽は目に大粒の涙を溜めて、

紅羽「キス……男の人同士でキスしようとしたでしょう!」

リオ「……え? マジで。やるなあ、ジロー。オレがいない隙にそこまで進んじゃったのかよ!」

ジロー「違つわ!?

リオ「ジョーダンだつて!」

違うつてわかつてるけどジローをイジるのは楽しいからな。けど、紅羽はマジだな。そういうや紅羽は昔から思い込みが激しかったな。経験上、じつなつたコイツはもはや誰の言つことも聞かずに 暴走する。

紅羽「近衛先輩……いくら可愛いからって……学園一の美少年だからって……うちの兄さんを誘惑するなんて……っ!」

それは、タイマーが作動した時限爆弾を見ている気分だった。

紅羽「あたしの……あたしの兄さんを返せえーーっ！」

爆発する紅羽。咆哮と同時に、その小さな身体がスバルめがけて弾丸の「」とく走り出す！

ジロー「くつ、近衛！ 気を付けろ！ そいつは 」

ジローが忠告を発しようとした瞬間、すでにスバルは動き出していた。おそらくは身を守るための反射的な動作。一直線に突っ込んでくる紅羽に、スバルは牽制の左拳を出そうとして。

紅羽「甘い！」

繰り出されたスバルの拳を、紅羽はひょいと軽やかな動きでかわす。そしてそのままスバルの手首を掴み、その身体に飛び移るように足を絡めた。

ジロー「あれは……跳びつき腕十字固め」

たしかそんな名前の技だつたな。散々、練習台にされてきたジローが言うんだから間違いないな。オレはあの技はまだ喰らってないな。

**関節技。**紅羽は、鮮やかにスバルの関節をキメようとしていた。バランスを崩したスバルの身体が打つ伏せに倒れる。こうなつてしまつたら後は簡単だ。紅羽が掴んだ腕を伸ばすだけで、スバルの肘は完璧に破壊されてしまう……！

紅羽「どうだ！　これが浪嵐学園手芸部の実力よつ！」

勝利を確信したのか、紅羽は叫んだ。いや、普通の手芸部員はこんな見事に関節技をキメたりできませんからあ！　と、ツッコミを入れたかつたんだけど、今はそれどころじゃない。さすが紅羽。伊達に十年以上オレたちをシバいていいぜ。このままだと、リアルにスバルの腕が折れ

リオ「！」

紅羽の技がキマつたと思った。その瞬間だった。ぎゅるっとスバルの身体が回る。驚くことにスバルは自らの身体を前転させ、その回転力を利用して強引に紅羽の拘束を解いていた。

紅羽「えつ」

紅羽の顔が驚愕に染まる。完璧にキマろうとしていた腕十字から抜

け出されたのに焦ったのか、一瞬だけ体勢を立て直すのが遅れてしまつ。その一瞬を スバルは見逃さなかつた。

リオ「紅羽！」

ミドルキック。中腰で立ち上がりうとしていた紅羽の顔面に、強烈な中段蹴りを放つていた。

紅羽「きやつ！？」

紅羽はどうにか顔の前で両腕クロスしてなんとか防御した。

リオ「つ！？」

オレは咄嗟に紅羽の背後に回り、紅羽を受け止める。危ねえ……。  
なんつー威力の蹴りを放つんだよ。受け止めたオレまで軽く後ろに  
飛んだぞ？

リオ「お、おい、紅羽？」

ジロー「大丈夫か？」

ジローが心配そうに駆け寄つてくる。紅羽はショックを受けた表情だった。顔が無事なところを見ると、蹴りの威力で動けないのでなく、いつも簡単に関節技を抜け出され、そのまま圧倒されてしまったことが衝撃だったみてえだな。

紅羽「な、なに、これ……」

ぶつぶつとつわいことのように咳いた後、

紅羽「こんなの……こんなの反則だよつー！」

うわあああつと叫び声を上げながら、紅羽はゲーセンから走り去つていた。オレたち三人はそれをただ呆然と見送るしかなかつた。

第15話（後書き）

紅羽「うさみん先輩に続いてあたしの出番だよー」

ジロー「出できて早々、近衛にあつてお返り討ひをあつてんじやん

紅羽「兄さんいわせこよー」

ジロー「ぎゃああああー!? キマつてゐー 肘があー!?

リオ「兄妹のスキンシップなら他でやれよな」

ジロー「リオ、助けるよ」

リオ「オレはなにも見えない、聞こえない」

ジロー「薄情者おー!」

## 第1-6話（前書き）

リプトン「イエーイ！ 投稿1ヶ月！！！」

リオ「なんだかんだ、あつといつ間だな」

ジロー「いつまで一日置きの更新が続くか疑問だな」

リプトン「ジロー、それは言わない約束だよ」

## 第16話

スバル「すまない、ジロー」

男の姿に戻ったスバルはシュンとウナ垂れていた。クソッ！ サービスタイルはもう終わりなのか！！ もう少しオレに癒しを貰ってくれてもいいんじゃないですかね、ホント。

奏「リオくん、真剣な顔でなにを考えてるの？」

リオ「だって、まだスバルの女子制服ver.をフレームにねる」

奏「リ・オ・く・ん？」

リオ「ナニモカンガエテイマセンヨ、カナデサマ。カンガエルワケナイジヤデスカ、アツハツハツ」

奏「それなら良かつたわ」

本音をポロッと出してしまった。笑ってるよつであなたのかわいいく瞳が笑つてないですよ、奏さん。

スバル「本当にすまない。妹さんをあんなに強く蹴るつもりはなかつたんだ……」

紅羽が去つたあとオレたちもゲーセンを出た。といつか逃げた。さすがにあれだけの騒ぎを起こしたら困つらいっての。そんで今は帰宅中。奏とスバルの帰宅ルートが偶然にもオレたちの家を通るので、一緒に帰ることになつたんだ。前がジローとスバル。そんで後ろがオレと奏。女の子と並んで帰れるなんてサイゴーですよね

リオ「おいおい、そんな落ち込むなつて」

ジロー「やつだぞ。ああでもしなきゃ紅羽は止まらなかつたし」

リオ「スバルが護身術を身に付けてなかつたら今ぐらヤバかつたぜ？」

ジロー「だな。じやなきや全身バキバキにされててもおかしくないからな」

紅羽ならそれくらいつかりやりそうだもん。

奏「まあ、スバルの蹴りがきっかけであなたの妹さんがイケナイ趣味に目覚めないことを祈るわ」

ジロー「黙れ涼月！」

平然としてるな、奏。誰のせいだと思つてんのさ。さうと今、荒れてるんだろうなあ、紅羽のヤツ。シバかれるであろう、ジローに同情だわ、マジで。

ジロー「はあ、また熊五郎を修理しなくちゃなんないのか」

スバル「……熊五郎？ 誰だそれは？」

スバルが怪訝そうな顔をした。

リオ「紅羽がガキン頃から持つてゐでつかいクマのヌイグルミだ」

ジロー「よくボロボロになるからその度に俺が修理してるんだ」

リオ「そのおかげでジローの裁縫スキルはかなりのもんなんだよ」

スバル「なんだ。あの娘も可愛らしい」というのがあるじゃないか。やっぱり女の子だな」

リ・ジ「…………」

……い、言えねえ。実は熊五郎はオレどジローがいないときの身代わりとして紅羽のサンドバッグになつてゐるヌイグルミなんだ……なーんて、口が裂けても言えないッス。容赦なく紅羽にシバかれてボロボロになり、何回も燃える「ゴミ」と一緒に捨てられそうになつた熊五郎を、ジローが何度も何度も修理しているんだ。もはや感覚的にはヌイグルミというより戦友に近いだろ?。ジローと熊五郎は、二人三脚で坂町家の修羅場を潜り抜けてきたのだ。

ジロー「じゃあな。また明日、学園で」

ジローの家の前まできたので一人と別れた。

奏「ええ、またね。リオくん、ジローくん」

……なんだろ。奏の笑みが怖く見えたんだけど。気のせいだよな?

リオ「氣をつけて帰れよ。さ、オレたちも帰ろつか」

ジローの家は普通の一軒家……じゃないんだよな。端から見ればただの一戸建て住宅なんだけど、建物の下には道場兼ウェイトルームになっている地下室があるんだ。<sup>あけみ</sup>ジローと紅羽、ついでにオレもなんだけど、ガキの頃からそこで朱美さんによる格闘技教育を受けてきたんだ。ジローはいつもやられっぱなしだったけどな。オレ？ オレは必死で対抗してたさ！ 何回か死にかけたけどな。車庫には真っ赤で高級そうなスポーツカーが停まっているけど、これも朱美さんの趣味。昔はよくこれで峠をかつ飛ばしていたらしい。どこの走り屋ですかって話だよな。

リオ「そんじゃ、オレも帰るよ」

オレは坂町家から逃げるように我が家へと

“ がしつ !”

ジローに肩を掴まれた。

リオ「おい、そのメッチャ震える手を放せよ。オレは自分の家に帰りたいんだって」

ジロー「頼む！ 一人じゃ怖いんだ！ リオがいたら、いろいろと助かるんだ！！ 主に俺の身が……」

リオ「……つたく……しかたないな」

オレは頭をガシガシとかいて、坂町家に身体を向ける。

ジロー「助かる」

ジローが玄関のカギを開ける。ああ、ここからが正念場だ。紅羽に今日あつたことを上手く説明しなきやな。きっと骨の折れる作業になるんだろうぜ。

ジロー「……マジで折られなきゃいいけど」

リオ「シャレにならないことを言つてんなど

扉を開けると、家中は真っ暗だった。……おかしいな。もうとつくに紅羽が帰つてゐはずなんだけどな。そう思いながら、廊下の電気を点ける

リ・ジ「「わーいー」」

クマのヌイグルミが惨殺されていた。

リオ s i d e o u t

## 第17話（前書き）

リオ「今日は少し短いぜ」

ジロー「ついでに俺視点だ。ようじく

## 第17話

ジロ一 side  
リ・ジ「ひいつ！」

俺たちは思わず悲鳴を悲鳴を上げた。ズタズタに引き裂かれたヌイグルミの惨殺死体。その胴体が廊下の壁に包丁で打たれていた。熊五郎だ。やばい。今、現在の紅羽は日本株式市場なみに荒れている。この凄惨な現場がそれを物語っている。一体どんな技をかければこうなるんだ。修復不可能に近いくらいバラバラになつた熊五郎の身体。ふと その無機質なプラスチックの瞳と目が合つた。

熊五郎『生きろ』

……！ 信じられない。幻聴だ。決して声を出さぬはずのヌイグルミが、俺に向かつて言葉を発した気がした。

ジロー「く、熊五郎お———っ！」

くつ！ 直せるかどうかはわからないけど精一杯頑張るからな、熊五郎！ 僕は心の中でうつうつと、止めどなく流れる熱い涙を拭つた。

リオ「これは……相当ヤバいな」

リオの顔は冷や汗をかいていた。リオのカンが嫌な予感を訴えている。

紅羽「……兄さん、リオ兄」

リ・ジ「「く、紅羽！？」」

聞き慣れた声に改めて前を向くと、そこには紅羽が立っていた。まだ制服のままである。

紅羽「おかれり／＼／＼

リオ「あ、ああ」

ジロー「ただいま……」

あれ？ 思つたより落ち着いてるぞ。それどころか元気がない。やっぱり近衛に負けたのがショックで落ち込んでるのかな。

紅羽「兄さん、リオ兄……一つ訊いていい？／＼／＼

リオ「え、えい？」

ジロー「な、なんだよ？」

妹のやけにマジな口調に緊張してしまつ。もしかして遺言とか訊かれるんじゃねえよな。次に喋つたことが俺たちの最期の言葉になつたりして。あはは、笑えねーぞ。

紅羽「兄さんって……近衛先輩と付き合つてゐるの？／＼」

ジロー「ち、違う。あいつはただの友だちだ」

紅羽「それじゃあ、リオ兄は？／＼」

リオ「違うに決まってるだる。そもそも男同士で付き合つてるわけないだろ」

紅羽「……そつか。そうだよね。今日は全部あたしの勘違いなんだよね。ああ、よかつたあ／＼」

ホツと胸を撫で下ろす紅羽。はて？ 心なしか顔が赤くなっている  
ような。風邪でも引いたんだろうか。

紅羽「あのね……兄さん、リオ兄。ちょっと相談があるんだけど……」

ジロー「相談？」

リオ「どうした？」

紅羽「うん。あたし……好きな人ができちゃったの……」

リ・ジ「……は？」

紅羽「こんな気持ちになつたの初めてで……その、どうしたらいい  
かわからなくて……」

リ・ジ「……」

紅羽「実は……那人、兄さんたちの友だちなんだ……」

紅羽は恥ずかしそうに頬を赤く染めた。警戒警報発令。嫌な予感がする。まるで津波がやってくる寸前の砂浜でビーチバレーにでも興じてる気分だ。リオを見ると冷や汗がハンパない。これは、とんでもないビックウェーブがくるぞ……！

紅羽「それで相談なんだけどね……兄さん、リオ兄／＼／

紅羽はモジモジしながら指をくつつけたり離したりしている。

紅羽「近衛先輩って、付き合ってる人とかいるのかな？／＼／

リオ「さ、まあ」

ジロー「いないんじゃないかな？」

紅羽「そつか……そつなんだ／＼／

えへへと紅羽は笑った。

紅羽「実はね、兄さん／＼／

ジロー「な、なんだ？ 我が妹よ」

紅羽「さつきのキックで、ずきゅんって飛ばされたの//」

ジロー「へ、へえー……」

紅羽「近衛先輩って、強くてかつーーいよねーーー」

リオ「ま、まあ、そうだな。アイツはずーくカッコイイけど……」

紅羽「あたし……大好きになっちゃったーーー」

ジロー「……」

妹が告げた言葉に俺はショックで声が出なかつた。なんだつて？  
紅羽が誰を大好きになっちゃつたつて？

リオ「……しょ、正氣か紅羽あーーーっ！？ あのスバルなんだぞ！？」

紅羽「うん、近衛先輩……//」

大変だ、天国の親父。あんたの娘が、女の子に恋しちまつたぞ。

ジロ I side out

## 第1-8話（前書き）

リオ「ソフィー、リオの女性恐怖症になつた原因が明かされま  
す」

リオ「やつとかよ。こんなに引っ張つて置いて、拍子抜けとかやめ  
るよっ。」

リオ「オレにとつてはサイアクな過去だからな  
リクトン「……僕もみなさんの反応が怖いんだよね……」

リオ「オレにとつてはサイアクな過去だからな」

リクトン「そうだね」

リオ「とつあえず、今回オレ視点と初の第三者視点があるが」

リオ s.i.d.e

リオ「ただいまー……つと」

オレは紅羽の爆弾発言を受けてどつと疲れて帰ってきた。なんだかシバかれた方がいろいろとよかつたのかもしれない。主に精神面で……。オレは誰もいない家にいつものようにしゃべり言つた。誰もいないから返事がないのは当たり前。いつもこの瞬間が淋しくて堪らない。

リオ「……腹もそんな空いてないし、作るのもメンバーだから風呂に入るか」

オレは無気力な身体を引きずつて疲れをとるために浴場へと向かった。

×

リオ「んぐんく……ふはあつー。 風呂上がりはやつぱーヒー牛乳  
だよなー」

風呂上がりだから頭にタオルを被つた状態でコーヒー牛乳を飲む。至福の一時だよな

「その格好のままだと風邪引くわよ、リオくん」

リオ「だいじょぶだよ。いつものことだしさ」

「お嬢様が心配なさつてくださるんだ。早く服を着ろ、リオ」

リオ「なんこと言われてもオレのじゅつてなんでオマエらがオレの家にいるのかー？」

なんとなく違和感がなく会話してたけど、この家にはオレしかいない。なのに声をかけられたことに驚き振り抜くと奏とスバルがいた。

奏「あなたに会いたくて……／＼／＼」

奏は顔を赤く染め、俯き加減でそつまつした。チクショ、なんだこの可愛さは！

リオ「奏にそんなこと言われたら嬉しいのに変わりないけどやー、絶対に違いますよねー！」

奏「あら、バレちゃった」

奏はアッサリと顔をあげ、テヘッと舌を出していった。なにをしてもカワイイんですけど、この生き物。

リオ「そんで、こんな時間に何の用なんだ？　あまり遅い時間に出歩くのは感心しないよ」

スバル「感心しないのは」ひちの台詞だ。玄関のカギはちゃんと閉めておけ。不用心だぞ」

あ、ヤバッ……疲れてカギ閉め忘れたんだ。

リオ「忠告サンキュー。んで？」

奏「……あなたの女性恐怖症になつた原因を教えて欲しくてきただの」

リオ「それはまた、せつかちなことで」

スバル「リオ」

オレがはぐらかすように、おじけるように言つと、スバルが怒つた  
よつにオレの名を呼んだ。

リオ「そんな怖い声出すなつて。ちやんと話すから。……あー、あ  
いにく紅茶が切れててさ、『一ヒーしかないけどいいか?』

戸棚を探ると『一ヒー』しか見当たらない。

奏「ええ」

スバル「ボクがやるからリオは早く服を着てくるんだ」

リオ「サンキューな」

オレはスバルの言葉に甘えて、自室に上着と、あるものを取りに行  
つた。

リオ side out

non side

リオ「お待たせ」

理桜は片手に持っていたビンをテーブルに置く。

奏「リオくん、それ……」

リオ「気にしないでくれ。情けない話、コイツの力を借りないと上手く口が動かないんだ」

理桜はテーブルに置いた瓶　アルコール度数の高いウイスキーをポンポンと叩いた後、グラスを取りに行く。

スバル「どういう意味だ?」

リオ「それくらい今から話すことは弱つちいオレにとつては大変なことなんだよ」

スバルの疑問に、理桜は情けない笑顔を浮かべて答える。グラスの

中にウイスキーを注ぎ、それを一気に煽つた。

スバル「お、おい……そんな勢いよく飲んだらっ！」

リオ「へーキへーキ。だいじょぶだから」

理桜は心配するスバルを手で制止、二人の向かいに座る。

リオ「さて、オレの女性恐怖症になつた原因だつたな」

奏「ええ、そうよ」

リオ「……簡単に言えば、性的暴行って言つていいいんかな？　とりあえずそれを受けたんだ」

奏「……性的」

スバル「暴行……」

二人は理桜から出た言葉に圧倒される。

リオ「……昔、この辺で連續誘拐事件があつたのは知ってるよな？  
金持ちの子供を狙っていたってヤツ」

奏・ス「「……っ！」」

リオ「その様子じゃ知ってるみたいだな。話を続けるけど。オレは  
その誘拐事件の一つにたまたま、巻き込まれたんだ」

顔を引きつらせる一人に理桜は話を続ける。

スバル「……巻き込まれた？」

リオ「ああ。オレは誘拐現場を目撃しちまつたんだ。犯人たちも焦  
つてな、オレを薬で眠らせて一緒に連れてつたんだ」

理桜はスバルの入れたコーヒーに一度、口をつける。

リオ「次に目を覚ましたら、誘拐犯が子供に向かって、ナイフを刺  
そうとしててさ、頭がハツキリしてもいいのにオレの身体は、誘  
拐犯と子供の間にあつてな」

奏「……まさか、刺されたの？」

リオ「んや、かすっただけだった。けど、血が止まんなくてさ、誘拐犯たちはまた焦つて、オレを別室にいる仲間の所へ治療のために連れてつたんだ」

そのときの慌てようは笑えたぜ、と理桜はヘラヘラした笑いで言った。

リオ「そして、問題がこの後だつたんだ」

そう言つと、理桜の顔が無表情になつた。

リオ「……その治療してくれたのがさ、若い女性だつたんだけど。ソイツが重度のショタコンだつたんだ。そこで、小さいオレがドストライクだつたらしく……オレに欲情したんだ。」

×

「はい、僕。終わつたよ」

リオ「おねーさん、ありがと」

「ひー？」

「つー？／／／」

幼い理桜が笑顔で礼を言つと、女は衝撃を受けたように顔を赤くさせる。

リオ「おねーさん、かおがあかいけどだいじょぶ？ それとなんでもふくをぬい』としてるの？」

「大丈夫だよ。心配してくれてありがとな」

理桜が心配する中、女は服を半脱ぎした。

リオ「どういたしまして。オレ、れつきのくやにもど」

理桜は何か身の危険を感じたのか逃げようとするが

「ガシツ、

リオ「おねーさん?」

女にあつさり捕まつてしまつた。

「ああ、僕～。お姉さんと愉しい」とじょひね～

リオ「イ、イヤだ……」

「大丈夫だよ、気持ちよくなるだけだから」

服を半脱ぎの状態で理桜に迫り組敷く。

リオ「!/? や、やめ……つ!/?」

そして理桜の全身を舐めたり触つたりとして、嫌がる理桜の反応を楽しんでいった。

「今度は僕がする番よ

……しばらくして、女はそれに満足すると今度は自分の身体を触る  
ように強要してきた。

リオ「イ、ヤだ……たすけて……」

当然、理桜は拒んだ。

「ワガママを言つてはオシオキしないとな」

リオ「くつー? ……う、わあ……がはつ……」

女は笑顔で理桜の首を絞める。

「おねーさんのお願い訊ける?」

リオ「(フルフル)」

理桜は女の問いかに苦しみながら懸命に首を振る。

「やあ……」

リオ「…………」

女は理桜の首から手を放すと近くにあったパイプを手に取る。

「それじゃ、今度はこれよ」

“ ガンツ！ ”

理桜 “ ガツ！？ いた、いよ…… ”

女は理桜の頭をパイプで殴つた。

「僕がおねーさんの言つことを聞いてくれたら止めてあげるよ。どうする？」

理桜が逃げるような素振りや拒絶の姿勢を見せると、女は首を絞めたり、頭を殴つたりと理桜に恐怖を刷り込んでいく。

理桜 “ お、おねがい！ いひときくから…… もう、やめてー。 ”

最終的に理桜は女に屈すことになったのだ。

n  
o  
n

s  
i  
d  
e  
o  
u  
t

第18話（後書き）

感想など頂ければ幸いです。

## 第1-9話（前書き）

リオ「いつの間にか、お気に入りが50件突破してたぞ」

ジロー「こんな小説なのにな……お気に入り登録してくれたみなさん、ありがとうございます」

## 第19話

リオ said

リオ「……と、まあ、これがオレの女性恐怖症になつた原因なんだ。ワルいな。気分のワルい話を訊かせて」

オレは話すこと疲れたので、一息つくよつヒーリングバーを飲む。

奏「……」

リオ「過呼吸や頭痛はそのときのことだがフラッシュバックしてるからだと思つんだ」

スバル「……」

リオ「あの時はさ、どのくらい時間が過ぎたかなんてわからなかつた……数分だつたのか、数日なのか、オレにとつてはどっちも変わらなかつたんだ……ただの地獄だつたからな。しばらくして警察に保護されたオレは病院に連れてかれた。事件直後のオレは……全ての女性に近付かれるだけであらゆる症状を発症した」

奏「……全ての女性?」

オレのある言葉に奏はすかわす反応した。

リオ「ああ。病院の看護師ビービーか自分の母親にすうな」

スバル「え……」

リオ「笑えるだろ？　自分の母親にもだぜ？　母さんがあのショタコンと同じなわけないってわかつてんのに。どこまで、チキンなんだって話だろ」

奏「……リオくん……」

スバル「……リオ……」

ケラケラと笑うオレに一人はどう反応していいかわからずオレの名を呼ぶことしかできないみたいだ。こんな話されて笑えるわけないだろうけど、こうこう反応されるのは苦手なんだよな。

リオ「あ、心配はすんなよ。いろいろと頑張つて家族に対しても克服したしさ　それに自分から触れるのだったら結構平気だしさ」

スバル「そ、か」

オレは安心させるように笑顔を作るが、奏は無表情、スバルは複雑そうな顔をしていた。二人にそうされると気が滅入る。オレはいたたまれなくなつて二人の背後に回る。

リオ「おいおい、もう過ぎたことなんだからそんな暗い顔すんなよー。カワイイ顔が台無しだぜ？」な、一人は笑つてる顔の方が断然いいんだからさ」「

『ナデナデ』

奏「あ……／／／」  
スバル「むう……／／／」

奏は思わずつて感じに声を漏らし、スバルはなんか拗ねた感じの声を出した。

リオ「なんだ？」

スバル「リオがボクのことを子供扱いしてる気がしてさ。」

リオ「そういうつもりはないんだけど……言われてみたら、妹がいたらこんななんかつて感じなのかもしないな」

スバル「妹なのか？」

リオ「うん、スバルは妹って感じだな。見てて微笑ましいし。オレ  
つて一人っ子だからさ。兄弟つてのに憧れがあるんだ」

スバル「兄弟に憧れる気持ちはボクにもあるな」

リオ「なら、今日からオレのことを兄貴だと思ってくれてもいいぞ  
？」

スバル「……考えておく……」

リオ「お、おう」

バカな」とを言つなつて、一蹴されるかと思いきや、意外や意外。  
返ってきたのがなんと保留の言葉だ。そういうや、奏が静かなんだけ  
ど？

リオ「奏？」

“ナデナガ”

オレは奏の頭に乗せたままだつた左手を動かす。

奏「…………／＼／＼」

おー……わつあ撫でたときも思ったけど、髪、メッシュチャサラサラしている。オレの髪とはえらい違いだな。この綺麗な髪の手入れって大変そうだよなー。

リオ「…………すっと、いひじててえな…………」

撫で心地、サイゴー

奏「リ、リオくん？／＼／＼？」

リオ「んや、なんでもねえよ。それよか早く帰らなくともこいのか

？」

奏「そうね。スバル／＼／＼」

スバル「かし」まつました」

スバルは恭しく頭を下げる。部屋を出ていった。たぶん、車を呼んでくるんだろう。

リオ「ってか、奏。なんで顔が赤いんだ? 風邪か?」

奏「だ、大丈夫よーーー」

リオ「そつか。なら、いいんだけど」

奏「……もへ、誰のせいだと思ってるのよ……／＼／＼

リオ「?」

なんかぶつぶつ言つてるけど、オレ、機嫌そこねちまつたか?  
あ、効果ないかもしんねえけど……。

リオ「奏、これあげる」

オレはゲーセンで取つた『爆笑オオカミ』を奏の頭に乗せる。

奏「「これはなに?」

リオ「今日、UFOキヤツチャーで取ったヤツ。『爆笑オオカミ』。スバルが好きな『沈黙ヒツジ』のシリーズものだつてさ。オレ、いろいろなから奏に帰るとき、渡そうと思って忘れてたんだ。コイツもオレなんかより奏にもらわれた方が嬉しいしな」

奏「そ、う、ありがと」

リオ「いらなかつたら捨てるか、スバルにでもあげればいいからさ」

奏「ううん。嬉しい、大切にするわ」

奏は『爆笑オオカミ』を大事そうに抱き締めて、オレを上田遣いに見上げた。すぐ恥ずかしいというか、テれるんですけど——

リオ「お、おう。奏つて、ヌイグルミとか好きなのか?」

奏「まあまあ、好きよ」

リオ「そんなりと、JFのキャッチャーでまたなんか取つたりこる  
？ オレ、よくゲーセン行くし」

ウソだ。ゲーセン、あんま行かねえし。オレ、ゲーセンの魔力に負けて一日三万消費したからな。それから、今までゲーセンに近寄らなかつたし。

奏「くれると言つなら、頂くわ」

うしつ！ オレ、しばらく、あのゲーセン通つ。そして、あそこのJFのキャッチャーのヌイグルミ、全種集めてやるーー！

奏「はい、リオくん」

リオ「ん、なに？」

奏が差し出した紙に描いてあつたのはあの斬新なヒツジの絵があつた。

リオ「って、これ、執事券じゃん。いいのか？」

奏「ええ、この子のお礼よ」

リオ「サンキュー」

オレは遠慮なく受け取った。スバルになにしてもらおつかなー。

奏「あ、リオくん」

リオ「?」

奏「スバルに変なことをせたら……覚えておいてね」

リオ「ハイ、リョウカイテス！」

奏のイイ笑顔にオレは敬礼をした。身の危険しか感じませんけどお！？

スバル「お嬢様、お待たせいたしました。……って、リオはなんで敬礼なんかしているんだ？」

奏「気にしなくていいのよ。さ、帰りましょ、スバル」

スバル「はい、お嬢様」

奏「それじゃあ、また明日ね、リオくん」

スバル「それじゃ、リオ。失礼する」

リオ「気を付けてお帰りください」

オレは敬礼したまま、二人を見送ったのだ。

リオ side out

## 第1-9話（後書き）

主従コンビが庭渡家訪問中のジローといつと

ジロー「どうじょうひ……熊五郎！　お、俺はどうじたらいこんだ！？　紅羽が近衛を好きだなんて！」

“ヌイヌイ……”

ジローは熊五郎を修復しながら、紅羽のことで悶々としていた。

熊五郎『恋愛は人それぞれだ。いくら兄貴と言えど、それは口出ししちゃならないぜ？』

“ヌイヌイ……”

ジロー「く、熊五郎！　おまえ、大人すぎる考え方だぞ、それは

熊五郎『ふつ……まだまだガキだな、相棒』

ジロー「……って、熊五郎が喋るわけないだろー！　現実逃避して

る場合、じやないだろ？が！　！　助けてくれ、天国の親父ーつー？』

天国の父親、坂町

次郎に助けを求める、小さい声で絶叫していた。

## 第20話（前書き）

リオ「今日はジロー視点で少し短いぜ」

\* 加筆・修正しました\*

## 第20話

ジロー side

奏「あはははははは」

ゲーセンデートした畠田。昼休みの屋上。澄みきつた青空の下で、涼月は笑っていた。腹部を押さえながら、酸欠になりそうなぐらいに笑い悶えていた。

ジロー「……笑うなよ」

リオ「そうだぞ。事態はかなり深刻なんだ」

できることなら俺だつて笑いたいや。だつて信じられるかよ。あの紅羽が、近衛を好きになつちまつなんて……。

奏「ほら、私の言った通りじゃない。結果的にはジローくんの妹さんが、スバルの蹴りでいけない趣味に田代めちゃつたのね」

リオ「なあ、奏。その言い方はやめてやんづせ? ジローの顔が可哀想なことになつてるから」

ジロー「！」のままじやストレスで俺の胃に穴が開く

そう……すべての原因はあの蹴りだった。いや、決して俺の妹にそんな変態的な趣味があるわけじゃないぞ！

『自分より強い人が好き』

思えば、紅羽は昔からよくそう言っていた。しかし悲しいことに紅羽は我が坂町の人間 格闘技の申し子である。障害無敗。それこそ、今まで紅羽に勝てる同年代の男なんて誰もいなかつた。そんな紅羽が初めて味わつた敗北。近衛スバル。

リオ「奏。なんとかならないのか？ 奏だって困るんだぞ？」

文字通り、その強さにびきゅんときちまつたんだろう。ただ、問題は……。

奏「いいじゃない。お似合いの一人だと思つわ

ジロー「……おまえ、本氣で言つてんのか？」

奏「多少の障害なんて二人の愛があれば乗り越えられるでしょう？」

リオ「頼むからそういう関係のことでオレに同意を求めるいでくれよー。」

ジロー「そんなことを聞くためにおまえをここに呼び出したんじゃないんだよ！」

今ここに近衛はいない……ところが、こんな話をしているのに呼べるわけがない。そんなわけで涼月とリオと俺の三人だ。

ジロー「紅羽は近衛の秘密を知らないんだぞ。それともおまえはあいつらがそういう関係になつてもいいのかよ」

奏「あら、最近じゃそういう恋愛も珍しくないんじゃない。意外と近くにそういう趣味の人人がいるかも知れないわよ」

リオ「いねえよー。そんなヤツがホイホイいても困りますからあーーー！」

ジロー「リオ、少し落ち着いてくれ」

リオ「お、おひ

リオは涼月に向かつて叫ぶ。そんなりオが面白いのかくすくすと笑う涼月。リオは同性愛とかが苦手だからな。俺だつてそうだけど。とりあえずリオを宥めて話を続ける。

ジロー「とにかくだ。協力してくれ涼月。おまえにだつて責任はあるんだぞ」

奏「責任?」

涼月は怪訝そうな顔をした。

ジロー「せうだよ。……おまえ、今朝も近衛を俺の家に寄越したろ」

奏「そうね。何か問題があつた?」

ジロー「大ありだ。おまえのせいにこいつちはえらい目にあつたんだよ……!」

奏「?」

涼円は不思議そうに首を傾げてリオを見る。

リオ「なんでオレを見るんだよ。たしかにオレも何があつたか知ってるけど、ジローが説明するから」

俺はリオに促されて、今朝起きた事件を説明してやることにした。やつ、早朝の坂町家で起きた、あの悪夢のよつた惨劇を……。

紅羽「おはよう、呪さん」

ジロー「よ、よつ、紅羽。びついた？ やけに元気ないけど寝不足か？」

紅羽「うん。なんか胸がドキドキしちゃって眠れなくて」

ジロー「……」

紅羽「やつこの呪さんも顔色悪いけど、また寝てないの？」

ジロー「あ……なんか胸がドキドキして眠れなくてや」

それと、熊五郎の修繕に全力を注いでたからな。

紅羽「ふえ？ なんで兄さんまでドキドキしてんの」

ジロー「いや……気にするな、ちょっと深刻な悩みがあるだけだ。それよりシャワーでも浴びてさっぱりしてこいよ。俺もあとで浴びるから」

紅羽「うん、ありがと。じゃあ先に使つね」

パタパタと紅羽はリビングから脱衣所へと向かった。数秒後、ガチャリと玄関のドアの開く音。

スバル「おはよっ、ジロー」

ジロー「！」近衛！？ なんで俺の家に！？」

スバル「む。そんなの一緒に登……いや、おまえの監視するために決まっているだろう。それより玄関の鍵はちゃんと閉めた方がいい。リオといい、ジローといい、不用心だぞ」

リオ「昨日のはたまたまだつての。はよ、ジロー」

ジロー「……」

リオ「？ なんでそんな深刻な顔で黙つてんだ？」

スバル「ボクたちが来て何かまざいことでもあるのか？」

ジロー「い、いや、別にそんなことは……」

紅羽「兄さん。お風呂場のシャンプーが切れてるみたいなの。だから押し入れから買い置きのやつを……」

言いながら紅羽はリビングに戻ってきた。半裸で。シャワーを浴びる直前だったのか、下着しか身に着けていない。そんなあられもない姿の妹は、突然の来訪者を見て言葉をなくしていた。

リ・ジ・ス・紅「「「…………」「」

黙り込む俺たち。リビングを静寂が支配する中、リオの顔が真っ青

に変色。紅羽の顔が信号機のよつに田沼ぐるしく変色、驚愕に見開かれた両田は一点を凝視していた。もちろん、近衛スバルを。

紅羽「にゃああああああああつ！」

切り裂かれる静寂。断末魔のごとき悲鳴を上げて、紅羽はリビングから走り去った。逃走経路から言って、たぶん自分の部屋に行つたんだろう。何事もなかつたように、再びリビングに静寂が訪れる。回想終了。これが　早朝の坂町家で一人の少女の身に起きた惨劇の全貌である。

## 第21話（前書き）

リオ「あさせん、紫苑さん感想ありがとうござります」

ジロー「前回に引き続き俺視点だぞー」

## 第21話

奏「あはははははははつ！」

俺の話を聞いて、涼月は目に涙を浮かべながら爆笑しやがった。昨日、リオがゲーセンのH.F.O.キャッチャーで取った『爆笑オオカミ』が頭に浮かんだ。ものすごく腹が立つんだけど。

ジロー「笑うなっ！ こいつは大変だつたんだぞ！」

事件の後、俺が何を言つてもあいつの部屋のドアが開くことはなかった。リオも紅羽の半裸と遭遇したせいで発作を発症しかけるしおしかたなかつたから学園に来たんだが……。

ジロー「大丈夫かな、あいつ」

リオ「あのまま不登校になつたりしてな」

ジロー「ありうるな……」

奏「あら、それなら大丈夫よ」

涼円はわかりきつたことでも重いよ、アヒル。

奏「だつて、そこにはいるわよ。あなたの妹さん」

俺たちの背後を指差した。

リ・ジ「は？」

振り返ると、そこには屋上の扉。わずかに開いた扉の隙間から、こちらを覗く大きな瞳が。

ジロー「げつ」

ホラー映画じみた光景に呻き声を上げた瞬間だつた。どかんと扉が開いて、見慣れたショートカットが現れた。我が妹、紅羽だ。

紅羽「探したよ。兄さん、リオ兄」

リオ「お、おま、おま……」

ジロー「こつからセ」……

紅羽「今さつきかな。それより、どうして兄たちが涼月先輩みたいな有名人と一緒にいるの?」

リオ「友達だからだ! 友達なんだから一緒にいるのは普通だろ」

紅羽「…………うん。言いたくないんなら言わなくてもいいよ」

リオ「ちょっと待て、紅羽っ! オレの言葉はスルーなのか!? スルーなんですかあ!? なーってば! 紅羽! お願いですからオレの言葉を聞き入れてくれませんかねえっ! ?」

リオが本当のことと言ったのに紅羽は聞く耳持たない。必死で抗議するが相手にされない。リオが憐れだ……。

紅羽「あたし、もう全部わかっちゃったから」

ジロー「はい?」

わかつちやつた? なにが?

紅羽「やつぱり……兄さんは近衛先輩と付き合ひてるんだね」

リオ「どうしてオマエはそういう方向に話を持つてくんだよー。」

ジロー「どうしておまえはそういう方向に話を持つてくんだよー。」

俺とリオのツッコミがハモる。ここでの思考回路はずんでも繋がってるのか。やけに真剣な表情してると思つたらまた誤解してんのかよ。

紅羽「だって、やうとしか思えなによ。昨日のこともあるし、今朝も近衛先輩が兄さんを迎えて来たしね」

ジロー「そ、それは……」

うう、たしかに。昨日と今朝のことを考えたらそういう思われてもしかたないかもしれないけど……。

リオ「なあ、紅羽？ 一応、今朝、オレもいたんだけど……。今朝のオマエの格好のおかけでオレ、発作を起こしかけたんだぜ？ オレの存在消してないか？」

紅羽「それに……兄さんだし」

ジロー「ちよっと待て！ その兄さんだしってのはどういう意味だ  
！？」

リオ「……あーもつとい……オレはいらない子なんだ……ビーセ、  
オレなんか……。」

リオがイジけてるが、今はそれを宥める余裕は俺はない。それより大事なのは、妹の中で俺はどうなってるのかをはつきりさせる方が先だ。

ジロー「おまえは俺をどんな兄だと思つてんだよー。」

紅羽「……B-L?」

ジロー「うわあああああっ！」

なんてこつた！ 家族に……実の妹に同性愛者だと認識されてしまつた！

紅羽「大丈夫だよ兄さん。あたし、そういう趣味の人にも偏見を持たないように頑張るから」

ジロー「やめろー。そんな温かい田でこっちを見るな！俺は紛れもなく異性愛者だ！」

紅羽が偏見持たないよに頑張ってくれても、隣で〇・ニ状態になつてるリオが「……紅羽が認めようがオレが認めねえ……」そうなつたらオレが……とか、ぶつぶつと言つてるんだって！かなり怖いんだけど……。

紅羽「そうだよね……兄さんは、女人も好きだったね」

ジロー「『も』つてなんだよ！俺が好きなのは女だけだ！バイなんかじゅねえからな！」

紅羽「はいはい、もうわかったから」

適当にあしらわれた！？妹にやられるとかなりダメージがあるんだけど！－

ジロー「わかつてない！おまえは全然わかつてないぞ！－

紅羽「……じゃあ、どうこういとなの？あたしにもわかるよ！」

説明してよ

ジロー「うう……」

くわ、説明できるならしたよ。でもここは涼月がいる。俺が紅羽に近衛が女だつてことをバラしたらこの女になにをされるかわからない。もしかしたら洗脳とかされて記憶を消されるかもしれん。紅羽なら洗脳とか簡単にそれそつだし。恐る恐る隣を窺うと、涼月は小さく息を吐いた。

奏「わかったわ。こうなつたら本当のことを言いましょう」

ジロー「す、涼月……」

奏「しかたないでしょ。ここまで来たらひひひ通せなつわ

涼月はしっかりと紅羽と向き合つた。その口唇がゆっくりと言葉を紡ぐ。

奏「坂町さん。あなたの見解は間違つてないわ。スバルは……あなたのお兄さんたちのことのが好きなのよ」「みのり

ジロー「……」

ちよつと待て。こきなりなに言つてんですか、この人！？

紅羽「やつぱり」

頷く紅羽。反論したかったが、俺はショックで口もきけなかつた。

奏「でも安心して。ジローくんとスバルはまだ付き合つてはないから

紅羽「ええ、そりゃ。だって……」

奏「ええ、そりゃ。だって……」

涼月は少しだけ間を置いてから、

奏「ジローくんは、この私と付き合つてゐるんだもの」

なんて。わけのわからないことを口こした。

リ・ジ・紅「「「は?」」

ガツンと金属バットで後頭部をフルスティングされた感じだった。  
紅羽もリオも同じだつたらしく、驚愕に目を白黒させている。

紅羽「いつ……今、なんて……」

奏「聞こえなかつた? 私とジローくんは恋人同士なの。スバルには秘密だけどね」

リオ「……恋人、同士……奏と、ジローが? どういうことだ?」

リオがあまりの衝撃だつたのか。そこから膝立ちになりそう眩いでいた。リオから負のオーラが漂つてきてるのは氣のせいであつてほしい。

ジロー side out

## 第21話（後書き）

リオ「おい！ 今回のオレの扱いおかしくないか！？ オレ一応、この小説の主人公だよな！？」

リップトン「ほら、いつもカッコにこつまんないから……たまにはボケもいれとかないと」

ジロー「あればボケと言つかシカト&放置だつたぞ」

リプトン「たまこはいいじやんか。ああいつのも需要があるかもだから」

ジロー「かもつて……適當だな……」

リオ「ない！ 絶対に需要なんてありませんからあつ！？」

## 第22話（前書き）

リオ「あさせん、紫苑さんいつも感想ありがとうございますー。」

ジロー「今日はリオ視点だ」

## 第22話

リオ side

奏「ジローくんは、この私と付き合つてるんだもの」

リ・ジ・紅「「「は？」」」

ガツンと金属バットで後頭部をフルスティングされた感じだった。

紅羽「いつ……今、なんて……」

奏「聞こえなかつた？ 私とジローくんは恋人同士なの。スバルには秘密だけどね」

リオ「……恋人、同士……奏と、ジローが？ ビックリだ？」

オレはあまりの衝撃を受けて。「から膝立ちになりそう呟いた。オレ、なんも訊いてないぞ？」

リオ「ちょ、ちょっと待てよ！ オレ、なんも訊いてないんだけど！ ビックリとなんだよ、ジロー？ # ちゃんと、説明しろよ！」

オレはジローの胸ぐらを掴み、問い質す。

ジロー「俺だつて知るかよ！？俺が説明してもらいたいくらいだよ。ってか、なんでおまえは怒つてんだよ！」

リオ「オレとスバルが仲間外れにされたからに決まってんだろう！？」

ジロー「そつちかよ！ もつと違うことがあるだろ」が

ジローは呆れた感じで言つた。オレにとっては結構重要なことなんだぞ。

紅羽「そつ……そんなん！ そんなの嘘です！ どうして涼月先輩みたいな人がうちの兄さんと付き合つてるんですか…」

奏「どうしてって、私がクラスメイトと付き合ひちゃいけないのかしら

紅羽「そ、そういうわけじゃないんですけど……！」

う一つと紅羽は唸つた。見たところ全然納得してないっぽいな。そ

りやそうだ。オレもわけわからんねえし。ジローも状況把握しきれてねえし。

紅羽「なんで、リオ兄じゃなくて、うちの兄さんなんかと付き合つてるんですか！？」

ジロー「おい、紅羽！ なんかどつてのはなんだ！？ 今のはどういう意味だ！？」

紅羽「それに、兄さんが涼月先輩と付き合つているのならリオ兄が知らないなんておかしいです！」

ジロー「紅羽、訊けつて！ 今度は俺のことを見事にスルーしてやがる。

紅羽は実の兄貴に対して失礼な言い種の上、兄貴の問い合わせを見事にスルーしてやがる。

奏「それはしかたないわ。私がリオくんには秘密にして欲しいと、ジローくんにお願いしたの」

紅羽「どうしてですか？」

奏「あまり言いたくないんだけど……」  
「聞ひていいかしい」

リオ「なんだよ？」

奏がオレにさう訊いてきた。オレなんかしたつけ？

奏「私、リオくんに畠田されて断つたの……」

リ・ジ・紅「『はあー…?』」「

奏の放った爆弾にオレたちの声が揃った。お、おい？ オレ、いつ、奏様に告白しましたっけ？ ってか、知らないしつこフリてるんですけど、オレ！？

ジロー「おまえ、なんてチャレンジヤーなことをしたんだよ」

リオ「ち、違う… そんな事じ…『オ、オレの初めての女になつてくださいー』『は、な、い？』

今のはオレの声じやね？ ってか、あんときのセリフじやねえか！  
？（第7話参照） いつの間に録音してたんですか！

奏「リオくん……ショックだったからって無かつたことにするなんて酷いわ」

奏はボイスレコーダーを片手に持つて、哀しげに言った。このお嬢様、怖い……田が楽しげに笑っていますけどっ！」

紅羽「……リオ兄……」

ジロー「……おまえ、すいじよ……」

リオ「だから、違つて言つてますよねえ！？」

坂町兄妹がぽんつと肩を叩いてオレを励まそつとする。

ジロー「もう、なにも言わなくていいって」

リオ「だからっ！」

なんで、オレの周りは人の話を訊かないんだ！？

紅羽「でも……やっぱり信じられません！ ちゃんとした証拠でもない限り、そんな話を信じられるわけが」

奏「わき腹の痣」

その言葉に、紅羽は銃弾でも撃ち込まれたみたいにピタッと固まつた。

奏「ジローくんって左のわき腹のところに痣があるでしょ？ 私がそれを知っているのが確固とした証拠よ」

紅羽「そっ、それはどういう意味ですか？」

奏「あら、聞きたいの？」

くすっと奏は笑う。

奏「私がジローくんの服を脱がせたからよ。もちろんベッドの上でね」

全く表情を変えずに「とんでもない」と言い放つ奏様。爆弾発言が

好きだな、」のお嬢様。

リオ「……ジロー、やつちまつたのか？ あ、ゴメン、間違えた。やられちまつたのか？」

オレは小さくジローに訊いた。

ジロー「そんなわけねえだろ！？ おまえと同じじいとされたんだ！」

それにジローも小声だったが、必死に弁解してきた。ジローがそんなことできつかよ。ただのチキンだし。奏に実験という、イジメを受けて脱がせられたんだろう。やっぱりジローの反応は面白い。

リオ「じょーだんだつて」

しかし、そんなことは全く知らない紅羽は、顔を真っ赤にして茫然としていた。

紅羽「そ……そんな……ベッヂつて……」

奏「言つたでしょ？ 私とジローくんは付き合つてゐる。だつたら別に普通ぢやない」

紅羽「う……うそ……兄さんが……」

紅羽はぐるぐると目を回しそうだった。ちなみにジローは疲労困憊だ。

紅羽「でつ、でも……兄さんは女人に触られるのが苦手で……」

……おーい、ジローを女性恐怖症にしちゃった一人がそれを言っちゃいますか、紅羽よ。

奏「大丈夫。多少の障害は一人の愛があれば乗り越えられる。少な  
くとも私はそう思ってるから」

だいじょぶだ、紅羽。心配する必要はないぞ。奏とジローの二人の間に愛なんか一ミクロも存在しないから。オマエが想像してたようなピンクなことは起こってないよ。だから、ジローはまだ大人の階段は登つてないぞ。

紅羽「……」

しかし、そんなことを知らない紅羽には奏の言葉がかなりショック

だつたのか、もはやひっくり返る寸前に追い込まれていた。タオルがあつたら投げ込まれていてるな、うん。

## 第23話

奏「でも……だから、私はあなたを応援したいの」

紅羽「……え？」

先程と打って変わって、奏は優しい口調で囁いた。

奏「スバルにはちゃんと女の子と恋愛して欲しい。あの娘の主としても、ジローくんの恋人としても、私はそう思うの。だから、坂町さん」

懐からチケットのようなものが取り出される。今度は執事券じゃない。それは、最近この近くにリニューアルオープンしたレジャーランドの入場券だった。けど、どうして四枚もあるんだ？

奏「今週の日曜日、遊びに行きましょう」

紅羽「遊びに……ですか？」

奏「そう、ダブルデートって言えぱいいかしら？　私とジローくん。スバルとあなた。ね？　とっても楽しそうでしょう」

奏はにこやかに微笑みかけた。そこにいたのは間違いなく涼月奏。学園一の美少女。perfectなお嬢様としての彼女の姿だった。

奏「坂町さん……いいえ、紅羽ちゃん。私はあなたに頑張って欲しいの。だから精一杯応援するわ。だつて……あなたは将来、私の妹になるかもしれないんだもの」

完璧なスマイルとともに、奏はトドメの弾丸を撃ち込んだ。決まりな。誰が見ても勝敗は明らかだ。

紅羽「わかりました、涼月先輩。……いえ、お姉さま」

何かを決心したのか、紅羽は小さな拳をぎゅっと握り締めた。

紅羽「あたしが必ず、近衛先輩をいけない道から救い出してみせますっ！」

待て！ 待つんだ、紅羽！ オマエが頑張つたらそれこそ、スバルがイケない道に走ってしまいますからあ！？

奏「ふふ、ありがとう紅羽ちゃん。期待してるわ」

がつしりと。紅羽と奏は固い握手を交わした。どうやら、一人の間には言葉では表せない強い絆が結ばれたようだ。まあ、なんつーか。涼月奏。やっぱりこのお嬢様、ただもんじやないわ。あの坂町家のリトルモンスターである紅羽を、完璧に手懐けやがりましたよ。

紅羽「それじゃお姉さま。あたしはそろそろ教室に戻ります。日曜日、楽しみにしてますからー。」

ぶんぶんと元気に手を振りながら、紅羽は屋上から去っていった。それを見送つてから、ジローが奏を呼ぶ。

ジロー「……おい、涼月。」

奏「なあに? ジローくん」

ジロー「あつきの話ついで……」

奏「ええ、まったくの『テタラメ』ね。あのチケットも偶然手に入つたものよ」

リオ「『テタラメ』……」

何事もなかつたように言つ奏。魔王だ。優等生の仮面を剥ぎ取つて、今ここにサタン奏が再臨していた。

奏「だつて、しかたないでしょ。あのまま話をしていくたら、ジローくんがスバルの秘密をバラしかやいそつだつたし」

リオ「そりゃそうだつたかもしれないけど。……なあ

ジロー「だからって、おまえと俺が付き合つてゐるなんて……」

奏「別に大丈夫よ。あの娘が周りに言いふらすタイプには見えなかつたしね」

リオ「たしかにアイシはそういうタイプじゃないナビ……」

オレが心配なのはジローの身なんだけど。もし、こんなことがスバルにバレたら主に手を出した害虫と見なされてツブされるんじゃないのか？

ジロー「それ……なんでもまた遊びになんか行くんだよ」

奏「あら、 だつて……」

奏はくすくすと笑っていた。

奏「すうじく畠田やうじょう。こんなおかしなシチュエーションは生まれて初めてよ。ああ、日曜日が楽しみでしかたないわ」

ジロー「……さいですか」

ジローは半ば諦めた感じだった。なんだか。だんだん奏つていう人間がわかつってきた気がするよ。つまりコイツは、面白くて笑えることが大好きなんだ。箱入りのお嬢様だから案外そういうことに飢えてんのかもな。退屈を嫌い、常に自分を楽しませる何かを求めて、その為には手段を選ばない。典型的な愉快犯、眞の意味でのトラブルメーカーだ。まったく……これじゃ魔王や悪魔っていうより小悪魔だよ。背中にパタパタと黒い羽が見えても不思議じゃないぜ。

奏「それに、これはあなたたちの女性恐怖症を治す一環でもあるのよ」

奏はそれこそ小悪魔のよつに微笑んだ。

奏「頑張つてね、私の恋人役。気をつけないと、出血多量で死んじゃつわよ?」

ジロー「……お、おひ?」

奏に上目遣いで顔を覗きこまれて、ジローはそっぽを向いた。オレはその光景に少しばかりムツときた。ジローの顔を覗きこんだときに見せた奏の笑顔は……教室で見せるものよりずっと、ずっと可愛かったのだ。それがオレではなくジローへ向けられたのがほんの少しだけムカついた。

リオ「……死因が鼻血だと情けなれすぎるからな。頑張れよ、ジロー?」

ジロー「お、おひ?……って、リオは来ない気かよ?」

リオ「……あいにく、オレは日曜日は予定があるんでな」

予定なんてねえよ! けど、奏とジローの恋人じつこを見るだなんて、なんか面白くないし。なにより、行つたら口クな日に遭わないとオレのシックスセンスがそう叫びてるんだ。

リオ「ダブルデートなんだる? ジャマしちゃ悪いし」

ジロー「待て！俺を見捨てないでくれ！？俺一人でここにいり人を相手にするのはどう考へても無理があるだろ！」

リオ「知るかよ。それにオレの分の入場券はないみたいだから、今回は遠慮するよ」

ジローが必死にオレの肩を掴むけど、オレはそれを払う。

奏「……日曜日までにやせることができるたわね」

はあつと深々と息を吐く音が聞こえた。……ため息？　あの奏がため息をついたのか？

奏「どうやつてスバルを説得しようかしら。ちょっとだけ憂鬱ね。あの娘、私が遊びに出掛けるのをとっても嫌がると思うから」

リ・ジ「…………？」

オレたちには彼女の言葉の意味がわからなかつた。そう、このときのオレは、まだ気づくことができなかつた。彼女の　涼月奏の憂鬱の理由に……。

リオ side out

non side

リオ「オレたちもそろそろ教室に戻らうぜ」

ジロー「やうだな」

理桜は立ち上がるとすたすたと出口に向かう。

ジロー「ほり、涼月も行くぞ」

近次郎は未だにベンチに座つてゐる奏に声をかける。

奏「ジローくん」

ジロー「どうした?」

奏「日曜日は必ずリオくんにも来てもらひから。安心してね。どんな手段を使っても来てもらひから」

ジロー「は、はー」

リオ「なにやつてんだよ、一人とも。早く行こうぜ」

奏「はじめんなさい、今行くわ」

ジロー【リオ、おまえの身になにが起こるかわからんが、『デビル涼月に気をつけ』】

理桜に呼ばれ、奏は理桜の隣に行く。そんな二人を見て近次郎は心中で理桜の身を案じた。後に、近次郎はこう語っていた。『あのときの涼月はそれこそ悪魔のように笑っていた』

non side out

番外編 クリスマスsss（前書き）

リプトン「クリスマス番外編！」

リオ「本当は書くつもりなかつたらしひけどな」

ジロー「ま、かなりグダグダだつたからな」

リプトン「うるちやい！」

リオ「まあ、番外編だから読んでも読まなくてもだいじょぶだ」

## 番外編 クリスマスDFS

リオ「クリスマスか……」

オレはカレンダーを見てそり返っていた。

ジロー「しみじみと書つなよ……」

リオ「いや、だつてや……なにが哀しくて男のオマエとゲームやつてクリスマス過い」やなきゃなんないんだ?」

そう、今日は12月25日、クリスマスだ。そんな日なのに、オレはジローの部屋でジローと格ゲーをしている。オレにはクリスマスを過ごすカワいい彼女はないからな……。

ジロー「しかたないだろ。紅羽も友だちとクリスマスパーティーするつて出掛けたんだから。それに……」

リオ「なんだよ

ジロー「悪気を出して涼月を誘つたけど断られたんだろ」

リオ「ぐつ……」

そうなのだ。せっかく友だちになつたから頑張つて誘つたんだ。もちろんダメ元で誘つたから全然！ こればつちもキズついてなんかないんだからな！

リオ「うるさい！ 奏は涼月家主催のパーティだつたからムリだつたんだよ！？ オマエだつてスバル誘つたんだろ」「

ジロー「……俺は誘つてねえよ」

リオ「このチキンヤローが！」

ジロー「うるさい！ リオだつてチキンだらうが！…」

リオ「言ひやがつたな！ 誘わなかつたオマエよりはマシだーー！」

ジロー「涼月がパーティならその執事の近衛だつて無理だらうが！

「

オレたちは格ゲーでバトリンがら言ひ合いをするオレたち。淋しい

.....淋しそうだなー。。

×

リオ「ただいま……」

ジローとゲームしてるのは虚しくなったから自宅に帰つてきた。  
つ.....一人は嫌だ.....クリスマスなんて滅びてしまえ(泣)

リオ「もうこい.....ふて寝してやるつー。」

腹も減つてゐるけど、なにもする気はないから寝るー。オレは部屋で  
もつダッシュしてベッドに潜り込んだ。

「あやつー。」

。

。

あやつー? つて聞こえたよな? ベッドも暖かいし。え? なに

? この家、オレ以外いないはずだよな？ こわつー？

リオ「誰かいるのか？」

オレは恐る恐る毛布をひとつはがす。

「はあい、リオくん」

リオ「！？／＼／＼

にこやかに挨拶をする人物につきに赤面した。

リオ「な、なんで、ここにいるんだよー 奏ー？」

そう、オレのベッドにいたのは涼月家主催のパーティに出席してい  
るはずの奏だった。

奏「あら、いけない？ あなたにクリスマスを誘われてたから来た  
のよ？」

リオ「そりじゃないけど……。だって、パーティ……」

奏「退屈だったから来ちゃった」

リオ「来ちゃった……って、オレは嬉しいけど、だいじょぶなのか？」

抜け出してきたってことだろ？ それは心配なんだけど。

奏「心配ないわ。置き手紙を置いてきたから」

それって、スバルにも言わずに抜け出したってことだよな？ 果てしなく、不安です。

奏「それより、リオくん

リオ「？」

奏「ビリビリで鼻を押されてるのかしら？」

リオ「な、なにもないぞ」

奏、今の自分の格好を知つて言つてんの？ 奏の格好は肩が出ていて、スカートの丈もかなり短い。色々際どい、かなり露出の高いサンタ服なんですよ？ 鼻血が出そうなんですけど…

奏「ふふ。なんでもないなり鼻を押されるとやめて欲しいわ」

リオ「やめるから、近付くのやめでもらえませんか？」

奏が小悪魔な笑みを浮かべて、オレに迫つてくる。いや、色々ヤバいくつてば！？

リオ「お、お願ひしますからー！？ 聖なる夜に悪夢を見るよくなことは勘弁願いたいんですよー！？」

奏「嫌よ。私だつて、我慢してたのよ」

リオ「へ？ ガマンつてな」

オレは言葉が続かなかつた。だって、あの奏が優しく抱き締めてきたんだぞ？ 発作の方は奏の治療プログラムのおかげでだいぶ改善できたから、これくらい平氣だぞ。

奏「あなたがパーティ会場まで迎えに来てくれると思ったの！」

リオ「いや、そんなこと言われてても……」

パーティ会場知らないし、奏に迷惑にならうとしたくないし。

奏「……チギング……」

リオ「今は、関係ないだろ？！？」

やめてくれ、オレの心をえぐるなー！

リオ「…………それより…………なんでそんな格好で、オレのベッドにこりんだよ？」

奏「プレゼントを届けに来たのよ」

リオ「マジで？ サンキュー。で、そのプレゼントは

奏「わ・た・し」

奏は抱き締めたまま、オレの顔を覗きこんで、可憐らしい笑顔でそう言つた。

リオ「！？／＼／＼ そ、そういうことはやめてください／＼／＼ 心臓に悪いです／＼／＼ クリスマスに奏に会えただけで嬉しいですからあ／＼／＼」

奏「／＼／＼／＼」

オレの言葉に奏も顔を赤くした。ヤベツ、メッチャカワイイんすけど……。

リオ「あ」

奏「？」

オレも奏にプレゼントあつたんだ。

リオ「はい、クリスマスプレゼント」

奏「ありがとウ」

枕横に置いておいた包みを奏に渡す。

奏「開けていいかしら?」

リオ「え?」

奏は一寧に包装を解いていく。現れたのは少し濃い蒼いリボンだ。  
店員さんに色々訊いて選んだんだ。

奏「……可愛いリボン……。着けていいかしら?」

リオ「え? いいよ?」

奏はオレの返事を訊いてから、リボンを着け替える。髪をおろしたとき、一瞬だけドキッとしたのは内緒だ。

奏「どうかしら?」

リオ「すつづけー、カワイイーーー ってか、奏はなに着けても似合

「うる

不安そうに訊く奏にオレは即答した。

奏「……ありがと。大切にするわ」

リオ「そ、そつか？　でも、奏、色々高価なプレゼントもらってる  
だろ？　なんかショボくて」

「メンな、と続ける言葉が遮られた。奏の綺麗な人指し指がオレの  
口唇に当たられたから。

奏「そんなこと言わないで？　どんなに高価なものをもらおうと、  
リオくんのくれたものには敵わないのよ。だから、ね？」

リオ「お、おう／＼／＼

奏は幼い子供をあやすように優しく言った。え？　なんだよ、これ。  
奏がいつもよりカワイイんだけど。いや、いつもカワイイんだよ？  
だけど、今日は半端ないよ？

奏「リオくん」

リオ「な、なに？」

奏「Merry Xmas」

リオ「ああ、Merry Xmas、奏」

奏は少女のような笑顔だった。いろんな笑顔を見せてくれるな、奏。  
これがクリスマスプレゼントって言われても全然いいかも。今年は  
今までにない、最高のクリスマスかもな。

リプトン「ひとつだけ心配があるんだ」

リオ「なんだよ？」

リプトン「奏のキャラ崩壊してない？」

リオ「ゴメン、今更だから」

リプトン「え？ マジで？」

リオ「マジ」

ジロー side

ジロー「いやー、いい天気だなー」

田曜日。天気は狙つたかのように、ぎんぎんの快晴だった。まあ、雷が鳴ろうが雹が降ろうが今日、俺たちの行く施設にはあまり関係ないんだけど。全天候型レジャー施設。その魅力はなんと言つても充実した屋内設備だろう。いくつものプールとアトラクションを完備した温室ドーム。人工的に作られた常夏の樂園<sup>パラダイス</sup>。春だろうが冬だろうがエンドレスサマー。まさに、都會にできたオアシスだ！

紅羽「……兄さん。ニヤニヤしそうだ」

目的地の最寄り駅の改札を抜けた瞬間、紅羽は呆れた声で言った。

紅羽「楽しみなのはわかるけど、そんな顔してるとロシア軍のパラシュート部隊にスカウトされちゃうよ？」

ジロー「されねえよ。それにこんなとこロシア軍のスカウトもない」

言いながらも、確認するように自分の顔を触る。妹の指通り、心

なしか口元がにやけてる気がした。まあ、しかたがなこと。だつて、  
デートだぜ？ 一セモノとはいえ、休日に彼女とデート。女性恐怖  
症を治す為といえ、女の子とデート。しかも涼月は外見だけなら超  
絶美人だ。男子高校生ならテンション上がりがつて当然だろ？ 恐怖症  
のせいで口つなことは一生無理だつて思つてた俺ならなおさらだ。

紅羽「もひ、わかつてゐるのかな。今田のデートの目的はあたしと近  
衛先輩が仲良くなることなんだから、ちゃんと協力してよね」

ジロー「ああ、わかつてゐるわかつてる」

紅羽「ホントかなあ」

紅羽は不満気にふうっと頬を膨らませた。

ジロー「やうこいや昨日、涼月と電話で喋つてたみたいだナゾ、なに  
話してたんだ？」

紅羽「はこや？ そんなの作戦会議に決まつてるじゃん」

「……」

おい、なんて不吉なこと言つてんだこいつ？ 高潮していたはずのテンションが急転直下に暴落してしまった。ていうか、あの屋上での出来事以来、ここづらめぢやくぢや仲良いんだよな。友好を深めるなんてレベルじやなくて、それこそ見てて気味が悪くなるくらい。」

紅羽「実はもう色々と準備してるんだ」

ジロー「ふうん」

紅羽「ちなみに兄さんのバッグにも仕掛けがあるから、不用意に開けちゃダメだよ」

にゃははと笑う妹。俺はマッハで肩にかけていたバッグを開けた。

紅羽「ああっ！ ダメだよ兄さん！ 近衛先輩のいるところで開けなくちや意味がないのに…」

騒ぐ紅羽を無視してゴソゴソとバッグを探る。迂闊だった。もしかしたらプラスチック爆弾とか仕掛け　　って、なんだこれ？ 雑誌？ よく確認しよう。バッグから引っ張り出すと……。聖典『工口本』だった。しかも、俺の部屋に隠してあるはずの秘蔵コレクションの中の一冊だった。

ジロー「つかまつたー!」

叫び声を上げながら、出てきたブツを聞髪入れずに近くの「」箱へと呑き込んだ。……わよなら、俺の秘蔵つ！」。

紅羽「うわっ、ひどい兄さん…せっかく準備したんだよっ!」

ジロー「うるせえ! ひどいのはおまえだろっ! ? おまえは人のバッグになんでもんを入れてくれてんだよっ! ?」

勝手に部屋漁られたあげく、聖典を持ち出されたんだぞ! 実の妹に発見されたとか恥ずかしくて死ねるわ!

紅羽「ええ~。じゃあなんなら良かったの? メイドさんのやつ~」

ジロー「やめりー。こんな往来で兄の趣味を暴露するな!」

紅羽「せっかく近衛先輩にあの本を見せて『ほら、うちの兄さんは変態なんです! 見てくださいこの本! ネコ!!!』ですよネコ!!! ! 『つて叫ぶつもりだったのに』

ジロー「おまえは実の兄貴の人生を終わらせる気が…?」

紅羽「うう……これで近衛先輩に兄さんは女人が好きだつてわかつてもられると思ったのに……。一生懸命お姉さまと考えたのに……」

がっくりとうなだれる紅羽。……甘かった。考えてみりやあの涼月と紅羽がタッグを組んでるんだ。どんな化学変化が起きようと不思議じゃない。

紅羽「でも、これで終わつたと思わないでよね。まだまだ仕掛けはいっぱいあるんだから」

紅羽はメラメラと邪悪な闘志を燃やしていた。……怖つ。こいつの行動力と涼月の頭脳が合わさつていると思うと軽く発狂しそうだ。これは本気で対策を練る必要があるな。強烈なボケをかます一人がコンビを結成しやがつたんだ。このまま一人でツツコミに回るだなんて到底太刀打ちできやしない。ここはリオと近衛とタッグを組むしかない。せめて二対三にして、数の暴力でねじ伏せるしかない！

ジロー「……って、リオは本当に来るのか？」

不安だ。限りなく不安だ。あの屋上でリオは何があつても行かない！ という意思表示してたし。微妙に機嫌も悪かったしな。ああ

なつたりオは簡単に考えを変えないし。でも、できれば来て欲しい。  
俺一人で女三人の相手は無理だ！

紅羽「それは安心して」

ジロー「？」

紅羽「お姉さまとちやんと会議したから！ リオ兄がいくら逃げようとしてもムダだもん！！」

ジロー「……そり、か……」

グッとサムズアップする紅羽。……リオ、ご愁傷さま。やっぱり紅羽と涼月を組ませるのは危険だ。『混ぜるな！ 危険っ！！』って、立て札が今すぐに必要だ！

紅羽「あ、お姉さまと近衛先輩だ」

駅から歩くこと数分。待ち合わせ場所に指定したレジャーランドの入り口に見なれた二人組の背中を発見。近衛と涼月だ。どうやら、何か話し込んでいるらしく、二人ともこっちに気づいてない。にしても、リオの姿が見えない。涼月から逃げ切れたのか？ リオがないならしかたない。こうなつたなら、近衛だけでも味方にしなけ

れば。あいつにまでボケに回られたら二対一。それこそ涼月の喜び。 そうなシチュエーション……別名、俺にとつての地獄！ の完成だ。 それだけは、なんとしても阻止しなくては……っ！

ジロー「よお、近衛」

精一杯の愛想笑いを作つて、背後から近衛の肩をポンと叩く。これで「やあ、ジロー。今日はいい天気だな」みたいな挨拶が

ジロー「ぐはつー？」

返つてきたりなんて思つた瞬間、いきなり、首を掴まれた。

ジロー「……」

えーっと、なにこれ？ 近衛なりのジョークかな？

スバル「動くな。動いたら容赦なく握り潰すぞ」

近衛は真剣な顔で右手に力を込めた。そのまま目を細めて確かめる ように俺の顔を睨み付けた後、ふうっと息を吐き出す。

スバル「ジロー。迂闊にボクの背後に立つな。危うく再起不能にするところだつたぞ」

何事もなかつたように右手が首から放れる。俺はショックで動けなかつた。

ジロー「あ、あの、近衛さん……」

スバル「ジロー……氣をつける」

ジロー「なにをだよ」

スバル「敵は、どこに潜んでいるのかわからないからな」

ジロー「敵つて……おまえ……」

軽く周囲を見回す。俺たちの周りはレジヤーランドに来た家族連れやカップルやらで溢れていた。別にどうつてことはない。平和でのぼのとした日曜日の光景である。

スバル「もし複数の武装した敵が現れたら、ボクはお嬢様をお護り

するので精一杯だ。だからすまないが、ジローもリオも自分の身は自分で守ってくれ

スバル様は刃のようひざらした田付きで周囲を警戒していた。はつきり言つて浮いている。どう見てもレジャーランドに遊びにきた人間の顔じゃない。ピンの抜けた手榴弾みたく殺氣立つてゐるぞ。……つて、今、リオつて言つたよな？

ジロー「おい、涼月」

奏「なにかしげ、ジローへん」

ジロー「姿が見えないけどリオのやつ、来てるのか？」

奏「何言つてゐの？ リオくんなりあつとこねわよ~」

ジロー「は？ ビーだよ？」

奏「下よ、下」

ジロー「下よ……つて、ふふつー？」

涼月が指差す方へ目線を向けると俺は吹き出してしまった。そこに  
は笑える姿のリオが鎮座していたのだ。

リオ「……なんだよ？#」

ジロー「い、いや……ふつ、くくく……」

俺と目が合うといかにも不機嫌です、といった声を出し、俺を睨むリオ。だが、格好が格好なだけに怖さなんて微塵もない。つてか、笑いを我慢するのがきついんだけど。

リオ「んだよ……言いたい」とがあるなら言え。それと笑いたきや笑えよ！ ちゅーと半端に笑われる方がどれだけ傷つくと思うんだ！？#」

それじゃ、リオからお許しを得たことだし遠慮なく。

ジロー「ふつ……あははははっ！？ な、なんなんだよ、その格好！ あは、あははははっ！？ い、犬？ 犬なのか！？」

俺は腹を抱えて、リオに指差しながら笑った。爆笑だ。だって、ワンワнстイルのリオが行儀よく『おすわり』してるんだぜ。あのリオがだぞ。

奏「可愛いでしょ？ これね、私と私のメイドがリオくんのために頑張つて作ったの。どうかしら？」

リオは自分の髪色と同じ色のキグルミを身に纏っていた。直立一本足で歩くワンちゃんのキグルミ。パークーみたいなデザインで顔が出るタイプだ。それに灰色の耳とシッポが装着している。

ジロー「あ、あははははっ！？」に、似合つてゐる、リオ！「…

リオ「やつぱり笑つなあ～！？」# ムカつくだよっ！」

びしつゝと指を指したんだらうが、俺の目にはぷにぷにした肉球が見えただけだつた。

ジロー「さあははははっ！ な、なに？ これって、シベリアンハスキーモデルにでもしてんの？」

奏「そうよ、よくわかつたわね。ジローくん、犬に詳しいの？」

ジロー「い、いや……さうじゃ、ない、けど……あはっ……あははははっ！？」

やばい、笑いすぎて腹が痛い。

リオ「笑うなって言つてますよねえ！？」#」

がるるるりと、唸るリオは今にも俺に飛びかかりそうな感じだった。

ジロー「あはははは！」

リオ「ジロー、エエ　ぐわわわわ！」

つてか、実際に飛びかかりやがった。だけど、それは俺に届く」となく変な奇声が聞こえただけだった。

奏「だめよ、リオきゅん。今から遊びに行くのにジローを殺そうだなんて」

リオ「　×　＊！？（約・オレが死ぬわ！？）」

リオの首にはめられてる首輪に鎖が繋がっていた。その鎖の先は涼月の手に握られていた。リオが飛びかかった瞬間に引っ張ったようだ。普通だったら死ねるぞ？

奏「ジローくんも笑いすぎよ。リオきゅんが怒るのもしかたないわ」

ジロー「…………悪かったよ、リオきゅん！」

紅羽「兄さん、謝る気ないよね」

リオきゅん「…………。リオきゅんってなんだよ。あー、笑いすぎて涙が出たよ。黒瀬のやつにも、今のリオを見せたい！」

リオ「ははは…………マジで…………はあ…………じりじ、いやうつか？#」

ジロー「…………うん、本当に」「めんなさい。だから、そのオーラをしまってくれ」

息を整えるリオからはとてつもない黒いオーラが溢れていた。やばい、マジギレに近い……。

奏「さて、今日は楽しみましょ。せっかくスバルを説得してここまで来たんだから、遊ばなくちゃ意味がないわ。リオきゅんも頑張つて連れて来たんだしね」

リオの黒いオーラを気にするもなく涼月は続けた。さすが、デビル涼月。

奏「そうよね、紅羽ちゃん。ほら、緊張しないで」

紅羽「は、はい、お姉さま」

俺の後ろで返事をする紅羽……って、ガチガチに緊張してゐるなあこいつ。

紅羽「こつ、こつ、近衛先輩。きよつ……今日は、その……よみじくお願ひします」

うえー、なんかショック。俺にはおやすみ代わりにラリアットをかますくせに、こうしてみると普通の女の子にしか見えない。

リオ「…………これが恋のパワー…………あのリトルモンスターをいつも大人しくさせてしまうのかよ…………」

『ねすわり』しているリオもなんかショック受けてるし。

ジロー「ここの様子なら大丈夫か」

俺は安堵した。紅羽には悪いが、ここの緊張つぶりじゃ近衛と打ち解けるのにも時間がかかるだろ。とりあえず、今のところはこいつらが百合な関係になるのを阻止する必要はなさそうだな。

スバル「……どこからでもここ……お嬢様はボクが……」

しかし、油断はできん。なにせ頼りにしていた近衛がこの通り、一番壊滅的なのだ。状況は恐れていたパターンへと急行している。

ジロー「なあ、リオ」

「こいつなつたらリオと結託して、一対三にしてやる。

リオ「なんだよ#」

返ってきたのは恐ろしく低い声。まずい、ここのままだとリオにまで裏切られる。

ジロー「まだ怒ってるのな。今度、なんか奢るから許してくれ」

リオ「奢るより、これを脱ぐの手伝え。一人じゃ脱げない仕組みになつてゐるらしいんだ」

ジロー「どうすればいいんだ?」

リオ「まず、首輪を外してくれ。ワンワンタイムから一刻も早く解放されたい」

俺は言われた通りに首輪を外した。……見ると首輪に『リオきゅん』と書いてあつた。デビル涼月、ほんとにリオをペットにでもする気がつ！？

リオ「どうした？」

ジロー「なんでもない」

これはリオに言わない方がいい。知らない方が幸せだ。

リオ「そうか。そんで、首のところに小さなボタンあるはずだから、それを押してくれ」

ジロー「これが」

ポチっと、音がしてジッパーが自動に落ちる。

リオ「サンキュー。やつと解放されたぜ」

リオは嬉々としてシベリアンハスキーのキグルミを脱いだ。

ジロー「なにがあつたんだ？」

リオ「……あ、聞くな。思い出すだけで身体が震える」

リオが言つた通り、身体が震えていた。本当になにされたんだ？  
ものすごく気になる。デビル涼月はなにをしたんだ？

リオ「……一つだけ言つておく」

ジロー「なんだ？」

リオ「……男ってのは無力だ……」

ジロー「うん、わかった」

遠い田をするリオからは悲壮感しか感じなかつた。これは、もう触れるのはよやう。

泰「それじゃ、やれやれ行こましょ。こつまじゅうじにたんじや時間がもつたいないわ」

スバル「やうですね」

涼月の先導でレジヤーランドへと入る。その際、逃げ出やうとした諦めの悪いリオを近衛が涼月の命令に従い、いつも簡単に落としたのはまた別の話だ。

## 第26話（前書き）

リオ「今年、最後の投稿だ」

ジロー「今年はありがとうございました」

リプトン「来年もよろしくお願ひします」

リオ「……マジでいてー……」

リオが腹をさすりながら、更衣室に向かって歩いている。当然、男女別なので涼刃と紅羽と別れた。待ち合わせは更衣室を出たところになつた。

ジロー「リオが逃げるから悪いんだろ」

俺は呆れながら腕に着けるタイプの一皿フリーパスを装着する。

リオ「オマエだってオレの立場になれば同じことあるに決まってる

ジロー「否定はしないけどな」

リオ「だろ? まあ、じいまできたらもう諦めるけど」

更衣室を抜けたら真夏の王国が待っている。そう考えるとまた気分が高揚してくるんだから俺の精神回路も単純なもんだ。リオも心なしか機嫌が直ったみたいだし。

リオ「そつこせ、ジローは昔から泳ぐの好きだったよな」

ジロー「ああ やつと着替えて泳ぎに行こうぜ」

意氣揚々と更衣室に入ろうとする　急に、後ろから上着の裾を  
引っ張られた。振り返ると、近衛が母親にすがりつく幼い子供みた  
く俺とリオの上着をぎゅっと掴んでいた。

リオ「スバル？」

スバル「リ、リオウ……ジ、ジロウ……//」

気のせいか、顔がやけに紅潮している。

ジロー「？ なんだ。忘れ物でもしたか？」

スバル「い、いや……その……//」

なぜか、耳まで真っ赤にして黙ってしまった。なんだう。もしかして急に具合でも悪くなったのかな、とか考えていたら、ふと重要なことを思い出した。近衛って、女じょん。

リ・ジ「……」

絶句する俺たち。これは……どうしたらいいんだ。

リオ「……そういえば、体育の着替えとかでもスバルって教室にいなかつたよな」

ジロー「せつと、せつこうときはざっかに隠れているんだろうか？」

俺たちは近衛に聞こえないように小声で話す。

リオ「今は戻れる場所なんてないよな」

先に進むにはこの更衣室を通過するしかない。

ジロー「……わかった。俺たちが引っ張つてくからおまえは田を開じてひ」

リオ「それなら入れるだろ？」

即興で出した案に、彼女は「クンと小さく頷いた。かくして、俺たちはゆっくりと魔の領域へと踏み込んだ。当然ながら中は男の裸で溢れている。凄まじく描写しづらい光景だ。女である近衛に見せられるものじゃないな。

リオ「とーちやぐ。ここならだいじょぶだから」

スバル「ああ／＼／＼

盲導犬の「ごとく、近衛を更衣室内にあるシャワーまでする。シャワーカーテンさえ閉めれば中の様子は見えなくなるからな。あと残念だが覗かないぞ。いや、マジで。さすがの俺も命が惜しいんだよ。

スバル「ジロー？」

ジロー「ん？ 着替え終わつたか？」

近衛が着替え終わったのかこつそりと顔を出す。ついでにいうと、俺たちはすでに着替え終わつてる。

スバル「ああ」

リオ「ロッカーに荷物入れるから貸せよ」

スバル「うん」

リオ「！？」

ロッカーに入れる為に近衛から荷物を受け取るリオだが、荷物を落としかける。

ジロー「なんだ？」

リオ「いや、やけに重くて……な、なにが入って　」

なにが入ってるのか確かめようと軽く覗くと、中には拳銃やらスタンガンやら手錠やら……。

ジロー「じ、銃刀法違反ですよ、近衛サンツー？」

スバル「ん？ それは護身用のスタンガンとガスガンだ。本物じゃない」

近衛はガスガンを構える。

リオ「ホンモノじゃないのか」

……なんで、そんな残念そうな声を出すんだよ、リオ。

スバル「ただし、ぱつちり改造が施してあるから急所に数発当てれば十分に人を殺傷できる」

ジロー「なんでそんなもん持つてきてんのつー？」

スバル「なにを言つている。外出するときの必需品といえば、ケータイ、ハンカチ、拳銃。それが執事の一般常識だ！」

ジロー「それ、執事関係ないよねつー？」

いつたいどこの軍隊の常識だ。

リオ「スバル」

リオが真剣な顔で近衛を呼ぶ。これは説教か？

スバル「なんだ」

リオ「一丁譲つてくれないか？」

ジロー「なに言つてんの、リオ！？」

リオまでボケに回るのか！？ ワンワンスタイルを笑ったのをまだ根に持つてんのか！？

スバル「リオなら安心だ。あとでボクの最高傑作の物を渡そ！」

ジロー「近衛もなに言つちやつてんの！？」

なにが安心なんだ！

リオ「サンキュー」

ジロー「近衛も渡そ！とすんな！」

俺は三人分の荷物をロッカーに押し込む。もつ嫌だ、遊ぶ前からなんかすげえ疲れた……。

リオ「……なあ、ジロー」

ジロー「銃刀法違反は禁止だ」

リオ「……違う。スバルのバックの中身、違和感なかつたか？」

リオが小声で話しかけてきたから俺も小声で返す。

ジロー「え？ たしかに何か足りない気がするけど」

リオ「だよな。あれだけ護身用の道具があるのにあるべきモノがかけてるんだよな」

それは俺も思った。だけどそれがなんなのかわからなかつた。

スバル「まだ行かないのか？／／／」

リオ「あ、『メン』

ジロー「行くからまた目を閉じてる」

スバル「ああ」

近衛が早く行きたいオーラを出して いたから、小さな違和感を振り払い、来たときと同じ要領で更衣室を脱出するのだった。

ジロー side out

## 第27話（前書き）

明けましておめでとうございます！今年もよろしくお世話と更新していく  
と願っています。じたな小説ですが、よろしくお願ひいたします。

リオ side

奏「遅かつたわね」

更衣室を出たといひで、奏の声がした。

リオ「ああ、『メ』」

そりまで言つてオレは言葉をなくした。

奏「中でいけないことでもしてたんじゃないでしょうか？」

ジロー「そんなわけあるか。いつの苦労も知らないで

気づいたのか、ジローも言葉をなくした。だつて、しかたなくね？  
田の前には水着姿の奏。黒のビキニ。イメージ通りつて言つたら  
そんなただけど破壊力が半端ない。スタイル抜群！ 出るとこ出で  
んのにウエストや太ももがすらつとしてるのがすげえ。何を食つた  
らいいのなるんだ？ 隣には紅羽。こちちはその……なんて言つかノ  
ーロメントをお願いしたい。いや、別に可愛くないわけじゃないん  
だぞ？ 真っ赤なビキーで十分似合つてるんだけど、横にいるモン  
スターと比べてしまつてどうしても哀れみの目を向けたくなる。だ

つてさ、スタイルが……。

紅羽「兄さん、リオ兄。なんか失礼なこと考えてないよね?」

じろりと睨まれた。いいカンしてんのね。ヘタに意見するとフラグ  
なしで強制イベントが発生しそうだからスバルに話しかけよう。ジ  
ローも危険を感じたのかスバルに逃げたな。

ジロー「オレンジのパークータイプの上着にハーフパンツか」

スバル「女物の水着を着るわけにもいかないからな」

スバルは小声で言つ。

リオ「まあ、それが一番無難だな」

「やつぱり男連れじゃん……」

「あんな綺麗な娘が一人なわけねーじゃんかよ」

「誰が彼氏なんだ? とりあえず、あの眼鏡はねえな」

やつぱり奏は注目されるわな。……なんか、ビキー姿の奏が男に見られるのはムカシク。

リオ「ジロー、奏の隣行け」

ジロー「お、おひ」

「な、なんであんな冴えない眼鏡野郎が……！？」

リオ「あ、っ！？」

「…………ひいっ！？」

ジローが奏の隣に立つと周りのヤローたちから非難の言葉が聞こえてきた。ジローを悪く言つていいのはオレだけだ。オレは周りに睨みを利かせ散らす。

紅羽「あ……あの、近衛先輩……」

紅羽がモジモジしながら近衛に話しかけた。

紅羽「その水着、とっても似合つてます。かつーーいーです」

スバル「ああ。そつちの水着も可愛いな」

紅羽「ええっ！　い、いや、そんな……可愛いんだなんて……」

頬赤く染めてはにかみながら照れている。

紅羽「それで……よかつたら一緒に泳ぎませんか？　実はあたし、泳ぐのが苦手で……その、できれば教えて欲しいなあなんて思つたりして……」

ウソだ！　ウソつきがここにいる！！　オマエ泳ぐの大得意だろ。たしか五十㍍潜水とかよゆーでできたはずだぞ。

ジロー「……涼月の入れ知恵か？　上手いことアピールしてやがる

「……」

奏はなにがしたいんだ！？　スバルと紅羽をコリつ娘にしたいのかよー？

スバル「別に構わないが……」

スバルはチラッと奏に目線を向けた。主の安全が気になるみたいだ。

奏「大丈夫よ、スバル。いざとなつたらリオくんとジローくんが護ってくれるから、私のことは気にしないで行ってきて」

スバル「……わかりました。お嬢様がそいつじゃるのでしたら」「

オレたちが口を挟む前に会話が終わってしまった。いざとなつたらつて何さ?」

スバル「頼むぞ、ジロー、リオ。信用しているからな」

リオ「ああ……」

ジロー「おう……」

念を押すように言って、近衛は紅羽と一緒にプールの方に歩いて行つた。そんなこと言われても。信用してくれんのはちょっと嬉しいけど、いつたい何から護ればいいんだよ。」

奏「ふふ、そんなに困った顔しなくても大丈夫よ。あの娘、ひょいと神経質になつてゐるだけだから」

ジロー「ちよっとして……あいつ銃まで持つてたぞ？」

奏「まあ、場所が場所だからね」

ジロー「はあ？ なんだそれ。おまえらここに来たことがあるのか  
よ」

奏「ええ。子供の頃に一回だけ。その頃はこんなに立派じゃなかつたけどね」

奏は思い出すよつこ少しだけ目を細めた。

リオ「たしかここまでじやなかつたな」

オレも一回だけ連れてきてもらつたことがある。そしてここで誘拐事件に巻き込まれたんだよな。

奏「懐かしいわ。あのときは色々と大変だったから」

ジロー「大変つて……。なんだよ。それこそ誘拐でもされたのか？」

ジローは軽いじょーだんで言つたつもりなんだらうけど、なぜか奏は黙つてしまつた。

奏「……」

え？ なにその沈黙。まるでホントにここで誘拐されたことがあるみたいにな……。けど、オレが誘拐に巻き込まれた話をしたときもそんなこと言わなかつたじゃんか。

奏「あのとき、リオくんには言いつらかつたんだけど。子供の頃、私とスバルはここで誘拐されたことがあるの」

リオ「なつー？」

ジロー「……え？」

また得意のウソとも思つたけど、違う。その証拠に奏の表情が今までにないくらいに真剣だった。

奏「もう何年くらい前になるかしら。ここで遊んでたら、うつかり拐われちゃつたのよ」

ジロー「うつかりつて、なんでそんな……」

奏「さあ？ 目的は身代金だつたそよ。まあ、事件 자체はすぐに解決したんだけどね。犯人たちは全員捕まつて、私たち一人も無事に解放された。でも、どんなに期間が短くても誘拐されたのは事実よ。そんなこともあって、基本的に私は一人で外出するのが禁止されているのよ」

ジロー「でも、この前はおまえ一人で漫画喫茶に行つてたじやねえかよ」

奏「あのときは別の使用人が一緒にいたの」

リオ「んじゃ、スバルがあんなにピリピリしてたのは……」

奏「きっと昔のことを思い出しちゃつたんでしょうね。それに、あの事件がきっかけでスバルは変わっちゃつたから」

リ・ジ「変わっちゃつた？」

なんで？ 事件はちゃんと解決したじゃん。

奏「たぶん、スバルは責任を感じちゃったのよ。私が拐われたのは自分のせいだ。執事として主を護れなかつた……ってね」

ジロー「そんな無茶苦茶な……」

リオ「ムチャだろ、そのときのスバルは力のない子供だったんだし……」

奏「あの事件以来、私とスバルの関係はぎくしゃくしたまま。あなたたちだって学園での私とスバルの様子は見たでしょ。家でもんな調子なの。もしかしたらスバルにはまだ負い目があるのかかもしれないわ。だから私とあんまり会話をしたくないんだと思うの」

リ・ジ「……」

奏「けど、私はもうそろそろ仲良しくして欲しいのよ。また昔みたいにね」

そう言えば、昔は奏のことを「カナちゃん」って呼んでいたんだよな。普段の様子からは想像もつかないけど、事件が起きる前は今よりずっと仲が良かったんだろうな。それこそ、友達みたいに。

ジロー「もしかして、今日ここに来たのって近衛を昔に戻すためか？」

奏「ふふ、どうかしらね。でも……」

そんなに簡単なことじゃないわ、と奏は歯みしめるように呟いた。

奏「リオくん、ジローくん。あなたたちに女性恐怖症つて弱点があるのと同じよ」、スバルにも弱点があるので。私の執事をやっていく上で、致命的な弱点がね」

ジロー「致命的……」

奏「それさえ克服できれば、スバルにも余裕ができるかもしないわね。そうしたら、また戻るかもしないわ。昔みたいに、仲の良かつたあの頃に……」

リオ「……奏」

ジロー「……涼月」

奏「はい、そろそろ話は終わり。私たちも泳ぎに行きましょう。時間は有限よ」

プールの方に歩き出した彼女はいつも奏に戻っていた。

奏「ほら、ほんやりしてないで。ジローくん、今あなたは私の恋人でしょ！」

と。「」く自然にジローの腕に奏の腕が回された。

ジロー「さやあああ！ 胸が！ 僕の一の腕付近にたしかな弾力を持つ柔らかな凶器の感触が！ し、死ぬ！！」

奏「大丈夫？ 急に顔が真っ青になつたけど」

ぎゅっとジローの腕を抱きしめながら奏は訊いていた。……怖え。このお嬢様、狼狽えるジローを見て心底楽しんでいらっしゃる。

「なあ、あんな冴えない眼鏡野郎があんな美人の相手なんて何か間違つてないか？」

「美女と野獸つてやつだよな」

「だよな。あの銀髪の方ならまだ納得できるんだけど」

「つてか、あの銀髪田付き悪くね?」

リオ「あ? なんか文句あんのか? 文句あんなら訊いてやるわ」

「「ひいつー?」」

凄みを利かせた睨みで周りの野次馬を追い払う。奏が美人なのはわかるけど、さつきからつとしいことにの上ない。

奏「そんなに怖い顔しないで。言つておくけど」「んなのまだ序の口よ。多少荒治療じやないと、あなたたちの恐怖症は改善されそうにないから」

微笑みながらジローの身体と、ついでにオレの身体も引っ張ついく奏。

リオ「つて、おい! なつんでオレまで引っ張んだよ! オレは泳げないんだってばつ!..」

奏「あら? リオくん、水泳部の助つ人してたことあるから泳ぐのは得意なはずよね?」

なんで奏がそのことを知ってるのか気になるけど、今訊くことじゅ  
ない。

リオ「いや、泳ぐことに関して好きだし大得意だけど。キズが開く  
可能性があるんだってば！」

みんな忘れるかもしれないけど、左腕がパツクリ切れたんだよ（  
第2話参照）？ せつかく塞がりかけてんのに泳いでキズが開いた  
らどうしてくれんの？！

ジロー「そういうや左腕切つてたんだっけ？ 調子はどうなんだ？」

リオ「やつぱり忘れてたのな。ボチボチつてとこだ。つてことで、  
オレはあっちで日光浴でもしてるから。なんかあつたら呼んでくれ  
よ」

奏「あ」

オレの腕を掴んでいた奏の手を優しく払い、サマーべッドがある場  
所に向かう。その際、奏の哀しそうな声が聞こえたけど知らない振  
りだ。

ジロー「ちゅ、ちゅつと待てよー。」

リオ「待たねえの。それにオマエと奏は恋人同士なんだろ？ オレはどう見てもオジャマ虫じやんか。恋人たちのジャマなんかしたくなえの。そいじゃ、あとはお若いもん同士仲良くやってくれ」

オレは後ろ手を振りながら一人から離れる。いくら恋人『じつこ』だろうが、ジローと奏のそんなところを見ていられるかよ。ムカついてしかたないっての。

リオ「はあ～……ヒマだし一瞬りすつかな」

オレはサングラスを装着し、サマーベッドに寝つ転がり、日光浴を開始する。ホントに何しに連れてこられたんだろうね、オレ。

ジロー「ぎゃああああ！ や、やめつ

「ぶしゃ―――つ――」

離れて数分もしないうちに、ジローの悲痛な叫び声と鼻血の噴出音が聞こえてきた。奏のやつ、初っぱなから飛ばしてんな。

ジロー「ま、待て待て！ なんか趣向が変わってないか！？」 ちよ

「

「ぶしゃ———つ……」

すでに第一射噴出。エンジン全開ですね。しまったな、医務室の場所を確認するの忘れたな。このままだとジローが出血多量で死ぬな。

「あ、あの……」

リオ「ん？」

声をかけられた気がしたから、サングラスを外し起き上がる。そこには歳上と思われる女性が一人いた。歳上はかなり苦手なんだけど。

リオ「えっと、なんですか？」

「あ、あの……今、一人なんですか？」

リオ「ええ、まあ、そうですね。連れがそれぞれカップルなんで。オレはハバチですね」

「その、ヒマなら私たちと遊んでくれませんか？ 私たちも遊びなんですね」

リオ「いや、ヒマつてわけじゃ……」

「でも、一人で寝てたんだよね？」

リオ「まあ、そんなんですけど……見ての通り、ケガしてて。今日ここ来たのもただの見張り役なんで」

「それじゃ、遊ばなくともいいから少しお話しませんか？」

ケガをしている左腕を見せるけど、そう返ってきた。それに一人はオレの両サイドのサマーべッドに座る。んー……あつせり、引き下がると思つたけど、意外にしつこいんだな。

「そのケガどうしたの？」

リオ「え？ 友だちとワルフザケしてたひょう」と……

「やつぱり男の人なんですね。やんちゃなのも素敵です」

リオ「はあ……そうですか……」

ゴメン、マジで誰でもいいから助けて。目が獲物を狙ってる感じがするから。

「ねえ、君、なにしてる人?」

リオ「一応学生ですけど」

「何大なの?」

何大? もしかして大学生に間違われてる?

リオ「いや、高校生なんで」

「え、嘘!? 歳下なの!?!?」

「見えないですね」

リオ「あー……老けてるだけですよ」

「…………自分で言つて哀しくなつてきた。つてか、マジで誰か助けてください。なんか逃げ場がないんですけど。

奏「リオくん」

なんて、心の中で助けを求めてると奏が田の前に立つていた。心なしか怒つてゐるよつとも見えるんだけど。

リオ「どうしたんだ？」

奏「どうしたのですって？あなたが私を放つて、他の女性と話してゐるんですもの。気になつたのよ」

「え？ あ、あの彼女なの？」

リオ「は？ いや？」

奏「そうですね？」

え？ 何言つてんですか、奏さん？

「やつなんですか。それじゃ私たちはこれで」

奏から逃げるよ<sup>ウ</sup>に女性一人は去つていった。なんだつたんだ？

リオ「……とりあえず、助かったかな。奏、ありがと」

奏「気にしないで。それより、リオくん。迷惑なら迷惑だとはつきり言つのも優しさよ」

リオ「あ、ああ……。といひでジローはやつしたんだ？」

奏「ジローへんなりあや！」

リオ「あやこって……ジ、ジロー！？」

奏の指差した方を見ると、真つ赤な水のところにジローが浮かんでいた。

リオ「なにしたんだよ、奏ー？」

奏「私はなにもしてないわよ」

しらつと言つ奏。だけど、オレにはその笑顔が歪に見えた。……ジ  
ロー、オマエ、ホントになにされたんだ？ オレは疑問に思いつつ、  
ジロー救出に向かうのであった。

## 第29話（前書き）

あややん、すみません。ボクにはムリでした。

奏 side

奏「……あのチキング……」

ジローくんで遊びながらリオくんがいる方を見てみると、あらうじとか女子大生一人に声をかけられていた。……どうこうことなのかしら？ 私の誘いを断つておきながら、他の女性と仲良く話をしているなんて。ふふ、いけない趣味に田覓めちゃうくらい言葉攻めにしてあげましょうか。

ジロー「お、おい……す、涼月様？ なに怒つておいでなんですか？」

奏「ジローくん、」めんなさい。少しの間、寝てしまつだい」

ジロー「は？」

キヨトソンとするジローくんを私は女性恐怖症の発作で失神させた。ジローくんは血の海に浮かんでいた。なにをしたのかはヒ・ミ・ツ。

奏「ジローくん、あとで何かお詫びするわ」

どうしてなのか。リオくんが他の女性と話しているところを見ると、胸の奥がざわついて、いつも涼月奏でいられなくなる気がする。そんな姿、誰にも見せたくないの。もちろん、スバルにさえ。私は静かにリオくんのところに向かう。

「ねえ、君、なにしてる人？」

リオ「一応学生ですけど」

近づくにつれて会話内容が聞こえてきた。どうやらリオくんがナンパされているようね。まあ、リオくん、かつていいもの。ナンパされるのも当然よね。けどなんだか、すうぐ気に入らない。大事なペットが奪われる感じだわ。

「何大なの？」

リオ「いや、高校生なんで」

「え、嘘!? 岁下なの!?!?」

「見えないですね」

リオ「あー……老けてるだけですよ」

リオくんもリオくんよ。迷惑なうはつせり言えぱいいの。そんな優しい笑顔を見せるから相手がつけ上がるのよ。けれど、その瞳はどこか不安そうに揺れていた。女性が怖いのを慮るので精一杯なのね。私は我慢できず、気がついたらリオくんの名を呼んでいた。

奏「リオくん」

名前を呼んだのが私だとわかると不安そつた瞳から安堵したような瞳に変わるリオくん。……ビーッショウ、今の、すいへ嬉しかった。

奏 side

×

リオ side

リオ「つたく……ホントになにしたんだよ。プールがプチ血の海地獄になつてゐし。チハリたちが見たらちよつとしたトラウマもんだぞ」

今、オレたちは医務室にいる。ジローはベッドでぐっすりと寝ている。あのあとすぐにはジローを回収して、血の海の処理を近くにいた係員に頼んできた。

奏「知りたいなら教えてあげましょうか？ もちろん、あなたの身体でね

するけど、オレの首に奏の細い腕が回され、耳元で妖艶に囁かれた。ついでに背中に超絶柔らかなマシコマロが当たつてるとんでもけどつ！ ヤバイっす！ かなりゾクッときましたよう！

リオ「ちょ、タンマー・マジでタンマーー……」そのままだとオレも失神しちゃこめますからあ……

奏「……[冗談]よ

冗談に聞こえませんでしたからあ！ なに？ まだなんか機嫌悪いんすか！？

リオ「奏、なんか怒ってる？」

奏「そう見える？」

見えるから訊いてるんです。

奏「そつなりリオへんぱどんな」機嫌とりをしてくれるのかしら

リオ「ちょ、か、奏?」

奏は妖しい笑顔で迫ってきた。

リオ「へ?」

ストンと、オレはベッドの上に倒れていた。え? なに? 今なに  
が起こったんだ。

奏「ふふ」

そして、オレの腰に乗る奏。病室の再来? だけど、密着レベルが  
かなりアップしている。だつて、お互い水着ですよ? 奏の柔すべ  
な肌が直に感じられるんですよ? 奏はそれがわかっているのか密  
着度をさらにあげるか如く、オレに強く抱き着いてきた。奏の甘い  
匂いが鼻腔を撲る。なんで女の子ってこんな甘いの? .....ああ、  
どんどんとオレのちっぽけな理性が削られていく。なあ、奏? い  
くらオレが女性恐怖症のチキンヤローでも健全なオスなんですよ?

理性が消えて襲つ可能性だってあるんですか？

奏「リオくんに限つてそれはないわ」

オレの心の声に答える奏。やつぱり奏はオレの心が読めるんだ。

奏「バカなこと言わないで。全部、口にしてたわよ？」

リオ「ウ、ソ……はあはあ……です、よね？」

奏「嘘じやないわ。本当のことよ」

なにそれ。すげえ恥ずかしいんですけどーーー

奏「それにリオくん、今の状況だけでの有様じゃない。リオくんが想像したようなことをするなんて到底無理よ」

奏の言つ通り、オレは酷い頭痛と過呼吸氣味だつたりする。男としては、なんとも情けない。

リオ「だつ、たら……はあはあ……もつ、はなれ、て、くだしゅい

……

奏「うふふ、エリシヨウカシラ」

「うわー超イイ笑顔ですね。……サタン奏が降臨したよ。誰か助けてー。このままだとオレ、違う意味で死ねるから。

ジロー「なにしてんだ？ おまえ！」

心の中で助けを求めるなら、いつの間にか起きていたジローが呆れた  
ようにオレたちを見ていた。

リオ「めが、さめ……たか。たしゅ、けて……」

ヤバイ。呪律が回つてない。このままだとマジで失神する。

ジロー「言葉の繋がりがいっさいないな。おい、涼月。いい加減に  
しぃ。せっかく遊びに来たのを無駄にするなよ」

奏「それもそうね。ジローくんに言わるとなんだかムカつくけど

奏はジローに対して、酷い」と言いながらオレから離れた。た、助かつた。

ジロー「それならそろそろスバルに戻らうが」

奏「そうね。私の姿が見えないってスバルが暴れて、周りの物を壊しかねないわね」

ジロー「そんな怖いことになるのかよ」

奏「あら？　冗談じゃないわよ」

それを訊いた瞬間、オレとジローはベッドから素早く降りるのだった。

リオ「結構食つたよな」

ジロー「やうだな」

あのあと、オレたちはダッシュでプールに戻りスバルの暴走を未然に防ぐことに成功した。そのあとはジローと奏は指が気がすむまで泳ぎまくつてましたとも。ん、オレ？なぜか奏の手によつて、首輪と鎖でワンワントライムを再度体験させられましたけどなにか？そこでスバルと紅羽と合流して昼飯。そのとき、話し合つて、午後からはアトラクションで遊ぶことになった。まあ、ジローにとつてはその方がいいだろ。なんせ、午前中だけで鼻血噴出回数が一ケタに届いていたからな。ジローが鼻血を噴くたび、奏は笑顔をみせていたけど。

リ・ジ「……つておい、なんだこれ」

それで今は、お化け屋敷の前にいる。なんでもここにあるアトラクションの中で一番の話題だそうだ。水着のままでも入れるらしいけど。……オレたちはただただ驚愕していた。

『沈黙ヒツジと愉快な仲間たち』

田の前にあるお化け屋敷の看板には、血のよつに赤い文字でたしかにそりが記されていたのだつた。

奏「あら、知つてゐるの？」

リオ「いや、知つてゐるもなにも……」

沈黙ヒツジ。ここにきてまさかの再登場かよ。できれば一度とお目にかかりたくなかつたのにな。ゲーセンでの出来事も、実はコイツの呪いじやね？ アトラクションである廃病院っぽいデカイ建物の外觀には、例のカワイイクテフオされた羊さまが所々にあしらわれている。やっぱり何匹かは口が赤い。それに奏にあげたヌイグルミの爆笑オオカミと宇佐美さんにあげた羞恥ウサギもいた。

ジロー「縁起でもねえからな！？」

ジローのツツコミが炸裂した。……なんだ、このキャッチコムー。

『今流行りの「ワカワイイ！ キミのハートも心筋梗塞！」』……つて、確実にアウトですかあ！――

リオ「なあ……やっぱりやめないか？」

奏「え？ どうわけじゃないけど……」

ジロー「わざわざわけじゃないけど……」

「のキャラッチャペーを見たら入るのを躊躇つはずなんだけどな。

紅羽「うう、あたしもちょっと苦手かもです」

紅羽は青ざめた顔で奏にくついていた。そういうや昔からオカルト系が苦手だったな。実体のない相手なんて勝てる気がしないとか。まあ「コイツらしいってちやららしいんだけど

紅羽「でも……近衛先輩が入るんなら……」

やな予感がしたから横田でスバルを見る。案の定、スバルはブキミな羊たちに熱烈な視線を注いでいた。うわお……すっかりコイツらのファンなんですね。

リオ「しかたない、並ぶか

スバル「ああ！」

興奮気味のスバルを先頭に順番待ちの列に並んだ。

ジロー「ふ、不吉だ……」

順番待ちをしてこる間、退屈させないためか、並んでいる列からは出口の様子が見られるようになっていた。出てくる密のリアクションを見て楽しもうってわけね。

「ひいい！ 呪われるーー！」

「助けて！ あれが頭の中から消えないの……」

「ぐ、来るぞ！ ヤツらが来るぞ！ ひやははは おまえら全員  
もうダメだああつー！」

でもや、出でくる密たちが口々に常軌を逸したことを叫んでるのはどうかと思うんですけどねえっ！ 中には失神して白目を向いたまま担架で運び出されてくる女の子までいた。心臓の悪い方は遠慮くださいって注意書きがマジ怖いッス！

紅羽「あわ、あわわわ……」

紅羽も奏に抱きつきながらガタガタと震えている。ムリもないか。列に並んだ時点で体調を崩してリタイアする密までいるんだしさ。

奏「紅羽ちゃん、やつぱりやめた方がいいんじゃない？」

もはや顔が蒼白を通り越して土色になってしまった紅羽に奏が囁いた。

リオ「オレもそう思つ。」そのまま入つたら一度と戻つてこれない氣をえするよ。物理的にも精神的にも」「

奏「私とつぶくんがついてあげるから、列から出ましょ！」

リオ「とにかくでジロー。スバルと一緒に楽しんで！」

ジロー「よし、わかった！……って、おい、俺も入んなきゃダメなのがよ！」

さすがジロー。いいノリッショ!!だよ。

奏「なによ。男の子なんだから我慢できるでしょ！」

ジロー「それなりおまえの横にこるやつもだらうがー。」

ジローがぴしつとオレを指差す。

リオ「…………ひて、皿ひしるナビ

奏「リオくそはここによ」

リオ「いいんだってぞ」

ジロー「理不尽だー チクシヨーーーー。」

奏「なーん。ジローくんはー」の程度のことが怖いチキンくんなのか  
しりへ。「

ジロー「ぐつーーーー、てめえ……ー。」

奏「違うんだったら行つてきて。私たちせめてお皿を食べた売店  
で待ってるから」

言つが早いか、奏はオレと紅羽の手を引いてあつさり列から抜けた。  
「どうか、手を握る仕草がナチュラル過ぎてかわすヒマさえなかつ  
たんだけど。

リオ「なんか飲みもん買つてくるわ。アイスティーでいいか?」

奏「ええ。紅羽ちゃん大丈夫?」

紅羽「だいじょうぶです」

売店に着き、素早く空いているテーブルに座り突っ伏す紅羽。並んで  
いるだけでそんなに精神を削ったのか、コイツ。

リオ「アイスティーアーツとコーラください」

注文するとすぐに用意され、金を渡し、奏たちの元へ向かう。

奏「お断りします」

「ちょっと遊んでくれるだけでいいからさー」

つて、おい。奏がナンパされてる？　いや、まあ、奏はスタイルいいし、綺麗でカワイイからナンパされるのはわかつてたけど。紅羽のやつは寝てんのか？　テーブルに突っ伏したまま動きがない。起きてたら、追い払うもんな。にしても、ほんの数分、目を離したらけでヤローが寄ってくるには驚きだ。……つてか、なにあのヤロー？　なに馴れ馴れしく奏の腕を掴んでいやがるんですか？　オレ、ちょっとムカツてきちゃいましたけど？

「ねーきみさー、モ『デルかなんかやつてる？　めっちゃスタイルいいし』

ナンパヤローの手が奏のぐびれに向かい伸びた。

奏「やめ」

ふわりとオレの上着のパークーを奏にかける。

奏「リ、リオ、くん？」

リオ「……オレの大事な人に……いつたい全体なんの『』用でしちゃうか？　#　事と次第によれば今すぐにでも#」

奏「…？／／／

「す、すみませんでしたー！？」

オレは奏を後ろから抱きしめ、ナンパヤローを殺さんばかりの田で睨み付ける。そうするとアッサリと逃げていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4056y/>

まよチキ！ダブル！！

2012年1月8日18時45分発行